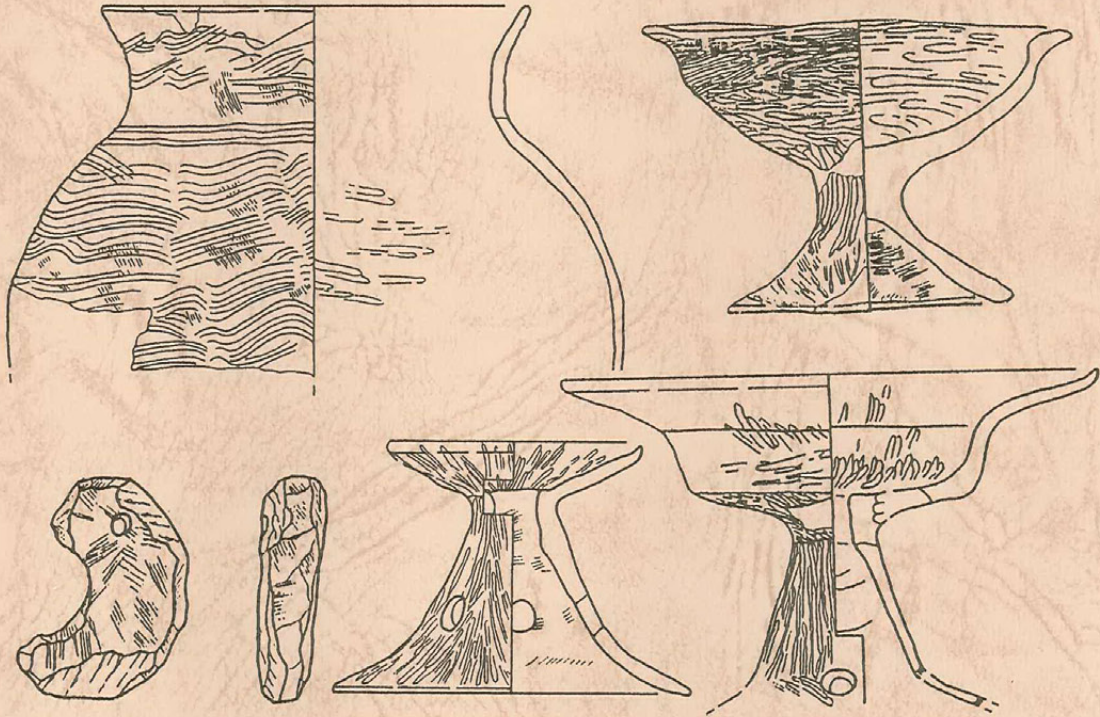


こみやまいせきぐん  
込山遺跡群

# 込山 D 遺跡

—長野県埴科郡坂城町八十二銀行店舗建設事業に伴う緊急発掘調査報告書—



2007.3

株式会社八十二銀行  
坂城町教育委員会

込山遺跡群

# 込 山 D 遺 跡

2007.3

株式会社八十二銀行  
坂城町教育委員会

## 序

坂城町教育委員会教育長 柳澤 哲

今回発掘調査を実施した込山遺跡群には、縄文時代～平安時代の集落址を主体とする込山A・B・C・D・E遺跡が存在しています。また、同遺跡群内には平安時代頃の豪族の私寺であった込山廃寺も建立されていたことが今までの考古学の成果でわかっています。このように原始・古代の遺跡が存在する重要地域でありながら、近世においては当時の幹線道路であった北国街道が同遺跡群内を通過し、宿場町として賑わっていたことも文献史上から判明しています。

発掘場所は本遺跡群内では西側に所在する込山D遺跡で、前述した近世の北国街道に面し、当時の往来によって賑わいを見せていたことが想像できる場所にあたります。現在は町の中心市街地となり、商店等が軒を連ねている場所にあたります。その商業の中心的な存在である株式会社八十二銀行坂城支店が置かれている場所が今回の調査地で、銀行の新店舗の建設に先立つ発掘調査でした。

今度の発掘調査では、残念ながら以前建設されていた建物によって遺跡が壊されてしまっているところもあり、完全な様子は分りませんでした。しかし、弥生時代から古代の住居跡が見つかり、当時の様子がおおよそわかるようになりました。また、近世の宿場町の状況も、出土した古銭等から解明する手掛かりが得られ、これも今回の大きな成果と言えます。本書にはその成果が詳細にまとめられておりますので、今後の研究の一助になれば嬉しく思います。

最後になりましたが、発掘調査は遺跡の重要性を理解していただいた株式会社八十二銀行の皆様方のご協力によって行うことができました。厚く御礼申し上げます。また、寒い中での発掘調査となってしまう、作業にあられた方々には大変な状況下での作業となってしまったわけですが、遺跡に対する熱い情熱のもと調査が実施できたと感謝しております。また、関係機関、各位には文化財の保護の目的趣旨を理解していただき、ご協力いただきましたことに心から御礼申し上げます、序文とさせていただきます。





込山D遺跡航空写真



## 例 言

- 1 本書は、長野県埴科郡坂城町込山遺跡群込山D遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社八十二銀行より委託を受け、坂城町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査所在地および面積  
込山遺跡群込山D遺跡 長野県埴科郡坂城町坂城6164-4 他 390.04 m<sup>2</sup>
- 4 調査期間 現地調査 平成17年10月17日～平成18年1月27日  
整理調査 平成17年1月28日～平成18年3月20日
- 5 本書の執筆・編集は、助川・田中が行った。
- 6 本書の作成にあたり田中のほか、朝倉が主な作業を行った。
- 7 本書で使用した航空写真は、(株)みすず総合コンサルタントが撮影したものである。
- 8 遺物写真の撮影は(有)オオカワプロセスが行なった。
- 9 石器の石質鑑定は、市川桂子氏（長野県埋蔵文化財センター）に依頼した。
- 10 本遺跡出土の獣骨については、長野県立埴科高等学校の田中和志先生より玉稿を賜り、第V章に掲載させていただいた。
- 11 本書および調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において保管されている。
- 12 本調査および本書の作成にあたって、下記の方々や機関からご配意を得た。記して感謝の意を表したい。

(敬称略、50音順)

市川桂子・伊藤順一、大竹幸恵、木幡成雄、鈴木徳雄、高橋清文、田中和志、田中広明、西香子、三木陽平、宮田忠洋、綿田弘実、山口逸弘、(株)更埴地域シルバー人材センター

## 凡 例

- 1 遺構の略号は下記のとおりである。  
H→竪穴住居址 D→土坑址 Ta→竪穴状遺構 P→ピット
- 2 遺構名は、時代別ではなく発掘調査時における命名順である。
- 3 本書に掲載した実測図の縮尺は該当箇所のスケールの上に記した。
- 4 挿図中における網掛け処理は、下記のものを示す。

遺構 遺構構築土→  焼土→  粘土→  カマド→ 

遺物 須恵器断面・土師器黒色処理→  赤色塗彩→  釉薬→ 

- 5 遺物の挿図中での表記は、例として第1図の1は1-1とした。
- 6 土層および土器の色調は『新版 標準土色帖』の表記に基づいて記載した。
- 7 土器の観察表の法量は、口径・器高・底径の順に記載し、一は不明、( )は残存値、〈 〉は推定値、( )〈 〉が無い場合は完存値を示し、単位はcmである。

# 目 次

序・例言・凡例	
第Ⅰ章 発掘調査の経緯（助川朋広）	1
第1節 発掘調査に至る動機と経緯	1
第2節 調査の構成	2
第3節 調査の日誌	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境（助川朋広）	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 発掘調査の概要（助川朋広）	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層序	7
第3節 検出された遺構・遺物	7
第Ⅳ章 調査の結果（田中浩江）	9
第1節 竪穴住居址	9
第2節 土坑址	25
第3節 その他の遺構	28
第4節 遺構外出土遺物	31
掲載石器観察表	36
掲載土器観察表	37
掲載鉄器観察表	47
第Ⅴ章 坂城町込山D遺跡出土骨について（田中和彦 県立蓼科高等学校教諭）	48
第Ⅵ章 坂城町の縄文時代における込山D遺跡（田中浩江）	51
第1節 縄文時代の遺跡	52
第2節 坂城町出土の黒耀石について	64
第Ⅶ章 総 括（助川朋広）	73
写真図版	74
報告書抄録	88



# 第I章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る動機と経緯

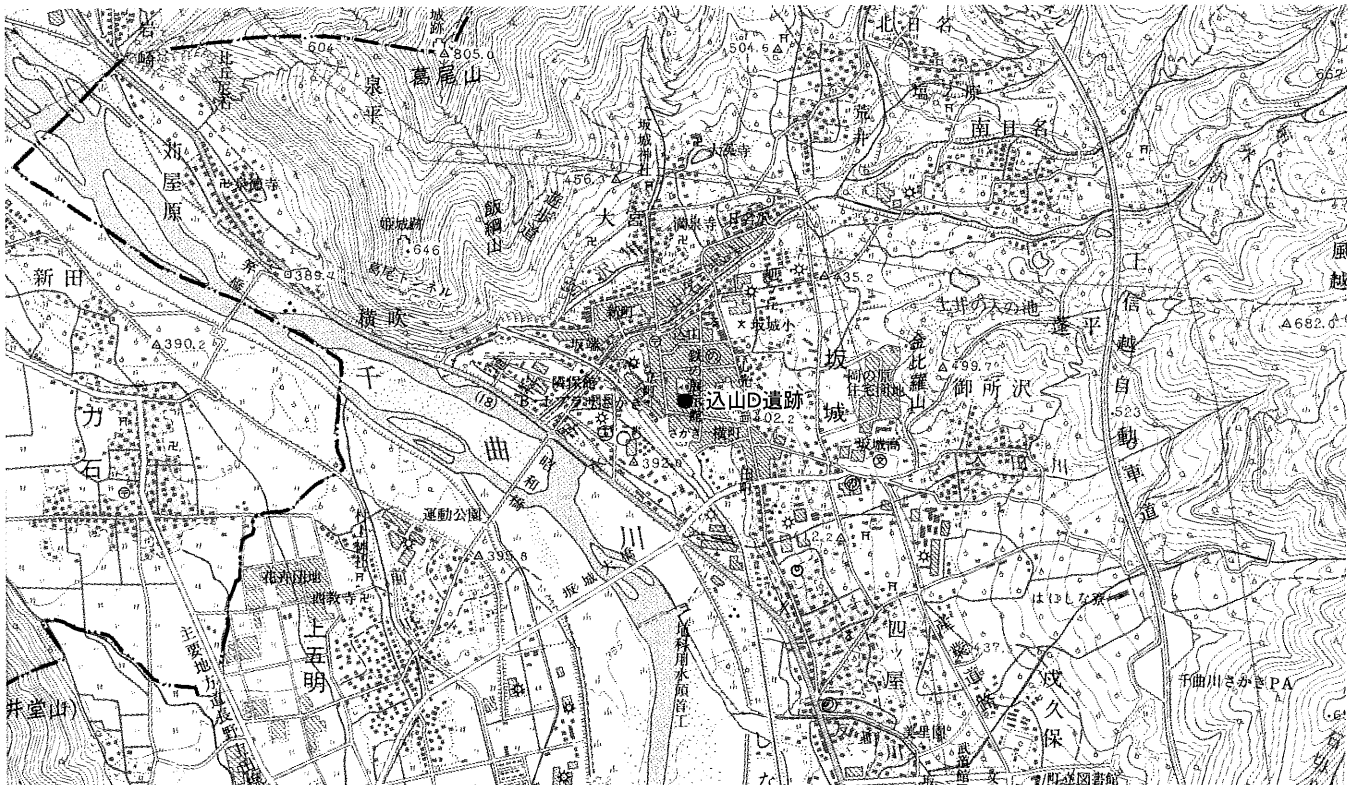
込山遺跡群は坂城町坂城に所在し、標高397.4～463.4mを測る千曲川の河岸段丘の第一段丘端部ほかに位置する。平成元年度に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の複合遺跡とされている。本遺跡群は広範囲に広がっているため、込山A・B・C・D・E遺跡と細分化され、込山遺跡群の中には、古代寺院であった込山廃寺も所在している。本遺跡周辺では、昭和36年に縄文中期の住居址の検出、坂城駅の拡張工事によって、込山D遺跡（註1）から縄文時代晩期の遮光器土偶が出土している。平成11年度町営住宅建設による込山B遺跡（註2）の調査では、弥生時代中期と平安時代の住居址が検出され、平成12年度実施の坂城保育園建設事業による込山C遺跡（註3）では、縄文時代前期・中期の住居址、平安時代の住居址などが検出、布目瓦が出土している。これらのことから、込山遺跡群は古代寺院関係の遺跡と縄文時代早期～晩期や弥生時代中期～平安時代の集落址であることが判明している。

今回、株式会社八十二銀行の坂城支店店舗改築が計画され、込山D遺跡の破壊が余儀なくされることになり、株式会社八十二銀行と坂城町教育委員会による保護協議の結果、遺跡の状況を確認するための試掘調査が行われた。開発予定地が日常使用している駐車場であったため、銀行業務に差し支えない一部のみを確認調査したに過ぎないが、竖穴住居址が検出され建設予定地は遺跡であることが判明した。再度の保護協議により、記録保存を前提とした発掘調査が必要となり、緊急発掘調査を実施する事となった。

註

（註1）『長野県史』では込山E遺跡出土と記載されているが、坂城町教育委員会では出土地点を考慮した結果、込山D遺跡として扱うこととした。

（註2・3）いずれも未報告。



第1図 込山D遺跡位置図（1：25,000）

## 第2節 調査の構成

### 発掘調査の体制

調査指導者 塩入 秀敏（上田女子短期大学教授、日本考古学協会会員）

担当者 助川 朋広（坂城町教育委員会学芸員）

調査員 田中 浩江（町臨時職員）

協力者 朝倉 妙子、天田 澄子、坂巻 ケン子、千野 美樹、萩野 れい子（以上、町臨時職員）  
荒川 園子、大塚 勝司、春日 勝、近藤 金子、塩野入 希幸、滝沢 かつ子、  
竹内 一子、千野 正彦、塚田 智子、塚田 義勝、中島 溢雄、中島 達雄、前田 忠、  
増田 勇、三井 重子、柳原 喜伸（以上、シルバー人材センター派遣）

### 事務局の構成

教育長 柳澤 哲

生涯学習課長 塚田 好一

文化財係長 助川 朋広

文化財係 宮入 正代（平成17年4月1日～平成18年3月31日）

時信 武史（平成18年4月1日～）

朝倉 妙子、天田 澄子、坂巻 ケン子、田中 浩江、千野 美樹、中沢あつ美、  
萩野 れい子（以上、臨時職員）

## 第3節 調査日誌

### 平成17年度

10月17日 本日よりバックホーによるアスファルト除去を開始する。

10月18日 アスファルト除去が完了し、表土剥ぎを開始する。

10月20日 調査の開始式を行い、北側から検出作業を開始する。

10月26日 南西部分の検出作業に苦慮する。

10月28日 基準点測量開始。石製模造品（勾玉）出土。本日で発掘調査を一時中断する。

11月11日 本日から発掘調査を再開する。検出作業を継続する。遺構配置図の作成開始。遺構調査を開始する。

11月21日 H1・2号住居址調査する。

12月12日 獣骨の平面図作成。取り上げ実施する。

12月13日 雪かきの後調査継続する。

12月27日 終了式を実施する。

12月28日 航空写真撮影を行う。

平成17～18年度中整理作業を実施する。



## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

坂城町は北信地方と東信地方の接触点にあたり、善光寺平を構成する更埴地方の最南端に位置し、県の東部に源流を発し、町の中央部を貫流する千曲川によって、右岸地域と左岸地域とに分断されている。この千曲川は坂城広谷（坂城盆地）と呼ばれる沖積地を形成し、また、この千曲川に流れ込むいくつかの小河川が作りだした扇状地によって形づくられている複合扇状地が発達している点に特徴がある。町の北から東にかけては五里ヶ峰・大峰山・虚空蔵山をはじめとする標高1100～1300m前後の山々が屏風のように連なり、千曲市・上田市との市町村界を形成し、西は大林山、三ッ頭山などの標高1000m前後の山々が連続し、千曲市・上田市との市町村界となっている。北は千曲川右岸の横吹きと左岸の自在山による岩壁がネックとなり、南では千曲川右岸の岩鼻と左岸の半過の岩鼻が狭隘な地形を形成し、上田盆地と隔てられている。このような地形から、古来よりこの地域は千曲川流域の要衝の地として注目されてきた。

町の地形は、南北に開けた小盆地状をなし、季節風の影響を受けやすいため、夏季は南風、冬季は北風が強い。また、盆地状になっていることから寒暖の差が大きい。降水量は少なく、日本で最も雨量の少ない地域の一つとされている。現在では、この気候も関連し、工業が主要な産業となっており、農業では、りんご・バラ・ぶどうの栽培が盛んである。

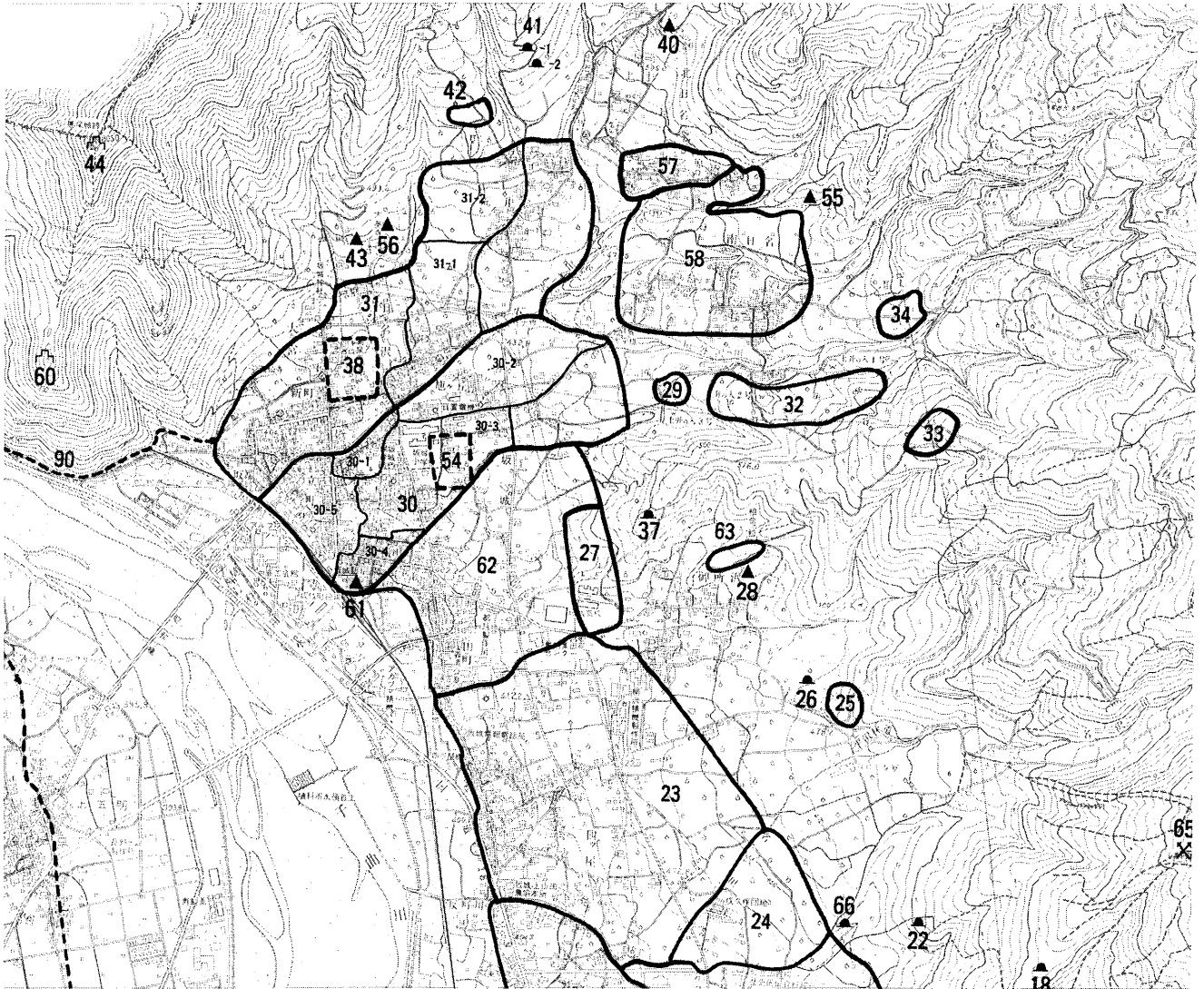
込山D遺跡は、坂城町の右岸の北寄りに位置する坂城地区の中心市街地に所在し、千曲川の段丘上に位置し、近世の官道であった北国街道によって発展した集落、宿場町の面影を残す地域である。

### 第2節 歴史的環境

ここでは、坂城町の各時期について代表的な遺跡を挙げながら、町の歴史的環境について触れておきたい。（括弧内の数字は4ページの坂城町遺跡分布図における遺跡番号を示す。）

坂城町で最古の遺物は、後期旧石器時代の上ヶ屋型彫刻器とされる石器で南条地区の保地遺跡より採集されたものであるが、本採集品以外では本遺跡から槍先型尖頭器が出土しており、後期旧石器時代に位置づけられる可能性が考えられるようになった。（第Ⅵ章参考）

縄文時代の遺跡では正直なところ発掘調査遺跡数が少なく、詳細に欠けるところが多いが、『坂城町誌』に早期押型文系の土器や前期諸磯系の土器が坂城地区の和平A遺跡や平沢遺跡での採集遺物が掲載されている。また、平成12年度に発掘調査が実施された坂城地区の込山C遺跡（30-3）からも押型文系の土器や前期～後期の土器も出土している。本遺跡は現在整理中である。昭和36年に発見された旧宮入味噌醸造の込山C遺跡から加曾利EⅣ式土器や曾利系の土器が儀礼的な遺構から見つかっている。後期・晩期では、南条地区の保地遺跡が挙げられる。保地遺跡は昭和40年度と平成11年度に発掘調査が実施されている。前者は後期後半から晩期後半までの土器・石器群と、後期後半に属するとされる特殊儀礼的遺構の出土が『考古学雑誌』に報告されている（関 1966）。後者については、晩期に位置づけられると考えられる再葬墓が検出されており、中でも約19個体分の人骨が埋葬された2号墓址が注目され、再葬のあり方と食性についても課題を残している。その他、坂城地区の込山D遺跡（30-4）から昭和初期に採集された遮光器土偶の頭部がある。弥生時代では、中期以前の調査例が少ないため状況は不明であるが、込山B遺跡（30-2）や込山C遺跡Ⅱ・Ⅲから当該期の遺物・遺構が検出されている。後期後半では、平成5年度に南条地区の塚田遺跡Ⅱで



図面番号	遺跡名	種別	時代	図面番号	遺跡名	種別	時代
	人塚古墳	古墳	古墳(後期)	38	村上氏館跡	城館跡	中世
23	四ッ屋遺跡群	集落址	縄文~平安	40	北日名経塚	経塚	中世
24	戌久保遺跡	集落址	古墳~平安	41	北日名経塚古墳群	古墳	古墳(後期)
25	入田遺跡	散布地	奈良~平安	-1	北日名経塚1号墳	古墳	古墳(後期)
26	塚内古墳(御所沢古墳)	古墳	古墳(後期)	-2	北日名経塚2号墳	古墳	古墳(後期)
27	金比羅山遺跡	散布地	縄文~平安	42	梅ノ木遺跡	散布地	縄文
28	蓬平経塚	経塚	平安	43	栗田窯跡	窯跡	奈良
29	岡の原窯跡	窯跡	平安	44	葛尾城跡	城館跡	中世
30	込山遺跡群	集落址	縄文~平安	53	開畝製鉄遺跡	製鉄跡	中世
-1	込山A遺跡(水上)	集落址	縄文~平安	54	込山廃寺跡	寺院跡	平安
-2	込山B遺跡(社軍神)	集落址	縄文~平安	55	観音平経塚	経塚	中世
-3	込山C遺跡(込山)	集落址	縄文~平安	56	栗田小鍛冶跡	製鉄跡	中世
-4	込山D遺跡(横町)	集落址	縄文~平安	57	塩の原遺跡	集落址	奈良~平安
-5	込山E遺跡(立町)	集落址	縄文~平安	58	南日名遺跡	集落址	弥生~平安
31	日名沢遺跡群	集落址	弥生~平安	60	姫城跡	城館跡	中世
-1	日名沢遺跡	集落址	弥生~平安	61	坂木代官所跡	屋敷跡	近世
-2	丸山遺跡	集落址	弥生~平安	62	田町遺跡群	散布地	古墳~平安
32	土井ノ入窯跡	窯跡	奈良~平安	63	御所沢墳墓群	墳墓	中世
33	平林遺跡	散布地	縄文	65	中之条石切場跡	採掘跡	近世
34	垣外窯跡	窯跡	平安	66	砥沢古墳	古墳	古墳(後期)
37	金比羅山古墳	古墳	古墳(後期)	90	横吹北国街道跡	街道跡	近世

第2図 周辺遺跡分布図



発掘調査が実施され、この時期に属する竪穴住居址36棟をはじめとする遺構が検出され、鉄斧も出土している。

古墳時代では、前期古墳は確認されていないが、中期古墳には中之条地区の仮称東平1号墳・2号墳が挙げられる(註1)。後期古墳では、町内でもいくつかの古墳群の存在が知られているが、中でも代表的なものは村上地区の福沢古墳群小野沢支群に属する御厨社古墳である。内部施設に千曲川水系最大の横穴式石室を持ち、室全長11.2mを測り、勾玉や切子玉、耳環などが出土している。後期の集落址は南条地区や中之条地区において多く検出されている。また、祭祀遺跡として南条地区の青木下遺跡が注目される。

奈良時代・平安時代の遺跡では、中之条地区の中之条遺跡群とその周辺遺跡に多くの調査例があり、この地域における状況が徐々に解明されつつある。具体的には、寺浦遺跡、宮上遺跡を核とする古墳時代後期後半～平安時代までの集落址が判明している。また、平安時代の生産遺跡として坂城地区の土井ノ入窯跡(32)があり、昭和41年発掘調査が実施され、瓦の生産が行われていたことが実証され、本遺跡で生産された瓦は、現在の坂城小学校建設地に8世紀末～9世紀頃に存在していたとされる込山廃寺(54)に用いられたほか、上田市信濃国分寺・国分尼寺などの補修用の差し瓦として使用されていたことなどが判明している。また、千曲川右岸及び左岸の後背湿地では、仁和4(888)年に起きたとされる千曲川大洪水の被害を受け、氾濫沈澱砂層によって被覆された状態で発見された埋没水田址が塚田遺跡、青木下遺跡、上五明条里水田址にて検出されている。

平安時代後期、寛治8年(嘉保元)(1094)に村上地区に配流されてきた源盛清が後に村上氏として勢力を持つようになり、村上信貞、村上満信などの活躍や戦国時代での村上義清の活躍が挙げられる。義清の頃、村上氏の館は現在の坂城地区の満泉寺一带に所在したとされ、その背後にそびえる葛尾山の山頂には、義清が使用した葛尾城跡があるが城自体は現存していない。この館跡及び山城をセットとして、村上氏城館跡として長野県史跡に指定されている。このほか、中世の遺跡では坂城地区の北日名経塚(40)及び観音平経塚(55)を始めとする経塚が山間部に分布する傾向がある。

江戸時代に入ると、北国街道(90)の制定により、坂木宿が宿駅として発展した。元和8(1622)年に現在の坂木地区を主体とする坂木村、中之条地区を主体とする中之条村は幕府の直轄地である天領となり、重要な場所として位置づけられた。代官所は最初、坂木(61)に置かれたが、明和4年(1767)に焼失し、その後、安永8年(1779)には中之条に代官所が置かれるようになった。

以上、簡単ではあるが近世までの坂城町の歴史を概略したわけであるが、坂城地区の込山遺跡群周辺では、縄文時代後期・晩期及び弥生～平安時代の集落址の存在する可能性があること、古代の込山廃寺といった寺院の存在からこの込山遺跡群周辺が特殊な地域である事が判明している。また、近世においても北国街道が同遺跡内を通過していることから、近世においても重要な役割のあった場所であった事が判明している。

#### 註

註1 周知の御堂川古墳群東平支群1号墳・2号墳とは異なる可能性があるため、報告書内において仮称東平1・2号墳とされている。今後、正式な古墳名称の確定が必要である。

# 第三章 調査の概要

## 第1節 調査の方法

本遺跡の調査では、調査区の遺構・遺物の正確な位置を記録でき、なお、将来的に周辺で実施される遺跡の発掘調査での遺構・遺物の調査にも整合できるように、平成14年4月施行の世界測地系2000の座標軸を基にグリッドを組んだ。

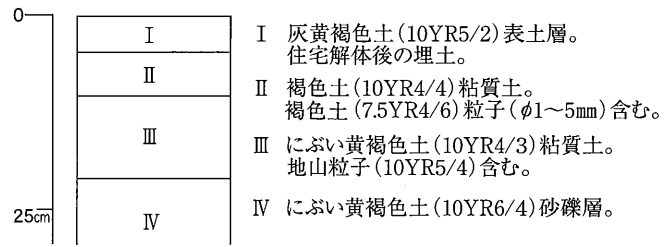
グリッドについては、200m×200mの大グリッドを設け区画を行い、その中を40m×40mに25等分した中グリッドを設定（第3図）し、北東端より「A・B・C……Y」区とアルファベットの大文字で命名した。本調査ではJ・O区が発掘調査の対象グリッドである。また、その中グリッドを4m×4mの小グリッドで100区画に分割し、南北列を北から算用数字で「1・2・3……10」、東西列を東から五十音順で「あ・い・う……こ」と呼称することとした。例えば、その中の北東交点を「Oグリッド」というように命名し、調査に係るグリッドの呼称は例えば「Oあ1グリッド」とし、遺物の取り上げや遺構図の作成の基準とした。また、発掘調査における遺構の実測は、基本的に1/20を基準として簡易遣り方実測にて行った。



第3図 込山D遺跡発掘調査区設定図（1：2500）

## 第2節 基本層序

本調査区の基本層序は右図に柱状図を示したとおりである。Ⅰ層は表土層で北国街道の制定に伴い、坂木宿が置かれ、近年まで町の中心地として、商店・住宅として利用されていたことや、駐車場等として利用された際に埋土されたものである。Ⅱ層は褐色を呈する粘質土層である。Ⅲ層はにぶい黄褐色を呈する粘質土で、地山である黄褐色の砂質の粒子を含む土層である。Ⅳ層はにぶい黄褐色の砂礫層で日名沢川や入田川による押し出しによって堆積した堆積土である。本調査では遺構の確認を本層序で行った。また、調査区中心部には、かつて建設されていた建物等の影響によって大きく攪乱され、Ⅳ層が南側と同レベルまで削平されてしまい、遺構は発見されなかった。



第4図 基本層序模式図

調査区内での基本層序の状況は、北側がⅣ層までの検出面が浅く、南側が深いといった傾向が看取された。この状況は、南傾する斜面であること、千曲川の段丘面上であることと大きく関係している。

## 第3節 検出された遺構・遺物

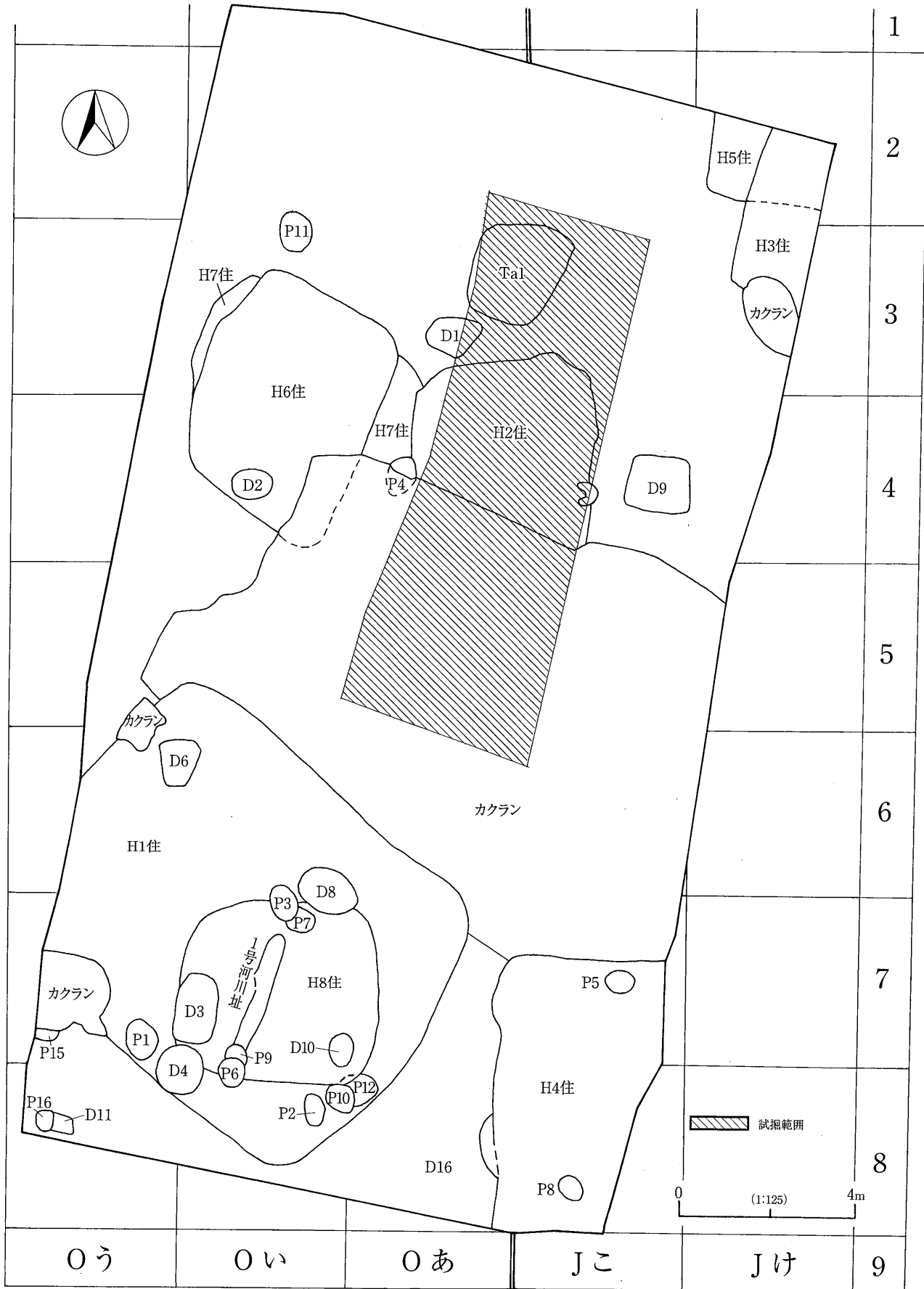
本調査によって検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺構)

弥生時代	竪穴住居址	4棟
弥生時代?	土坑址	1基
古墳時代	竪穴住居址	2棟
古墳時代?	土坑址	2基
奈良・平安時代	竪穴住居址	2棟
	土坑址	1基
江戸時代	土坑址	2基
時期不明	土坑址	3基
	河川址	1条
	柱穴址	14基

遺物)

旧石器時代	石器
縄文時代	土器・石器
弥生時代	土器
奈良・平安時代	土師器・須恵器
江戸時代	古銭、銅製簪、陶器



第5図 込山D遺跡遺構配置図



## 第IV章 調査の結果

### 第1節 竪穴住居址

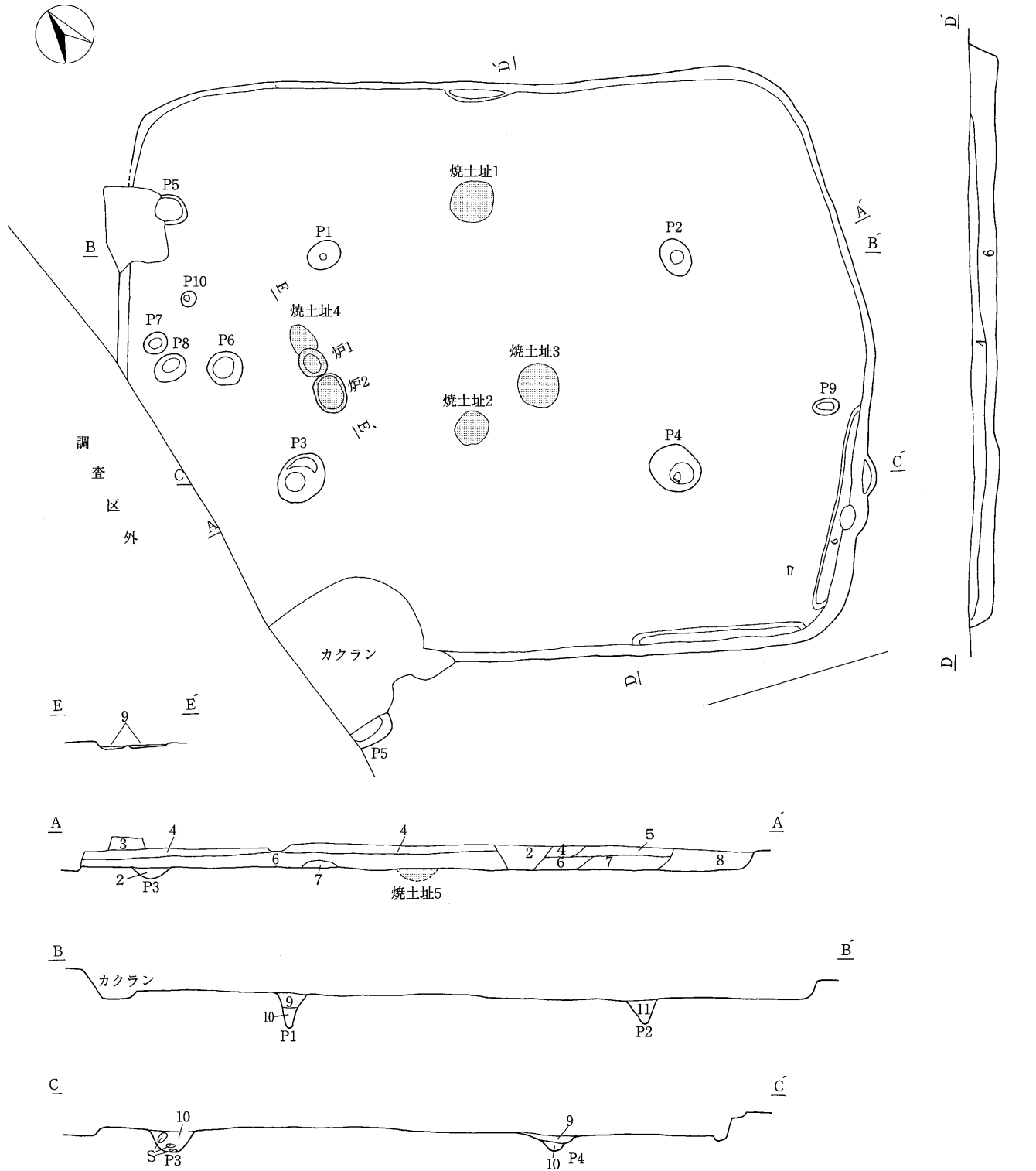
#### (1) H1号住居址

##### 遺構(第6図)

**検出位置** Oあ6、Oあ7、Oあ8、Oい5、Oい6、Oい7、Oい8、Oう5、Oう6、Oう7、Oう8  
グリッド。**重複関係** H8号住居址、D3・4・6・8・10号土坑、P1・2・3・6・7・9・10・12号  
柱穴址、1号河川址に切られる。**平面形態** 西部が調査区外に延びるが、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈  
する。長軸10m36cm、短軸78.6cmを測り今回の調査で検出された住居址では最大規模である。その主軸方位  
はN-47°-Wを指す。**覆土** 壁残高は深い所で44cmを測り、その覆土は第2～8層に7分層でき、緩やかな  
レンズ状堆積を呈する。長軸方向A-A'ラインの覆土では東南壁際に鉄を多く含む第8層暗褐色土が分層  
できたが、埋没時の様相というよりも、遺跡埋藏地の水の影響による変質と考えられる。同様に第5・7層  
も水の影響により第4層が第5層に、第6層が第7層に変質したと解釈したほうが自然であろう。**炉址** 焼  
土の集中する箇所は6箇所あり、住居址の北西側の床中央寄りに集中して検出された。特に北西壁寄りのP  
1とP3の中央付近より焼土集中箇所が3箇所連なり、西側2ヶ所の焼土の厚さは5～6cmであった。他の  
4箇所の焼土に関しては、未調査であるが、焼き込みは前の2ヶ所より比較的弱い。従って、本住居址の炉  
址は焼土が5～6cmの厚さで堆積した2ヶ所の焼土集中箇所と判断し、炉1・炉2とした。**ピット** 壁から  
2m内側に入った四隅に長方形に配置された4本のピットと、炉1・炉2の北西の壁寄りに5基、南東壁  
寄りの中央に1つの計10個のピットが検出された。中央の長方形に配置されたP1・P2・P3・P4は、そ  
れぞれの深さが34cm、46cm、23cm、48cmあり、径はそれぞれ48cm、62cm、76cm、70cmを測る。北西壁寄りの  
P5・6・7・8・10号ピットはそれぞれ深さ10cm、15cm、11cm、25cm、6.5cmを測り、南東壁寄りのP9  
の深さは18cmと浅めである。従って、深さ・位置よりH1号住居址はP1・2・3・4の4つを支柱穴とす  
る大形の住居址と考えられる。**壁溝** 北東壁中央に最大幅16cm、床面比高差11cm、南壁コーナーに最大幅20  
cm、床面比高差6cmの壁に沿う溝が検出された。尚、南東壁の壁溝中央には床面より3cm程深い、径44×20  
cmのピットが検出されている。**遺物出土状況** 遺構確認面と覆土より、須恵器・土師器・弥生土器が出土し  
ており、床面直上のものは土師器高坏の脚部(7-10)が1点あるが、覆土に混入したもので住居址に伴わ  
ないと考えられる。

##### 遺物(第7・8図、表3・4・5)

テンバコ5箱分の遺物が出土しており、今回の調査においては最も豊富な遺物の出土量である。その中で  
も遺存度の良い資料の実測図と、時期判別の手掛かりになりそうな土器片の拓影図を図示した。1・2・3  
・4は須恵器で、本住居址出土の須恵器はこの4点のみである。1は透かしに平行する縦位の沈線紋を持つ  
円面硯である。小片のため、径など詳細は不明であるが、蹄脚を呈し丁寧な成形が窺われる。2は高台付坏  
の底部で、高台貼付後に丁寧なロクロ調整が施されている。3・4は平行叩き目痕を持つ甕の胴部片である。  
内面に明瞭な押さえ板痕は確認できなかった。5は土師器の器台で焼成前の円形穿孔が台部と脚部接合部お  
よび脚部に3箇所施されている。6～9・11～13は高坏の脚部で全て丁寧なミガキによる調整が施されてい  
る。6・7・8は赤色塗彩が確認でき、7は脚部に三角形の透かしが4箇所に施されている。6・7は弥生



- |  |   |
|--|---|
| 1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土層。(H8住)                         | 8. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘質土。水の影響による鉄粒子 (φ3~5mm) 多量に含む。 |
| 2. 褐色土 (10YR4/6) 砂質土。礫 (φ3~1cm) 多量含む。                | 9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質土。礫 (φ3~5mm) 含む。              |
| 3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質土。礫 (φ3~5mm) 少量含む。               | 10. 暗褐色土 (10YR4/4) 砂礫層。礫 (φ0.5~1cm) 多量含む。         |
| 4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質土。礫 (φ3~5mm) 少量含む。2層に近似するが色調明るい。 | 11. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘質土。粒子細かく、地山粒子少量含む。            |
| 5. 褐色土 (10YR4/3) 粘質土。                                | 12. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘質土。                           |
| 6. 褐色土 (10YR4/3) 粘質土。礫 (φ2~1cm) 量含む。                 |   |
| 7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘質土。礫 (φ2~1cm) 量含む。                |   |

標高400.0m  
(1:80)  
0 2m

第6図 H1号住居址実測図

土器の範疇に入るものの弥生土器のそれに比して脚部がさほど開かず、短いことなどから帰属時期としては古墳時代前期に求められそうである。8は脚部上位しか残存しないが、かなり大形の高坏になると推定でき、弥生時代に帰属すると考えられる。9～13は丁寧なヘラミガキが施される土師器で、9は脚部中位でやや膨らみ裾へと屈折しそうである。10は一見して高坏の脚部に見えるが脚部接合部に焼成前の穿孔を持つことより、器台になろう。11は脚部より強く屈折し、扁平に広がり内面に輪積み痕を顕著に残す。12・13も裾部は欠損するものの強く屈折しそうである。14～16は高坏の坏部でいずれも下位に強い屈折部を持つが、14は大きく外傾し、15・16はやや内湾気味に外傾する、似た形状を呈するが16の方が大形になりそうである。高坏については大形で赤色塗彩が施される8を弥生時代に、それ以外を古墳時代前期の帰属としたい。

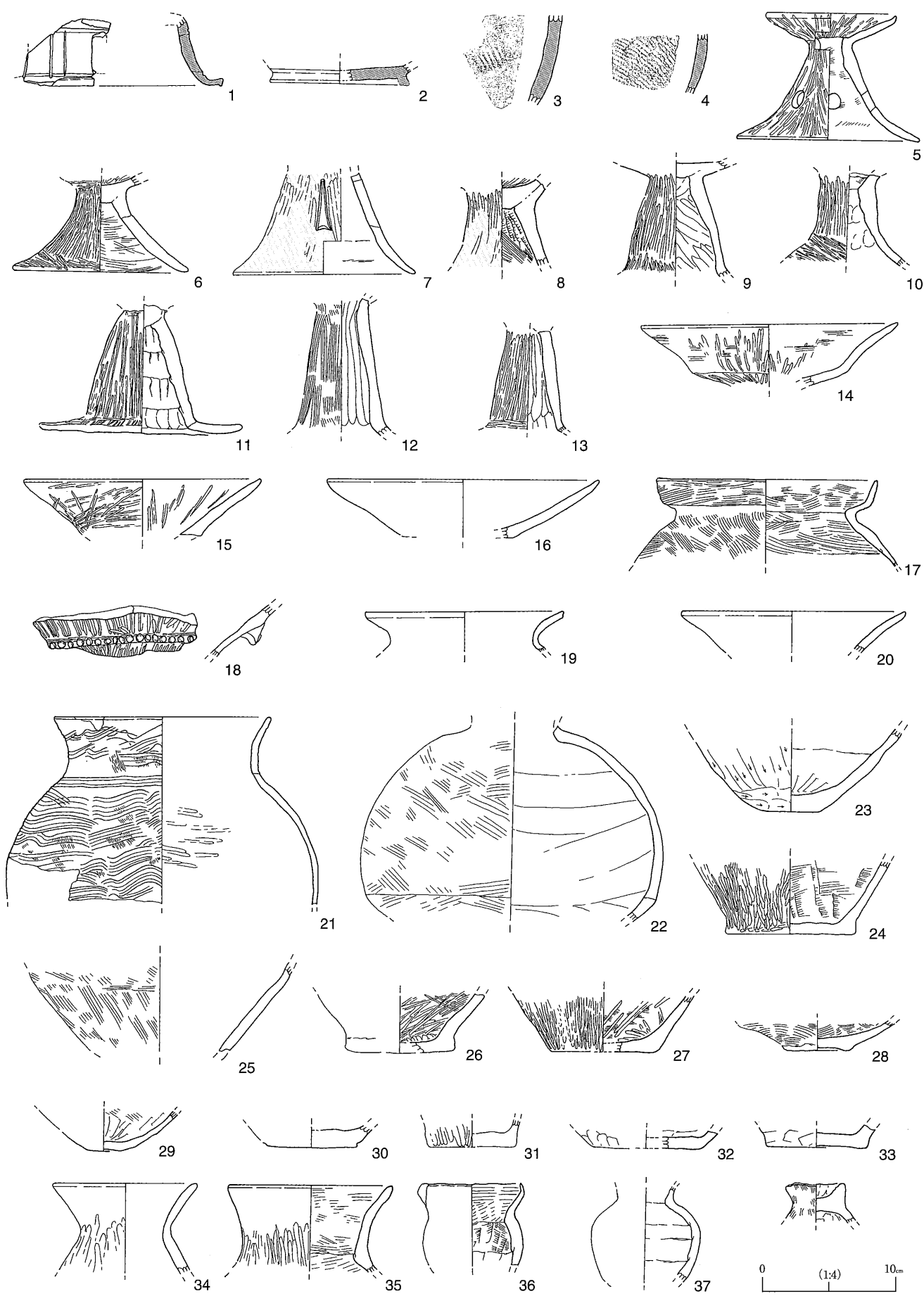
17～21は甕で、17はS字状口縁が直立気味の受け口様を呈する。18は大きく外傾する複合口縁で内外面に赤色塗彩が施され、有段部に円形浮文が貼付される。東海系の布留式土器の系譜をひくものである。21は6本1組の雑な櫛描き波状紋が施される甕で、胴部は球状に張り出し下位で底部に向かい屈折する。口縁部はさほど広がらず、弥生時代後期箱清水式土器の中でも終末の様相を呈している。22は球形の胴部に粗いヘラミガキが施され、頸部で締まることから古墳時代前期の壺になろう。23～33は底部を掲載したが、23は小さくやや丸みを帯びた底部で外面にヘラミガキが施され、古墳時代前期の甕になると考えられる。25は胴部下位で底部に向かい屈折し、箱清水式土器になろう。34・35は口縁部がさほど開かず、太目の頸部から撫で肩様に胴部に向かう古墳時代前期の壺になると考えられる。36・37は小型の丸底壺になると考えられる。38は弥生時代後期箱清水式期に観られる蓋のツマミ部と考えられる。

拓影図は8-1～35の35点を掲載した。1は7-21の甕と同一個体の可能性が高い。5は口縁端部にL R縄紋を回転施文する甕で、弥生時代中期栗林式期の様相を呈する。12は頸部屈折部に貼付した隆帯上に横走する沈線紋とR L縄紋が施される。小片のため全体の器形は窺い知れないが、5の土器と近似する時期に帰属するかも知れない。15は頸部より垂下する櫛描き平行沈線紋を特徴とする土器片で、弥生時代中期栗林式期に観られる特徴でもある。

18・24・25・26・30・31は細く鋭い単沈線紋により施文される土器片である。18は細く鋭い単沈線による横走並行沈線紋の後、同工具により斜行する沈線紋が施される。24は2条のやや太い横走並行沈線紋の後、細く鋭い斜行並行沈線紋。25は斜行する並行沈線紋を施文の後、鋸歯様に文様区画した鋸歯状紋である。26はややたく浅い沈線により横位に文様帯区画した後、細く鋭い沈線により、横位の綾杉紋が施され、最下段に鋸歯様の区画の後、区画内を斜行沈線紋で充填する。30も同様の綾杉紋と鋸歯紋の施文される小片である。31は太目の沈線により斜位の並行沈線紋が逆行する方向に施されており、赤色塗彩が確認できる。これらは、弥生後期吉田式土器の範疇としてよかろう。

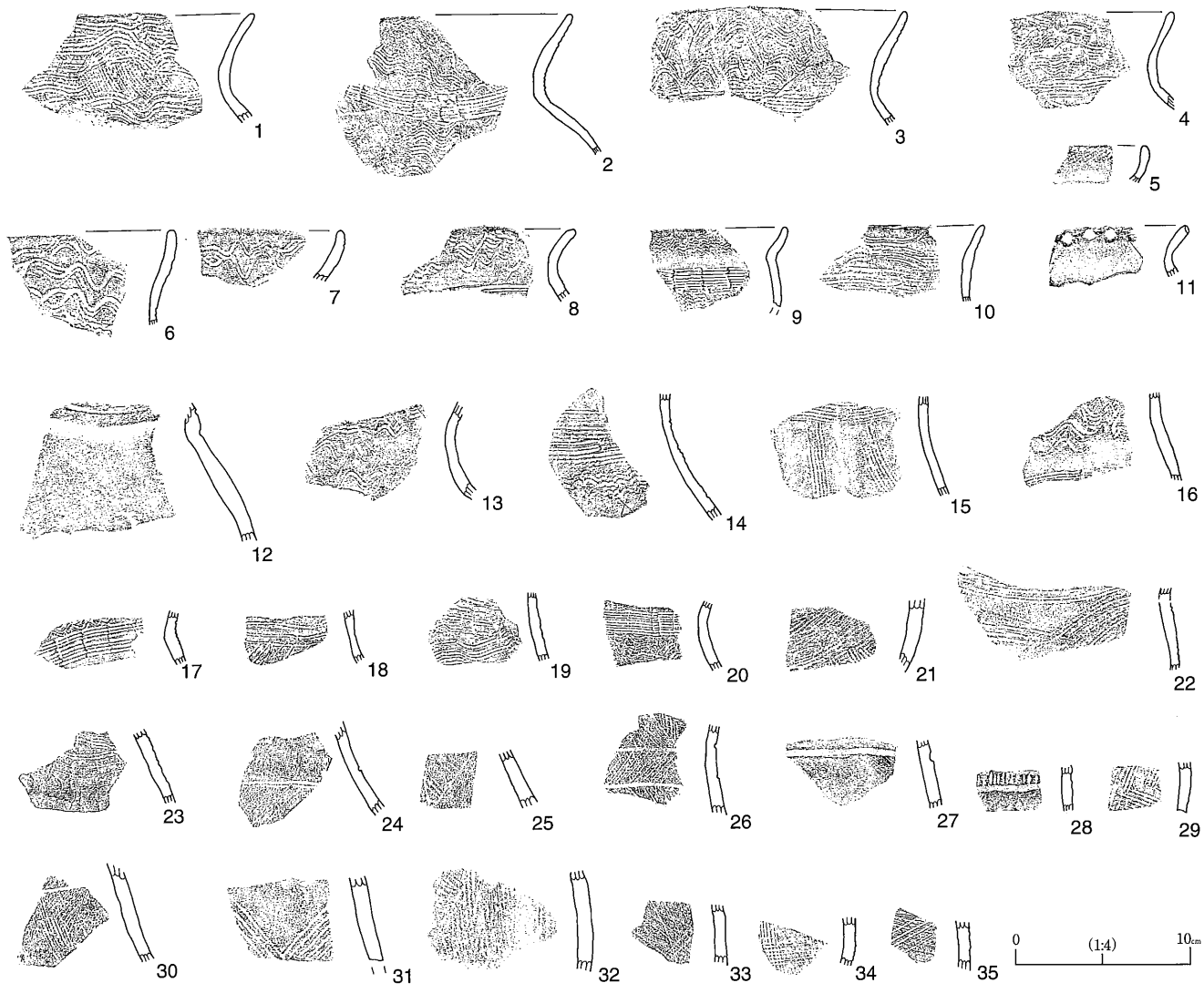
23は櫛描き横走沈線紋で、拓本では判りにくい器面にヘラナデ調整の痕が鱗状に残っている。27・28は太目の横走沈線紋が施され、28は連続する刻み目紋が沿い、弥生中期栗林式期の土器の様相と考えられる。

**時期** これらの出土土器は、須恵器、弥生土器、土師器に大別されるが、その中で須恵器は量も少なく小片ばかりである。奈良時代～平安時代に帰属する遺物はこれらだけであることより、H1号住居址においては混入遺物と判断するのが妥当であろう。弥生時代の遺物には8-5・12・15の中期栗林式土器に帰属するであろう遺物があるが、H1号住居址と重複関係にあるH8号住居址の出土遺物中の21-1・2を含めても、小片が僅かに確認できるのみで、やはり混入遺物との見解がふさわしかろう。8-18・24～26・28・30・31のような斜行沈線紋・綾杉紋・鋸歯紋などの破片資料や櫛描き波状紋を多用する土器など、弥生時代後期の資料は比較的まとまった出土状況を示しており、吉田式期～箱清水式期に渡る遺構の存在が考えられる。土



第7图 H1号住居址出土土器实测图〈1〉



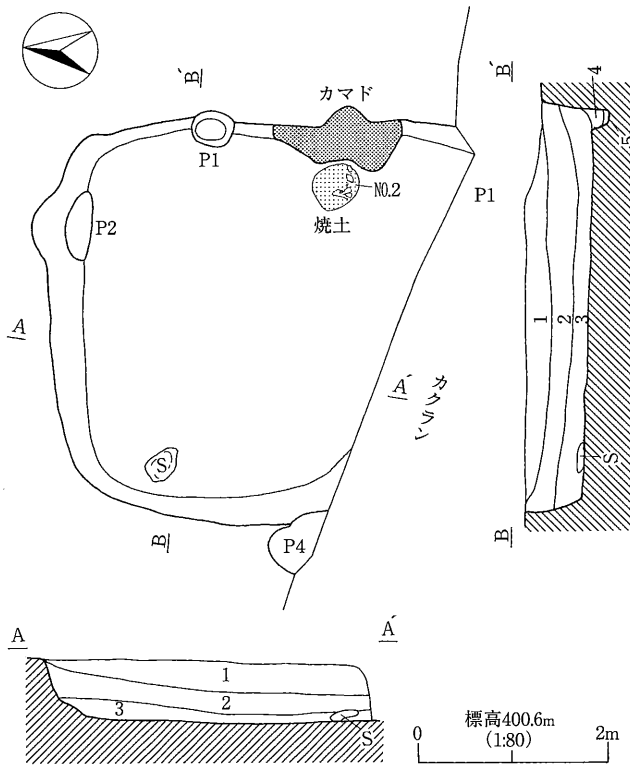


第8図 H1号住居址出土土器実測図〈2〉

師器では、7-5・17・36・37が遺存度の良好な資料として挙げられ、古墳時代前期に帰属するが、該期でも7-7・11・18などの弥生土器の様相を残す遺物と共伴する時期が考えられる。

H1号住居址の帰属時期としては、重複するH8号住居址の存在と、これらの混在して出土した土器群を勘案しながら決定しなければならない。つまりH1号住居址に先行するH8号住居址には、古墳時代前期の土器群が帰属し、H1号住居址には弥生土器の一群が帰属すると考えるのが、最も合理的である。しかし、H1号住居址の南壁コーナーより床面から5 cm浮いた地点より7-5の土師器の器台が出土している。この地点の住居址覆土を観ると、まず第8層が三角堆積を呈し、その上に各層が堆積している。つまり、後出する住居の壁外に盛り上げられた周艇等を含む土が埋没土として流れ込み、その中に土師器の器台脚部が包含されていたと考えれば、床面付近から時間的に新しい様相の土器片が出土していても違和感は無く、また覆土中に時間差のある遺物が混在していても合理性がある。

従って、H1号住居址は弥生時代後期吉田式期から箱清水式期の終末にかけての時期に、帰属すると考えておきたい。



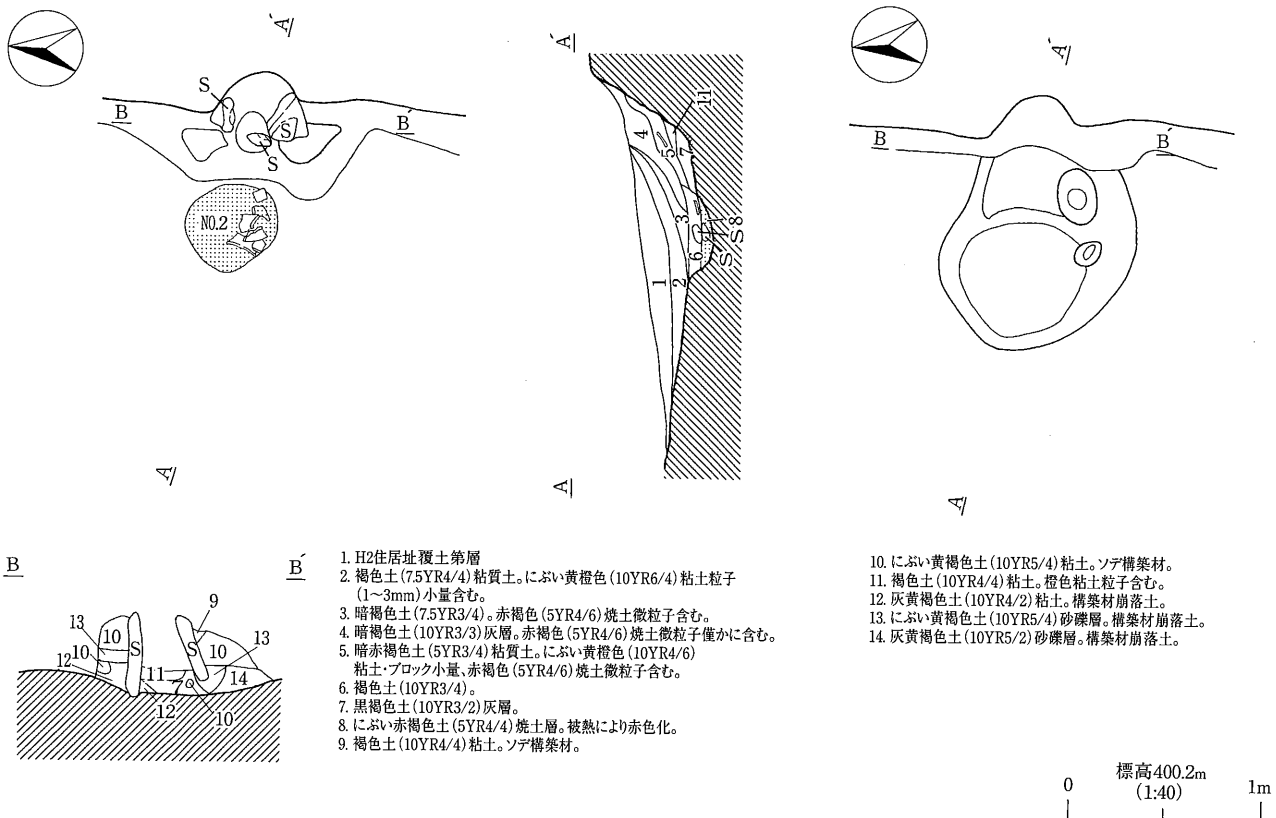
1. 黒褐色土(10YR2/3)粘質土。粒子細かく、地山粒子少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3)粘質土。礫(φ1~3mm)少量含む。
3. 褐色土(10YR4/4)砂質層。礫(φ1~5mm)多量、地山微粒子含む。
4. 黒褐色土(10YR2/3)粘質土。礫(φ2~1cm)含む。
5. 褐色土(10YR4/4)砂礫層。地山粒子混入。

第9図 H2号住居址実測図

(2) H2号住居址

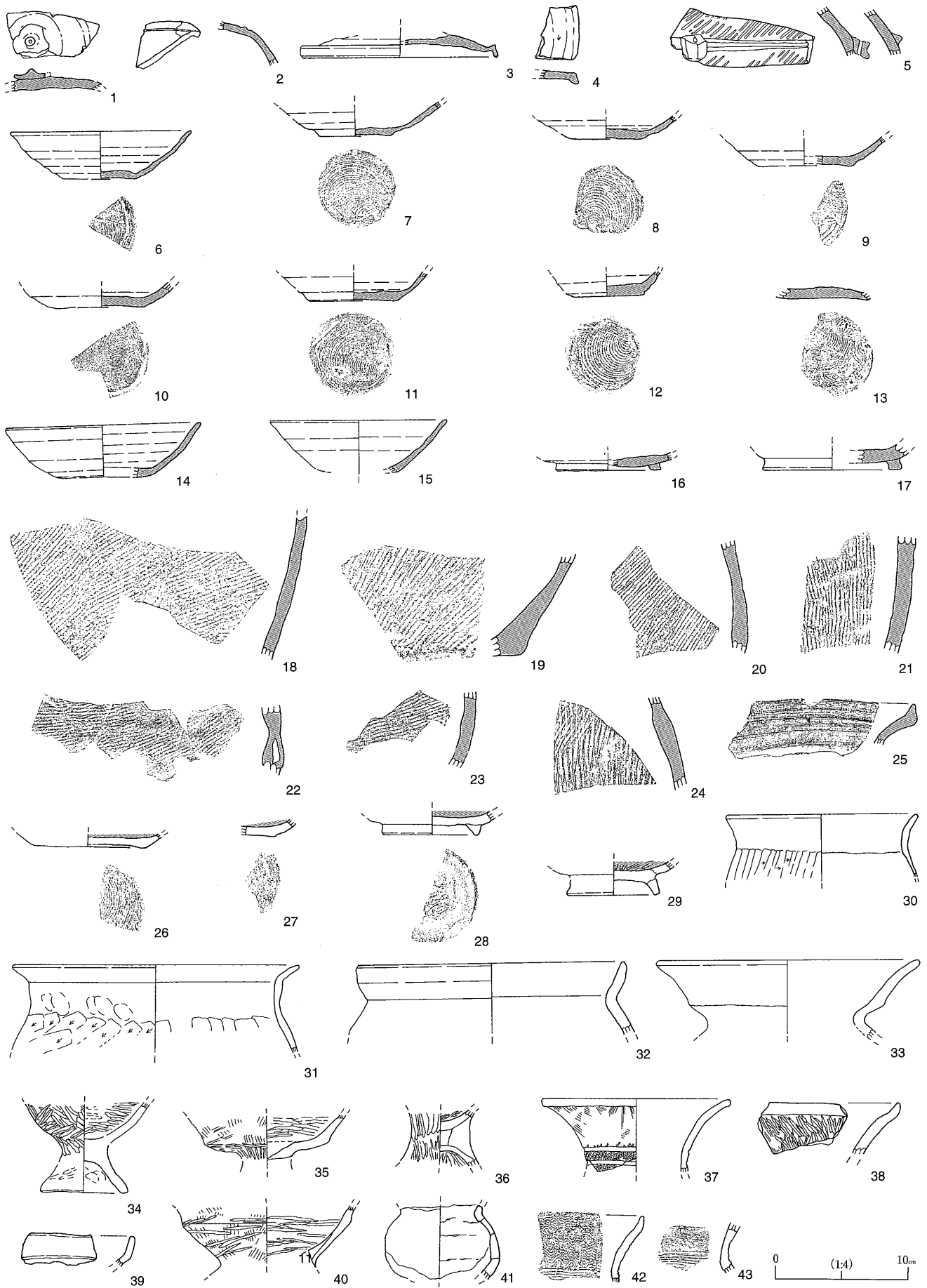
遺構(第9・10図)

検出位置 ○あ3・○あ4・○い3・○い4グリッド。重複関係 西壁一部をP4に破壊されている。平面形態 南部を攪乱により大きく破壊されており、平面形の全容は知り得ないが、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈するものと推測される。カマドは東壁に設置され、カマドを軸とした主軸方位は、E-18°-Sを指す。壁残高は62~11.5cmを測る。覆土 住居址の主体となる覆土は第1~3層に分層され、概ね水平に重層するが、全てに地山の砂質粒子が含まれている。床面の状況概ね平坦であり、堅固というほどではなかった。東壁のカマドの北に深さ70cm、北壁東コーナー付近に深さ53cmのピットが確認できた。住居中央寄りの床面からはピットの検出がされなかったことより、壁で上屋を支える構造が示唆できよう。カマド 攪乱のため住居址平面形の全容が判然としないため、詳細な設置位置は不明であるが、東壁において検出された。遺存度は比較的良好で立位

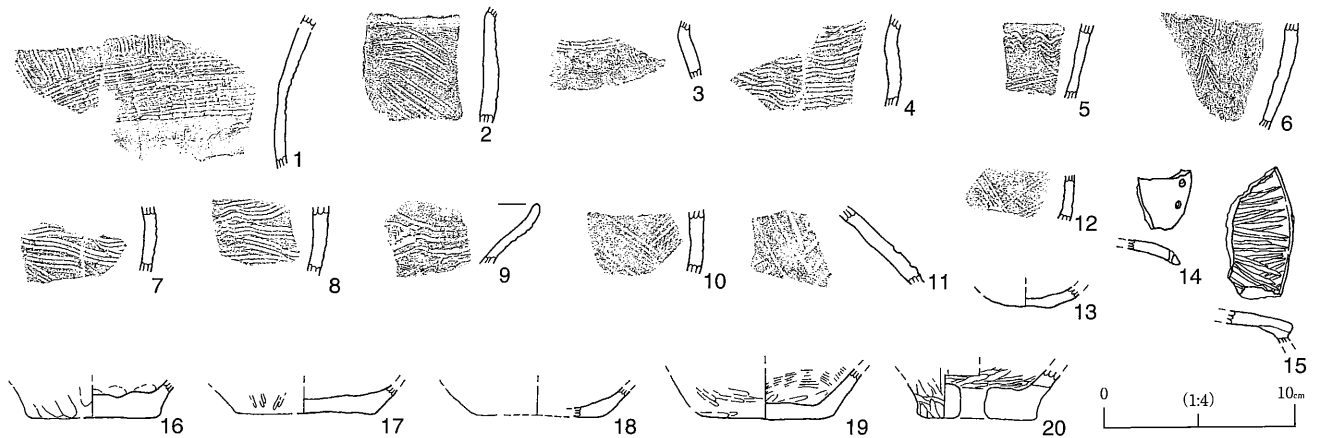


1. H2住居址覆土第層
2. 褐色土(7.5YR4/4)粘質土。にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土粒子(1~3mm)少量含む。
3. 暗褐色土(7.5YR3/4)。赤褐色(5YR4/6)焼土微粒子含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3)灰層。赤褐色(5YR4/6)焼土微粒子僅かに含む。
5. 暗赤褐色土(5YR3/4)粘質土。にぶい黄褐色(10YR4/6)粘土・ブロック少量、赤褐色(5YR4/6)焼土微粒子含む。
6. 褐色土(10YR3/4)。
7. 黒褐色土(10YR3/2)灰層。
8. にぶい赤褐色土(5YR4/4)焼土層。被熱により赤色化。
9. 褐色土(10YR4/4)粘土。ソデ構築材。
10. にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘土。ソデ構築材。
11. 褐色土(10YR4/4)粘土。橙色粘土粒子含む。
12. 灰黄褐色土(10YR4/2)粘土。構築材崩落土。
13. にぶい黄褐色土(10YR5/4)砂礫層。構築材崩落土。
14. 灰黄褐色土(10YR5/2)砂礫層。構築材崩落土。

第10図 H2号住居址カマド実測図



第11图 H 2号住居址出土土器实测图〈1〉



第12図 H2号住居址出土土器実測図〈2〉

の両ソデ石と明確な火床面・灰層が確認できた。主軸方位はE-13°-Sを指す。遺物の出土状況 須恵器・土師器・弥生土器が出土している。完形に近い出土遺物はないが、遺跡全体の中では比較的出土量が多く、図化し得た遺物も多い。垂直方向の出土状況は、住居址の主體的な覆土である第1・2・3層と床面より遺物の出土が観られる。住居址覆土中からは須恵器・土師器・弥生土器が出土しているが、第2層・第3層中からの出土量が多い。その内訳を概観すると、弥生土器の占める量が第2層の方が大きく、第3層は僅か6点ほどと激減する。一方、床面出土の遺物中に弥生土器は1点も含まれなかった。平面的な出土状況において特に特筆すべきものはないが、カマド内より土師器・須恵器の破片が出土しており、やはり弥生土器は1点も含まれなかった。これらの出土状況から勘案して、本住居址の帰属時期はカマドおよび床面より出土した土器を中心とする、土師器・須恵器に求められそうである。

#### 遺物（第11・12図、表5・6・7・8）

出土遺物中で遺存度の比較的良好な63点を図化した。11-1~25は須恵器でカマド出土の遺物は18のみである。器種には坏蓋、坏、甕と5の四耳壺片があるが、その遺存度において形状および編年的特徴を窺い知れるものとしては、坏蓋と坏が挙げられる。11-1~4は坏蓋であるが、1は潰れた宝珠形のつまみを持つ。かえしの形状の判る3・4はかえし部がやや外傾し、全体形は推定でしか伺い知れないが、扁平を呈しそうである。坏には11-6~17がある。底部を残す6~13は回転糸切り離し、16・17は高台貼付の後に丁寧にロクロ調整を施しており、量的には高台を持つものは少ない。全体形は小さな底部から開きながら立ち上がり、内面底部周囲に強いナデが施され、底部と体部が明瞭に分けられる傾向が看取される。13の底部外面に火襷が確認できた。11-18~24の甕の胴部破片は、全て外面に並行叩き目による調整が施され、内面はロクロヨコナデにより丁寧に調整が施されている。土師器は遺存度が悪く、図化し得たものは11-26~33と8点のみであるが、全体の占める割合としては須恵器と同程度である。26~29の坏は全てに内面黒色処理が施され、図化できなかったカマド出土の坏破片全てにも内面黒色処理が施されており、ヘラミガキは丁寧である。図化した4点は全て底面観察のできる資料であるが、26・27は回転糸切り離しであり、高台を貼付した28・29のうち28は高台貼付接合部のみナデ調整をし、糸切り痕を残している。29は高台貼付後にロクロヨコナデにより丁寧に調整を施している。30~32は甕で、30・32はカマドより出土している。30・31は頸部直下からヘラケズリによる調整、32は口縁部から胴部上位にロクロ調整で仕上げられている。図化できなかった土器片を



含めても、およそ半々の割合でヘラケズリとロクロに仕上調整法が大別できそうである。11-33~43、12-1~20は弥生土器と判断したものである。これらの多くは遺構検出面および覆土第1層・2層より出土しており、本遺構に対する混入遺物と考えられる弥生中期の土器群である。

**帰属時期** ①遺構全体の須恵器と土師器の割合がほぼ半々であること。②坏の底部切り離し方法の大半が回転糸切り離しであること。③坏の底部が小さく口縁部に向かい広がる形態をとること。④土師器坏の内面に丁寧なミガキを伴う黒色処理が施されること。⑤須恵器の坏蓋のかえしがやや外傾する傾向にあること。これらから概観して、須恵器自身の特徴としては8C末に比定されそうであるが、①のように、集落内における配膳具としての須恵器の出土量が多くなって来ていることや、③④のような土師器の特徴からすると、9C前半に比定できそうである。

これらの土器がカマドおよび住居址床面より共伴して出土していることより、H2号住居址の帰属時期としては須恵器・土師器両方の特徴を踏まえた8C末~9C前半として考えられよう。

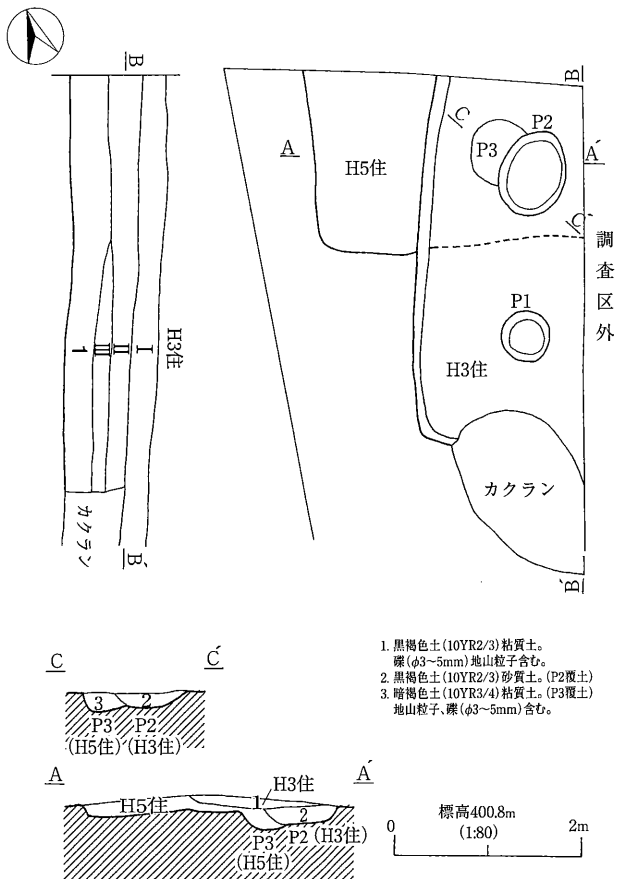
### (3) H3号住居址

#### 遺構 (第13図)

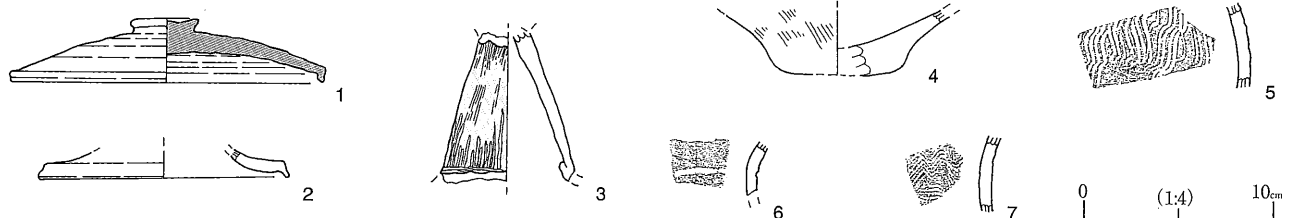
**検出位置** 検出位置 Jけ2、Jけ3グリッド。

**重複関係** H5号住居址を切る。平面形態 遺構の北側と東側が調査区外であり、南側は攪乱を受けているため、住居址の規模および平面形は不明である。唯一検出された西壁を参考にする、東西軸はN-22°-Eを指す。**覆土** 調査区東壁面にて、住居址覆土の観察を行ない、基本層序第II層と第III層直下において遺構の検出面となり、覆土は単層である。床面の状態北側に向かいやや傾斜しており、その比高差は約5cmあり、堅固というほどではなかった。**ピット** 西壁に平行な位置でP1・P2の2つが検出された。P1の平面規模は径56cmで深さ38cmを測り、P2は径96×70cmで深さ14.5cmを測る。**カマド** 検出されなかった。

**遺物の出土状況** 須恵器・土師器・弥生土器が覆土中より出土している。床面直上よりの出土は観られず、完形に近いようなまとまった出土状況の遺物は非常に少なかった。また、土器の帰属時期も混在しており、恐らく3号住居址と5号住居址に帰属する遺物が混在する形で出土したものと考えられる。



第13図 H3号住居址実測図



第14図 H3号住居址出土土器実測図

遺物 (第14図、表8)

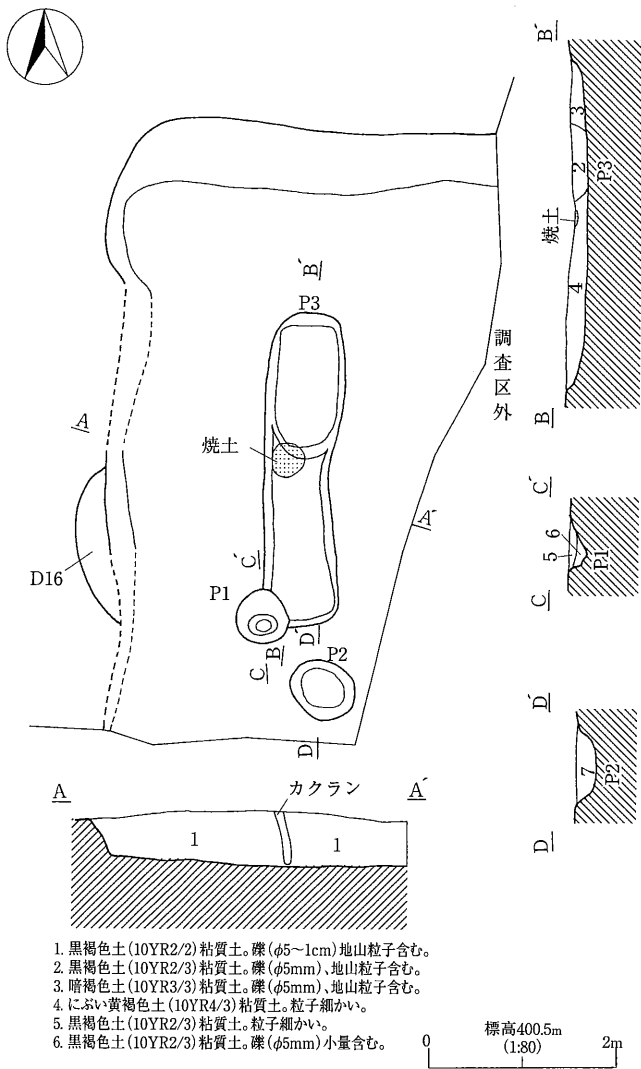
14-1は須恵器の蓋である。Jけ3グリッド、H3号住居址覆土、H5号住居址覆土より出土した土器片が接合し、唯一ほぼ完形に復元できた遺物である。扁平なツمامを持ち、若干外傾する返しを持つ。水平方向の出土位置は床面より浮いているが、Jけ3グリッドはH5号住居址よりH3号住居址に関係すると考えられ、H3号住居址に帰属する遺物として考えられそうである。2は高坏の脚部裾片である。摩滅が著しく調整不明で土師器か弥生土器片か判別困難であるが、断面が灰褐色を呈し、弥生土器の可能性の方が高いと考えられる。3は高坏の脚である。摩滅しながらも丁寧な縦位のヘラミガキが確認でき、赤色塗彩が残される。赤色塗彩が施されることより、弥生時代の高坏と考えられる。4は甕の底部で、ハケメ調整が確認できる。焼成は堅固で土師器との判別が困難であるが、胎土中に小石粒子を多量に含み弥生土器として考えておきたい。5～7は弥生土器片である。5は4本一組の櫛描き波状紋で、多く観られる例とすれば横位に施文するが、本例については土器片の断面カーブおよび裏面のミガキ調整の方向より、縦位に施文されるラフな櫛描き波状紋の甕の胴部片として考えられる。6は太い横位沈線紋と、その直下に施された縄紋を特徴とする、壺の頸部片である。7も5同様に櫛描き波状紋が施されるが、7本一組で横位に丁寧に施される。時期H3号住居址内からは、以上のように弥生土器と土師器等が混在して出土しており、遺物の出土状況による

住居址の帰属時期の判断は難しい。しかし、H5号住居址との重複関係を勘案すると14-1の須恵器蓋を以ってH3号住居址の帰属時期とするのが合理的であろう。従って、本住居址は9世紀前半に帰属すると考えられそうである。

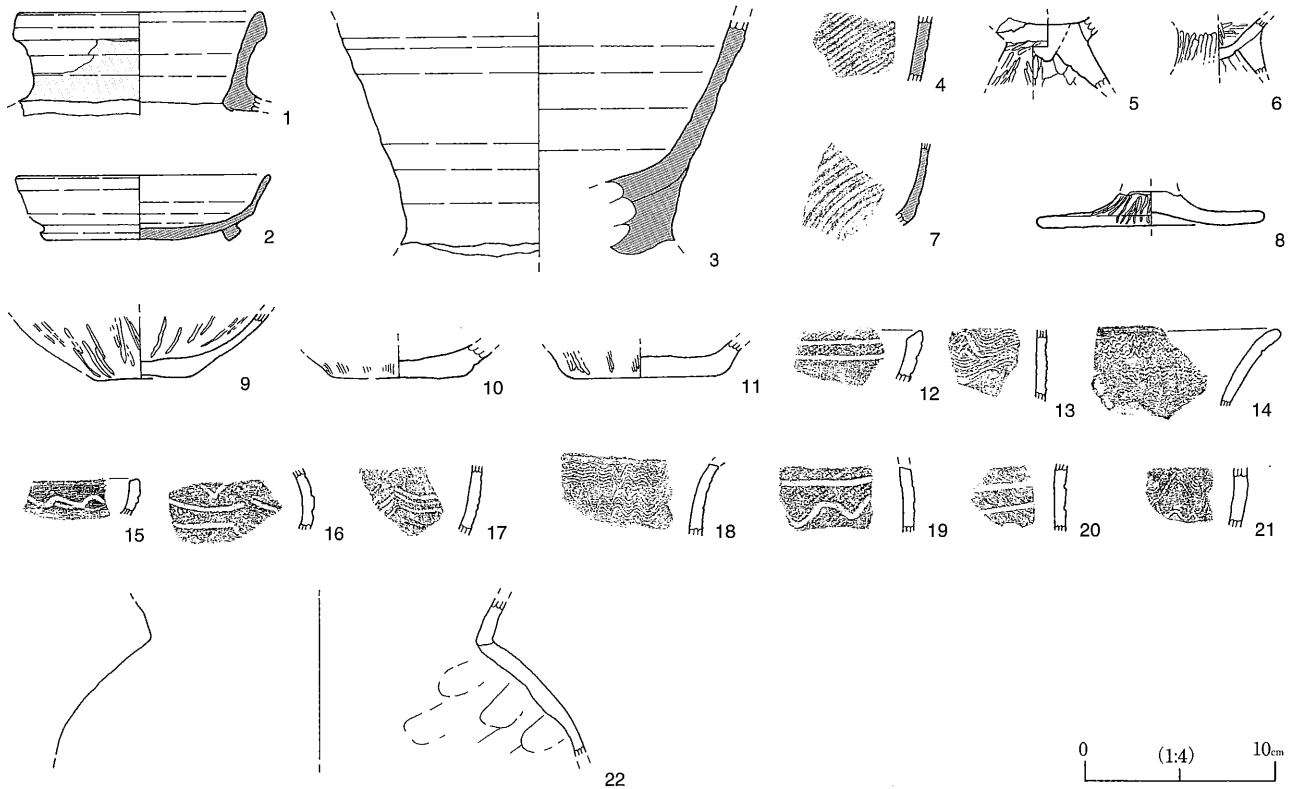
(4) H4号住居址

遺構 (第15図)

検出位置 Jこ7・Jこ8・Oあ7・あ8グリッド。重複関係 D16号土坑を切る。平面形態 南壁と東壁が調査区外にかかり、全容は知り得ないが、炉の位置から推察するに南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈しそうである。床面の状態 概ね平坦で堅固というほどではない。覆土 地山粒子を含む黒褐色土の単層。ピット 南調査区外付近にP1とP2の二つが検出されている。P1は掘り込み径58cm、底面径14cm、深さ45cmで断面2段を呈し、柱穴になりそうである。P2は径68cmで深さ19cmの底の広い形を呈する。炉 北壁より328cm、西壁より172cmの場所より、径34cmの焼土範囲が確認でき、その厚さは5cmを図る。炉石は確認出来なかったが、検出位置や検出面が床面レベルであることなどから、本住居址の炉として考えられよう。床下遺構 炉の下より、南北342cm、



第15図 H4号住居址・D16号土坑址実測図



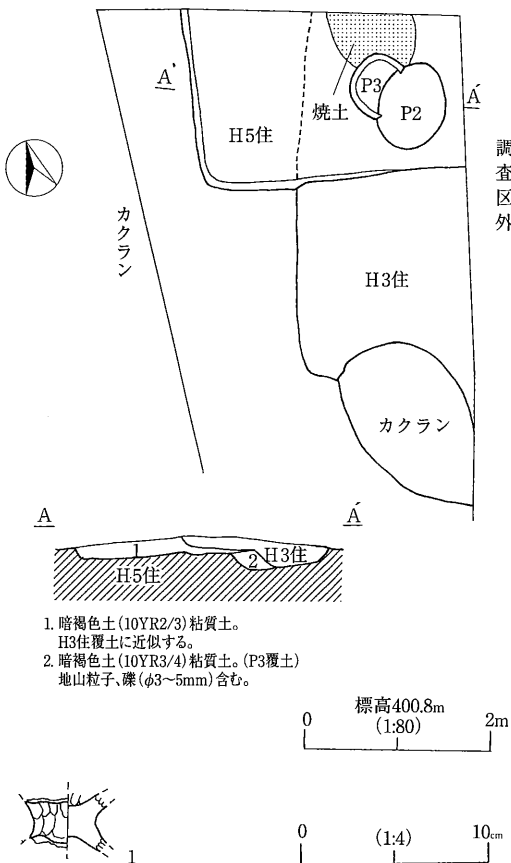
第16図 H4号住居址出土土器実測図

東西78cmの長方形の掘り込みが検出できた。床面との比高差は約11cmを測り、平坦な底面を呈する。遺物の出土状況 覆土中より須恵器・弥生土器が出土しているが、量的には弥生土器片が圧倒的に多くを占める。

遺物 (第16図、表8・9)

16-1～4・7は須恵器で、1・3・7は甕、2はほぼ完形の高台付坏で、底部は高台貼付の後ロクロ調整を施している。それ以外は弥生土器で、完形に近い遺物は無かったが拓本の取れた壺は縄紋を地文とし、太い単沈線紋を施すものが多い。

時期 図化し得なかった遺物も含めて、全体の出土遺物の割合や、住居址に炉を持つ時期であることなどから勘案して、本住居址の帰属する時期は弥生時代とされる。全体の器形を観察できる土器は無いものの、地文に縄紋と太い単沈線紋を施す土器片が目立つことより、少なくとも弥生時代中期にはなるう。



1. 暗褐色土 (10YR2/3) 粘質土。  
H3住覆土に近似する。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘質土。(P3覆土)  
地山粒子、礫(φ3~5mm)含む。

(5) H5号住居址

遺構 (第17図)

検出位置 Jけ2グリッド。重複関係 H3号住居址に切られる。平面形態 北側と東側が調査区外にかかるため、全容は不明。覆土 地山粒子を含む、H3号住居址に近似する単層に被

第17図 H5号住居址および出土土器実測図

覆されていた。床面の状態 概ね平坦で特に堅固というほどではなかった。ピット 調査区北東コーナー付近に一基検出できた。H 3号住居址のP 2に切られ、東半分を欠くが残存部の径は68cm、深さは19cmを測り、平坦な底面を呈する。炉 北側調査区に切られる位置にさほど厚くない焼土範囲が確認できた。焼土範囲は確認できた部分で34cmを測り、その周囲70cmに渡り焼土が飛散していた。①住居址の形態全容が把握できないこと、②焼土範囲が調査区外にかかること、③炉石が検出できなかったこと、などより炉と確信する根拠に乏しいため、ここでは炉としての可能性の指摘にとどめておきたい。遺物の出土状況 H 3号住居址で前述したように、須恵器・土師器・弥生土器片が混在して覆土中より出土している。

#### 遺物 (第17図、表9)

H 5号住居址として現場から取り上げられた遺物で、図化し得たのは17-1の高坏脚部接合部資料のみである。外面に指ナデによる調整を顕著に残し、弥生土器の様相を呈しそうである。図化できなかった遺物に、赤色塗彩を残す高坏の脚部、器厚の厚い甕胴部片があり、いずれも弥生土器片として考えられる。時期完形に近い遺物は無く、量的にも出土遺物が少なく、遺物のみからの帰属時期の判別は困難であるが、H 3号住居址との重複関係やその出土遺物の在り方から、合理性を求めると本住居址の帰属時期は弥生時代になりそうである。ただし、弥生時代のどの時期になるのかを決定づける資料が無いいため、ここでは詳細な時期判別は避けておきたい。

#### (6) H 6号住居址

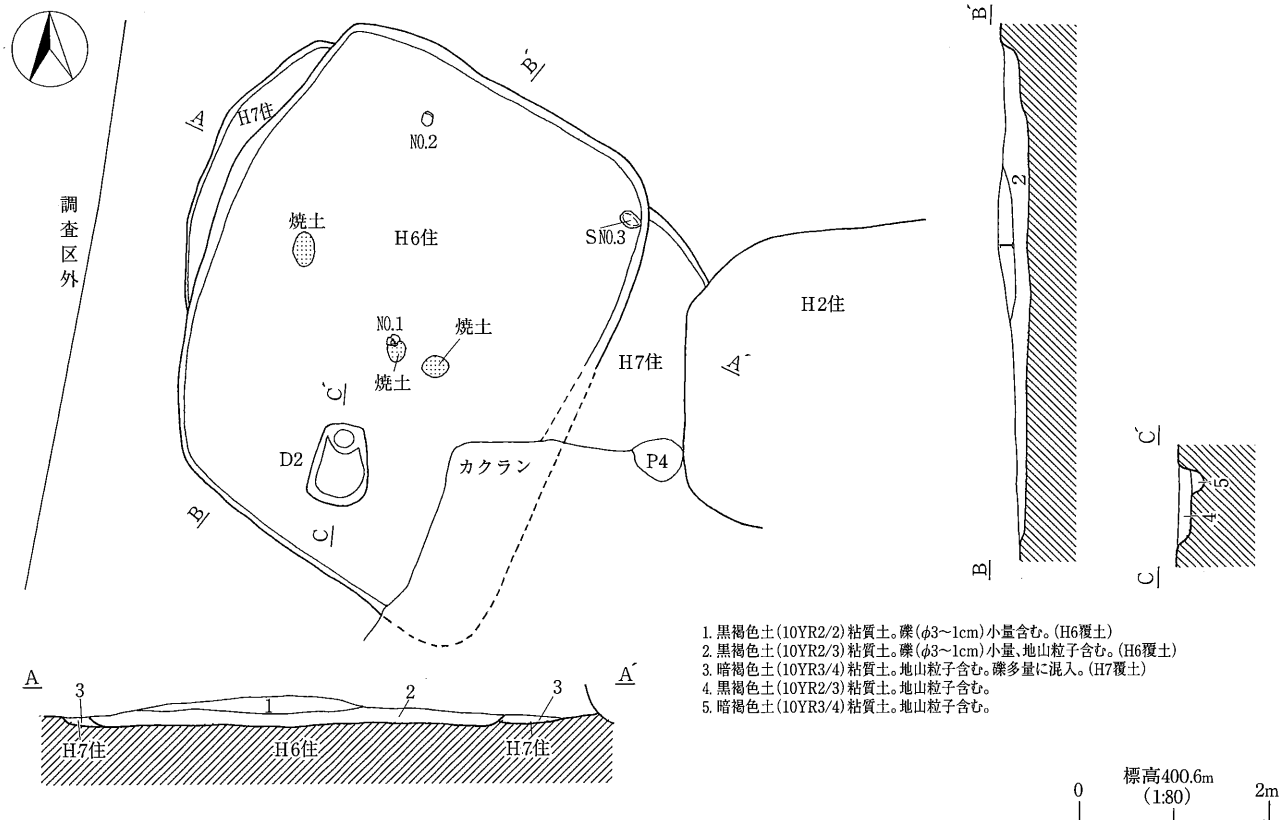
##### 遺構 (第18図)

検出位置 Oあ3、Oあ4、Oい3、Oい4、Oう3グリッド。重複関係 H 7号住居址を切り、D 2号土坑に切られる。平面形態 南西部分を攪乱により破壊されている。南北に536cm、東西436cmを測る南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈する。その軸方位はN-23°-Eを指す。覆土 黒褐色土に被覆されるが、地山粒子の有無により2層に分層された。床面の状況 特に堅固というほどではなく、住居址の軸とは異なり北から南に向かい約10cmの比高差を持ち、やや深くなる。ピット 長軸上の南壁寄りに広いテラスを持つP 1を検出した。テラスの広さは約50cmを測り、最深部径は20cm、テラスとの比高差14cm、床面との比高差28cmを測る。炉 床面レベルで三カ所に焼土のまとまった範囲を確認したが、その厚さはいずれも1~3cmと炉としては薄い。また、平面形も30×20cmほどでそれぞれに大きな差はなく、炉石も検出されなかった。以上のことより、これらのいずれかを日常生活において常に食生活等に伴う火処としての概念上にある「炉」として決定付ける要素に欠けるため、ここでの言及は避けた。遺物の出土状況 覆土内より須恵器片、土師器片、弥生土器が出土している。先行するH 7号住居址の床面を完全に破壊し、H 6号住居址が構築されたことより、これらの住居址の遺物が混在する様相を呈している。しかし、床面直上より器台(19-32)、高坏(19-31)が出土している。

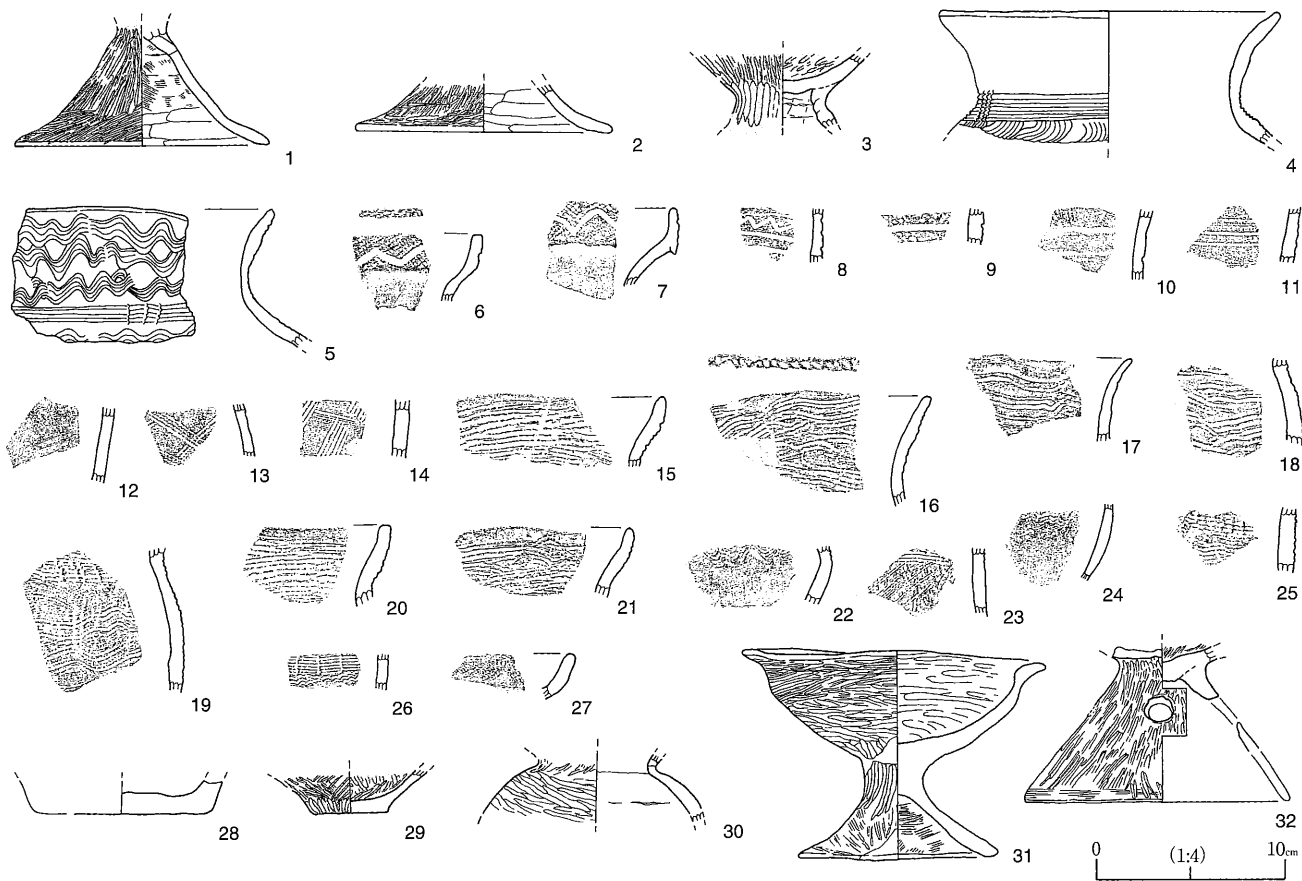
##### 遺物 (第19図、表9・10)

前述したように、H 6号住居址とH 7号住居址の遺物が混在する様相が強いため、ここでは両住居址出土の遺物を一括掲載してある。多くの土器片が出土する中で、須恵器は蓋と坏の小片が2点のみで、他の大半は弥生土器片であった。それらの中で図化し得たのは32点ある。1~3は丁寧なヘラミガキとともに定着率の良い赤色塗彩が施された弥生土器である。4は櫛描き連弧文の後、同工具による簾状文3連止めの弥生土器の甕である。H 7号住居址と隣接するH 2号住居址の出土地点の破片が接合している。5は5本一組の櫛描





第18図 H6・7号住居址実測図



第19図 H6・7号住居址出土土器実測図

波状紋が下位から上位に向けて施文され、頸部にはやはり同工具による簾状文3連止めが施される。その他の櫛描波状紋はこれらの2点に比べて、ラフな感を受ける。6～9は縄紋地文に太い単沈線紋による施文がなされ、弥生土器の壺になろう。10は縄紋は施されないが、沈線紋の様子から同種として考えられそうである。31・32はH6号住居址の床面直上から出土している。31は北壁付近の床上4cmから出土した高坏である。ほぼ完形で倒位の状態で出土した。内外面に丁寧なヘラミガキで調整されるが、赤色塗彩はされない。坏部は口縁部で外折し、小さめであまり開かない。32は住居址中央の焼土集中部から床面に接して出土した脚部である。丁寧なヘラミガキで調整されるが、やはり赤色塗彩は施されず、円形の焼成前穿孔を持つ。完存ではないが、現存する2ヶ所の円形穿孔部の箇所から推測するに、恐らく等間隔三カ所に配置されていたと考えられる。時期 2棟の住居址出土遺物の様相に明確な一線は引きずらく、時期判別は困難であるが、19-31・32の床面直上から出土した遺物を以って本住居址の帰属時期と考えるのが普通であろう。従って、古墳時代初頭と考えたい。

#### (7) H7号住居址

##### 遺構(第18図)

**検出位置** Oあ3、Oあ4、Oい3、Oい4、Oう3グリッド。**重複関係** H6号住居址とH2号住居址に切られる。**平面形態** 南部を攪乱により破壊され、住居址の大半をH6号住居址に床面までも破壊されるため形態は不明だが、僅かな検出部から推定すると、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈しそうである。覆土地山粒子を含む暗褐色土で被覆されていた。**床面の状況** 残存する床面は概ね平坦で、さほど堅固とはいえない。**遺物の出土状況** H6号住居址の項で前述した通りである。

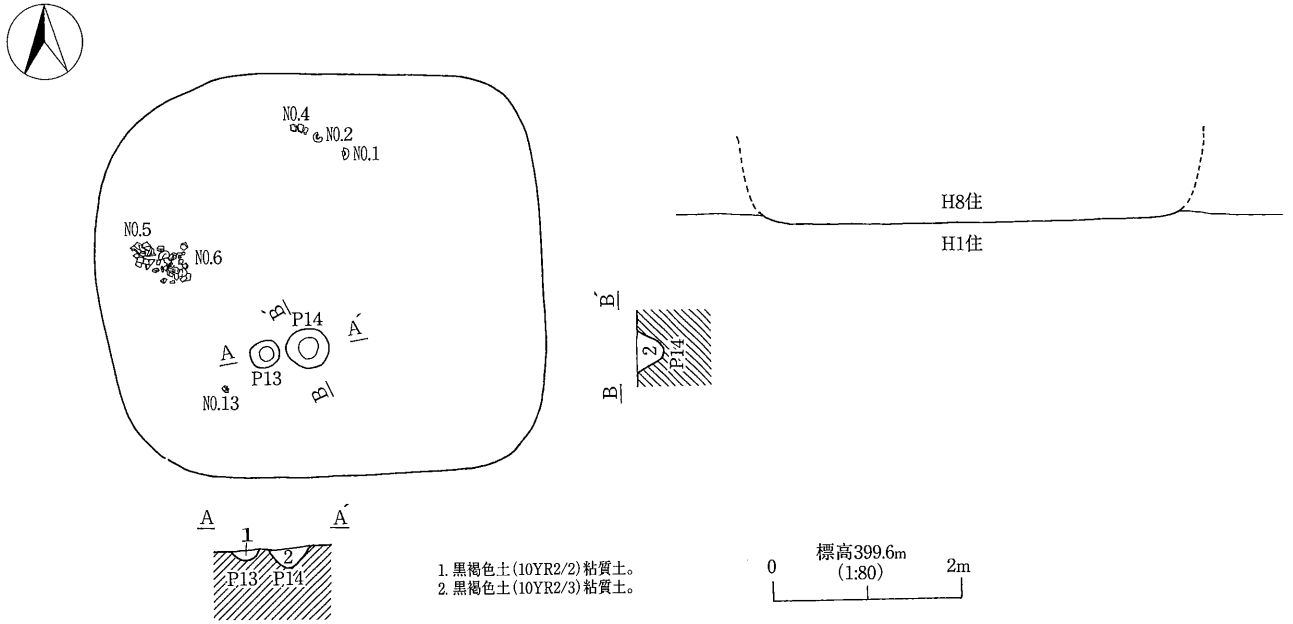
##### 遺物(第19図、表9・10)

**時期** H6号住居址の項で前述したように、重複する2棟の住居址の出土遺物が混在している。しかし、H6号住居址の帰属時期を床面直上から出土した遺物を以って、古墳時代初頭に位置付けた。従って、出土遺物の中で主体を占める弥生後期土器の帰属がH7号住居址に求められよう。通常、重複関係を持つ遺構の場合は後から構築された遺構の遺物の残存状態および出土量が多い。しかし、本遺構に関しては①先行する住居址の床面を完全に破壊していること。②住居址構築時の盛り上げ土による住居埋没過程において、先行する住居址に帰属する遺物が多く出土する結果となったと把握したい。これはH6号住居址の覆土下層に地山粒子が含有されることから、裏付けられよう。

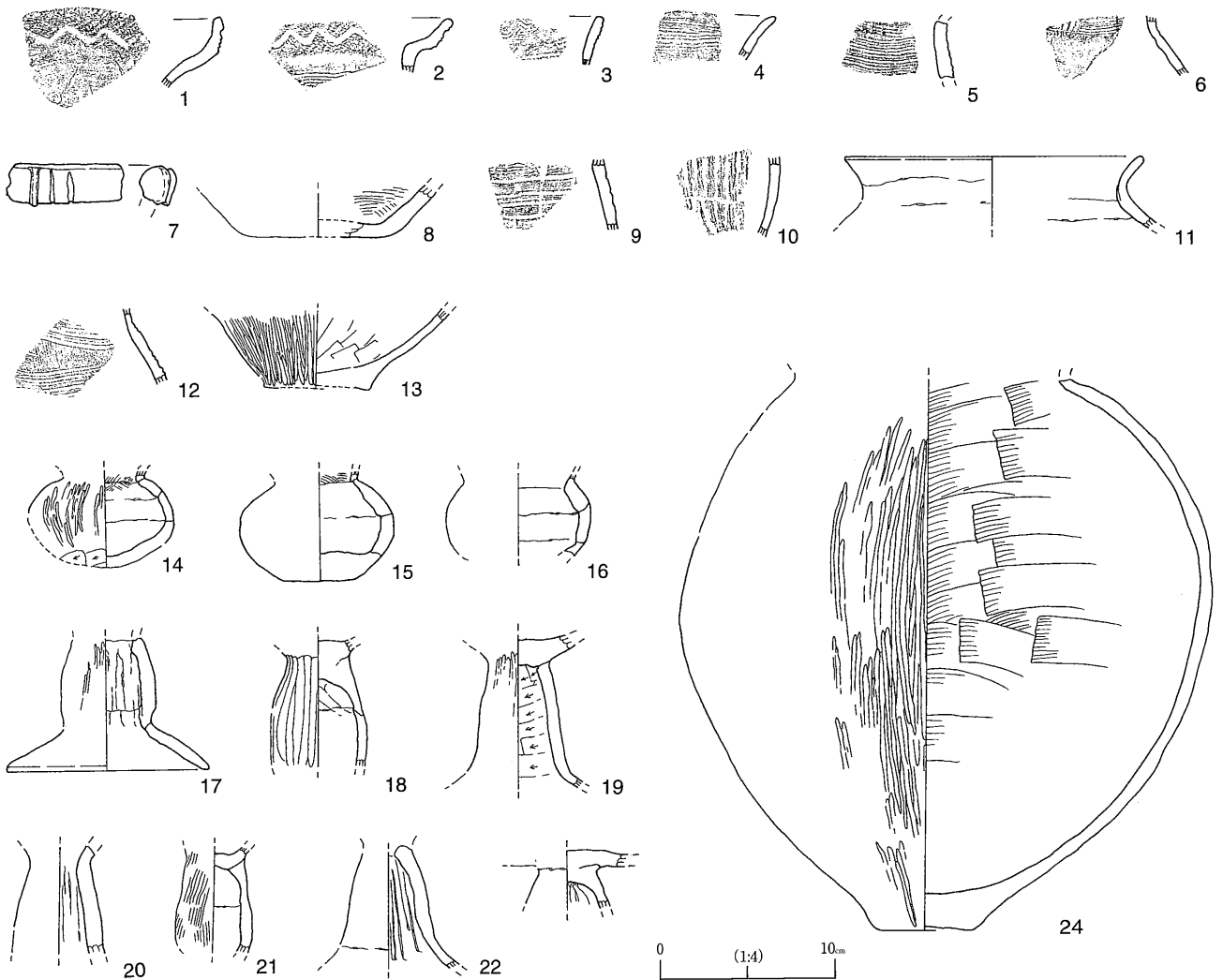
#### (8) 第8号住居址

##### 遺構(第20図)

**検出位置** Oあ6、Oあ7、Oあ8、Oい6、Oい7、Oい8グリッド。**重複関係** H1号住居址とP12号ピットを切り、D3・D4・D8・D10号土坑址、P3・P6・P7・P9号ピットに切られる。**平面形態** 検出面において、まとまった遺物の出土を観たことと、出土遺物の帰属時期により、黒褐色土の範囲をH8号住居址と判断したが、黒褐色土層は非常に薄く住居址の壁の検出には至らなかった。従って、住居址の平面形態は不明である。**覆土** 黒褐色土が住居址の最下層の覆土か、あるいは床面構築層になろう。**床面の状況** 特に堅固な面は検出できず、黒褐色土においても固く締まる様相はなかった。**ピット** 黒褐色土確認範囲の東南にP1、P2の二つのピットを検出した。P1は径29cmで深さ11cmを測る。P2は径42cmで深さ



第20图 H 8号住居址实测图



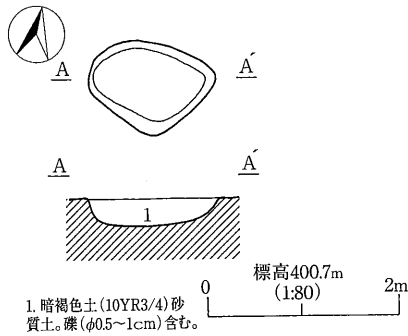
第21图 H 8号住居址出土土器实测图

17.5cmを測る。炉 黒褐色土検出面と同レベル、あるいは僅か1cm下がったレベルより、Oい7グリッド内において径44cmの焼土集中範囲が確認できた。焼土の厚さも、黒褐色土層と同様に非常に薄く、炉としての機能については言及できない。遺物の出土状況 黒褐色土上よりまとめて土師器が出土しており、破片としては土師器・弥生土器片・石器が出土している。

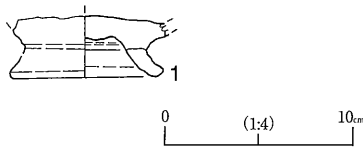
#### 遺物（第21図、表10）

図化し得たものは石器も含めて25点ある。石器（第44-10）については、本住居址への帰属判断が困難なため、石器の項で紹介する。以下、第21図の土器について紹介する。1・2はRL縄紋を地文に太い単沈線による山形紋を施す、壺の有段口縁である。器形、文様ともに同種であるが2は有段直下に櫛描き横走沈線紋が施される。3は櫛描き波状紋の弥生土器の甕胴部片である。4も櫛描き横走沈線紋の甕口縁部である。5も4同様の施文が施されるが、3連止めの簾状紋が施される。6も同様の櫛描き紋であるが、頸部に異なった工具による櫛描きT字文が施される。7は有段口縁に棒状浮文が縦位に1本貼付されている。その右に2本の沈線があるが、貼付された粘土の剥離した跡が確認できることより、棒状浮文の接着度を安定させるための沈線の上に棒状浮文が貼付されていたものと断定できる。8は内面にハケメ調整が施された壺の底部である。胎土および内面調整の特徴から、弥生土器と考えたい。9は櫛描き横走沈線紋と単沈線による平行沈線紋が施される。12は地文にハケメを残す櫛描き横走沈線紋が施される。土師器としたものは、以下の12点である。10も拓本では9と近似するが、内面調整および土器片の湾曲の様子より施文方向は縦位と判断したい。また、沈線紋と言うより搔目調整と表現した方が良さそうな土器片である。11は完存する甕の口縁部から頸部である。内外面にハケメ調整が施される。13は内外面に非常に丁寧な磨きが施された壺の底部である。器厚が薄く、堅固な焼成であり土師器と判断した。14・15・16は小型丸底壺である。15・16はまとまった状態で出土しており、本住居址の帰属時期の判断資料としたものの2点である。これらの土器は全て輪積み痕を内面に顕著に残し、外面は丁寧に磨かれている。14は底部にヘラケズリ痕を残す。17～23は高坏の脚である。17は中位に膨らみを持つ脚部に浅い伏せ椀様の裾部を呈する。18も同様の脚部形態を持つ。19～22も脚部の中位にやや膨らみを持つが、17・18ほどではない。22の裾部は僅かな部分から推察するに、17同様の浅い伏せ椀様の裾部を呈しそうである。これらの高坏に赤色塗彩の痕跡は確認できなかった。24は頸部以上を欠き、胴部が張り出し小さな底部に収束する甕である。外面は丁寧なヘラミガキで調整され、内面はやはり丁寧なハケメ調整が施される。

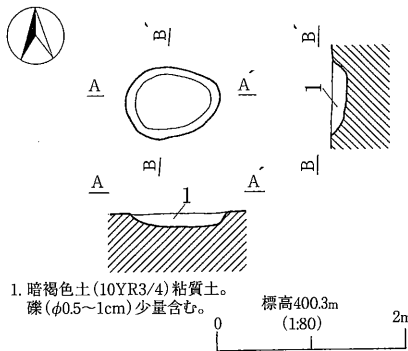
時期 住居址自体の遺存度が非常に低く、また重複するH1号住居址に帰属する遺物の混入の可能性を考慮すると判断に難しいが、黒褐色土層からまとまった状態で出土した21-15・16・17・20を指標とすると、古墳時代前期になる。また、7の棒状浮文を持つ有段口縁の壺などの存在をも勘案すると、古墳時代前期でも初頭に比定される可能性が指摘できよう。



第22図 D1号土坑址実測図



第23図 D1号土坑址出土土器実測図



第24図 D2号土坑址実測図

## 第2節 土坑址

### (1) D1号土坑址

#### 遺構(第22図)

**検出位置** Oあ3グリッド。**重複関係** なし。平面形態 長軸134cm、短軸92cmの楕円形を呈し、深さは30.5cmを測る。長軸方位は、N-75°-Wを指す。**覆土** 礫を含む暗褐色土の単層で被覆されていた。**遺物の出土状況** 南東コーナーより底面から6.5cm浮いた位置で、高台付坏の底部が出土している。

**遺物(第23図)** 高台はやや足が長く、ロクロ調整痕が顕著で、器厚が厚い。**時期** ①遺物の遺存度が低く、詳細な土器の特徴が観察できないこと。②他遺構との重複関係を持たないこと。などから時期判別は困難であるが、土器の僅かな特徴より平安時代の足高高台の坏あるいは碗の可能性が示唆できよう。

### (2) D2号土坑址

#### 遺構(第24図)

**検出位置** Oい4グリッド。**重複関係** H6号住居址を切る。平面形態 長軸98cm、短軸74cmの楕円形を呈し、深さは15cmを測る。長軸方位はW-4°-Sを指す。**覆土** D1と含有物、色調ともに非常に近似する覆土の単層で被覆されていたが、粘質土である。**遺物の出土状況** なし。

**時期** 出土遺物が全くないので、帰属時期を判別する要素を持たないが、古墳前期初頭のH6号住居址より後出することより、古墳時代以降であると言えよう。

### (3) D3号土坑址

#### 遺構(第25図)

**検出位置** Oい7、Oう7グリッド。**重複関係** H8号住居址・H1号住居址を切る。平面形態 長軸164cm、短軸98cmの楕円形を呈し、深さは18.5cmを測る。長軸方位はN-11°-Eを指す。**覆土** にぶい褐色土の単層で被覆されていた。**遺物の出土状況** 東側覆土中より鉄滓が出土しているが、鏝の付着がひどく残念ながら、図化することはもとより器種判別もできなかった。

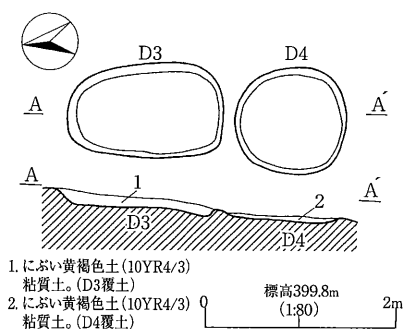
**時期** 出土遺物が皆無なため、帰属時期の判別は困難であるが、古墳時代前期に帰属するH8号住居址に後出することより、古墳時代以降ということは言えそうである。

### (4) D4号土坑址

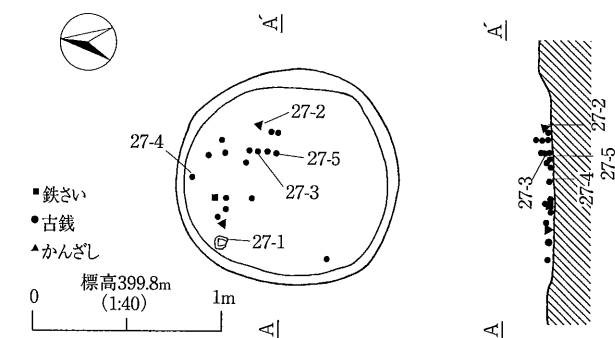
#### 遺構(第25図)

**検出位置** Oい7、Oい8、Oう7、Oう8グリッドで、D3号土坑に隣接して検出された。南北に118cm、東西に112cmのほぼ円形を呈し、深さは57cmを測る。**覆土** D3号土坑址と同様の単層で被覆されていた。

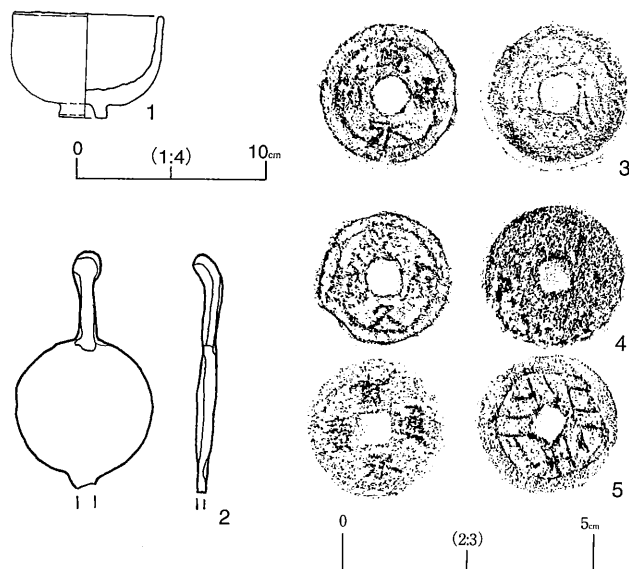




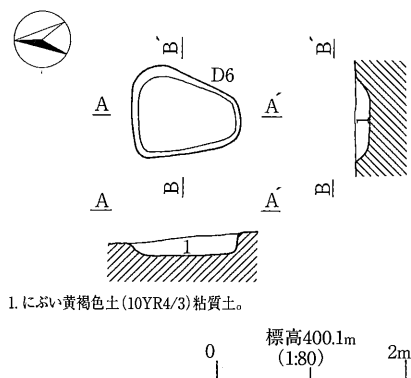
第25図 D 3・4号土坑址実測図



第26図 D 4号土坑址遺物出土状況図



第27図 D 4号土坑址出土遺物実測図



第28図 D 6号土坑址実測図

遺物の出土状況 底面直上および覆土中より古銭、鉄類、青銅製簪、鼈甲片、茶碗が出土している。銭束の出土により、墓壇の可能性もある。遺物(第26・27図、表11)

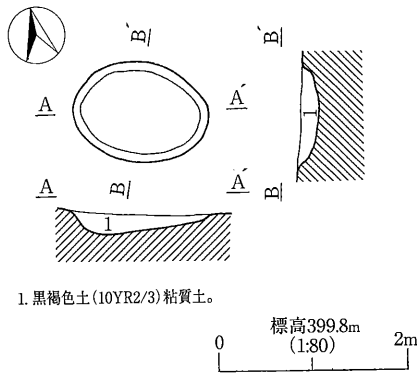
16枚の青銅製の古銭と束ねられた状態の銭束が出土するが、錆の付着がひどく、図化できたのは第27-3・4・5の3枚だけである。これらは全て、土坑底面直上より出土している。27-2は青銅製の簪で飾り部分である。先端が欠損するが比較的しっかりした遺存状態である。これも底面直上より出土している。時期 時期判別の手がかりとしては、大

量に出土している古銭が有効である。16枚の古銭の中で、図化し得た3点の古銭において、2枚の面には「寛永通寶」、1枚の面には「文久〇宝」の文字が判読できる。3の寛永通寶は孔郭が円形様を呈し、円穿のように見えるが、方形の重郭を持つので埋蔵状態の影響も考えられる。4・5は方穿である。面においては全て重輪で、背においては3・5が重輪である。帰属時期であるが、古銭の中でも最も種類の多いと言われる「寛永通寶」中でいずれに対応するのは、緑錆のために細部まで観察できない出土品では困難である。しかし、背の波紋や全体の大きさから推察すると、慶應二年铸造の「背ア却去」か「背逆ト」寛永通寶にあたる可能性が高い。西暦ではともに1866年にあてはまる。また、「文久〇宝」については、「文久永寶」「文久通寶」の可能性はあるが、銭の大きさからすると文久三年铸造の「真文」文久永寶にあてはまりそうである。西暦では1863にあたる。いずれも、江戸時代最末期の古銭であり、従って本遺構の帰属時期としては江戸時代末期以降と言えよう。

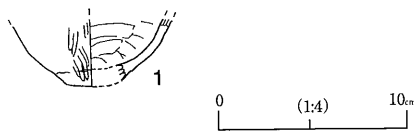
### (5) D 6号土坑址

#### 遺構(第28図)

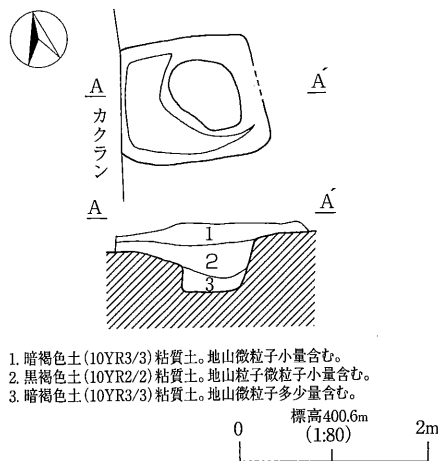
検出位置 Oう6、Oい6グリッド。重複関係 H1号住居址を切る。平面形態 長軸124cm、短軸96~54cmで、深さ30cmを測る。ほぼ南北軸に長軸を持ち、北位に底辺を持つ隅丸三角形を呈する。覆土 D3・D4土坑址と全く同じ単層で被覆されていた。遺物の出土状況 遺物は出土していない。時期 出土遺物が無く、明確なことは言えないが、覆土よりD3・D4号土坑址と同時期と考えたい。



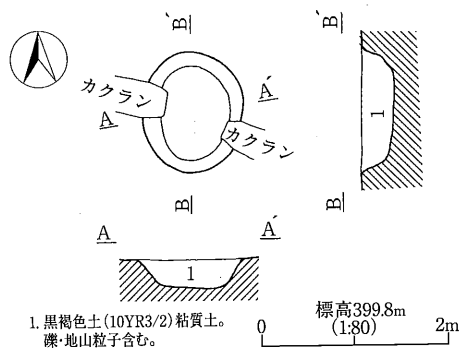
第29図 D 8号土坑址実測図



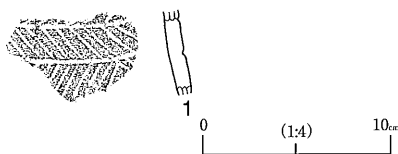
第30図 D 8号土坑址出土土器実測図



第31図 D 9号土坑址実測図



第32図 D10号土坑址実測図



第33図 D10号土坑址出土土器実測図

## (6) D 8号土坑址

### 遺 構 (第29図)

位置検出 Oい6、Oい7グリッド。重複関係 H1・H8住居址を切る。平面形態 長軸142cm、短軸104cmの楕円形を呈し、深さは9cmを測る。長軸方位はN-80°-Eを指す。遺物の出土状況 覆土中より2点の土器片が出土している。

### 遺 物 (第30図、表11)

図化できた1点は小さな底部から、大きく外傾しながら立ち上がると思われる甕の底部である。内面に横位ヘラナデ、外面にハケメによる調整が施される。今回、図化できなかったもう1点の土器片は、破片は大きいものの口縁部の遺存度が低く、口径が推定出来ない。少ない口縁部から推測すると、底部に向かう角度は大きくなり、鉢型の器形を呈しそうである。文様は持たず、調整はナデによる。表裏断面共ににぶい橙色(7.5YR6/4)で、堅固な焼成である。断面が褐灰色を呈する30-1の甕との時期差を感じる。時期 これらの2点の土器からでは、時期判別は不可能である。

## (7) D 9号土坑址

### 遺 構 (第31図)

検出位置 Jこ4グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸154cm、短軸132cmの長方形を呈し、西側にテラスを持ち、底面は長軸96cm、短軸66cmの楕円形を呈する。テラスまでの深さは28cm、底面の深さは84.5cmを測る。方形土坑の軸方位はN-81°-W、楕円形底部の軸方位はN-24°-Wを指す。覆土 暗褐色土と黒褐色土で色調により3層に分層できた。遺物の出土状況 遺物は全く出土していない。時期 出土遺物が全く無く、覆土も同類の遺構が確定できないため、帰属時期は不明である。

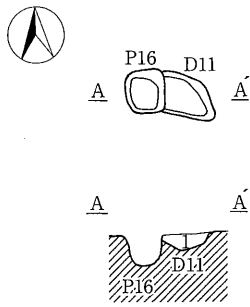
## (8) D10号土坑址

### 遺 構 (第32図)

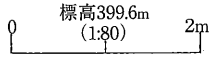
検出位置 Oい7グリッド。重複関係 H1号・H8号住居址を切る。平面形態 長軸128cm、短軸106cmの楕円形を呈する。深さは33cmを測る。軸方位はN-15°-Eを指す。覆土 黒褐色土の単層で被覆されていた。遺物の出土状況 覆土中より2片の弥生土器が出土している。

### 遺 物 (第33図、表11)

1は細い単沈線による横位の綾杉紋を施した壺の頸部である。もう1点は遺存度が低く、底部径を推定できずに図化を断念した鉢の



1. 黒褐色土(10YR2/2)粘質土。  
地山粒子含む。



第34図 D11号土坑址実測図

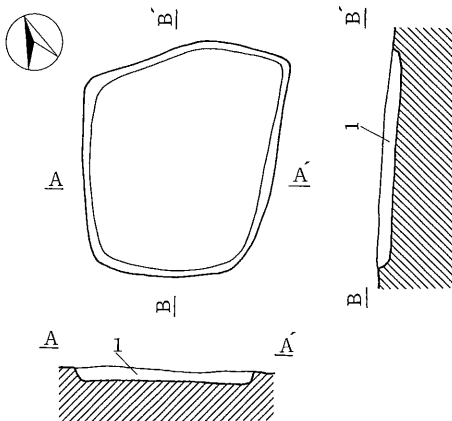
胴部下半である。内外面に丁寧な赤色塗彩が施され、丁寧に磨きこまれている。  
時期 遺物の特徴は弥生中期に比定される。しかし、遺構の帰属時期としては、古墳時代前期の可能性の高いH 8号住居址の覆土あるいは床面を掘り込んでいることから、矛盾が生じる。また、更に先行するH 1号住居址の覆土中より、本土坑の出土遺物と同様の土器片が出土することから、出土遺物を以っての時期判定は避けたい。

### (9) D11号土坑

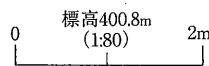
#### 遺構(第34図)

検出位置 Oう8グリッド。重複関係 P16号ピットに切られる。平面形態 P11号ピットに西側を破壊され、平面形態は不明であるが、壁残高は18.5cm、長軸方位はN-77°-Wを測る。

覆土 D9号土坑址第2層に近似する黒褐色土の単層で被覆されていた。遺物の出土状況 出土する遺物は無い。時期 出土遺物が無いこと、D9号土坑址の第2層に近似するものの、全く同じ覆土の遺構が無いことから、詳細な時期判別はできないが、重複関係よりH4号住居址の弥生時代中期よりも先行する可能性を指摘しておきたい。



1. 黒褐色土(10YR3/2)粘質土。  
礫(φ0.5-1cm)含む。



第35図 Ta1号竪穴状遺構実測図

## 第3節 その他の遺構

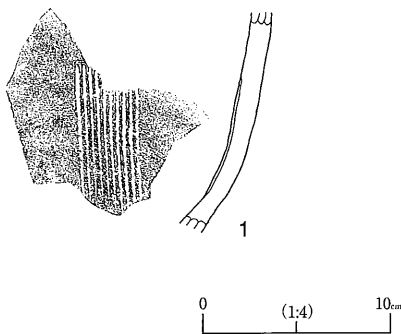
### (1) Ta1号竪穴状遺構

#### 遺構(第35図)

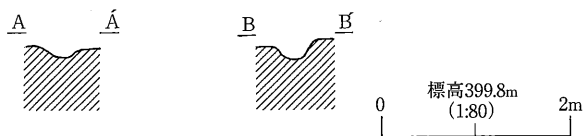
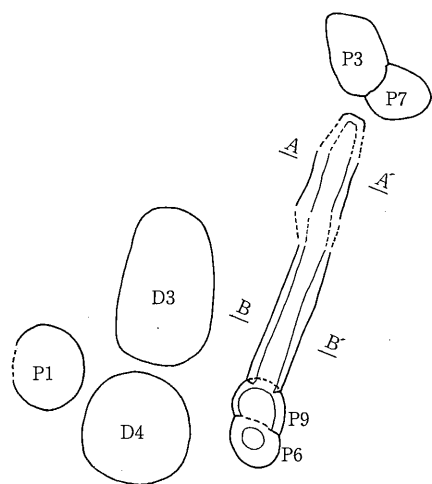
検出位置 Jこ3、Oあ3グリッド。重複関係 なし。平面形態 長軸248cm、短軸198cmの長方形を呈し、深さは25cmを測る。長軸方位はN-19°-Eを指す。覆土 黒褐色土の粘質土で被覆されていた。床面状態 凹凸は無いが、全体に北から南に向かい約10cmの比高差を持ち傾斜している。ピットおよび壁周などの付属遺構は一切、確認できなかった。遺物の出土状況 覆土中より須恵質土器が1点出土するのみである。

#### 遺物(第36図、表11)

唯一の出土遺物は、拓本にて図示できた。破片が少なく、全体の器形や法量を算出出来る要素が無く、部分でしか観察できないが、胴部下半にあたると思われる。外面は浅いハケメ、内面は櫛のような工具により深い10本の縦位沈線が施されていることより、挿鉢の可能性はある。時期 図化した部分破片からのみでは、判別困難であるが器厚の厚い須恵質の挿鉢の帰属時期として10C以降にとどめておきたい。



第36図 Ta1号竪穴状遺構出土土器実測図



第37図 河川址実測図

## (2) 河川址

### 遺構 (第37図)

検出位置 Oい7グリッド。重複関係 H8住居址を切りP9号柱穴址に切られる。平面形態 幅32~38cm、おおよそ南北300cmの長さで、南端をP9柱穴址に切られて検出された。その深さは1~4cmと浅い。主軸はN-19°-Eを指す。覆土地山の黄褐色土と非常に近い砂礫層で被覆されており、遺構検出時点においての明確なプランの確認は出来ず、覆土も非常に薄かった。遺物の出土状況 遺物の出土は無かった。時期 出土遺物が無く、P9号柱穴址の出土遺物も無く、従って本址の帰属時期を知る手がかりが乏しいため、時期は不明である。

## (3) 柱穴址

### 遺構 (第38図・第1表)

全部で16基の柱穴が検出された。掘立建物址の柱穴として認識できたものは無く、遺構としての

性格は不明である。覆土 大半の柱穴址が単層で被覆される中、唯一P6号柱穴址の覆土が4層に分層できた。平面形態および、深さは一覧表をご参照いただきたい。

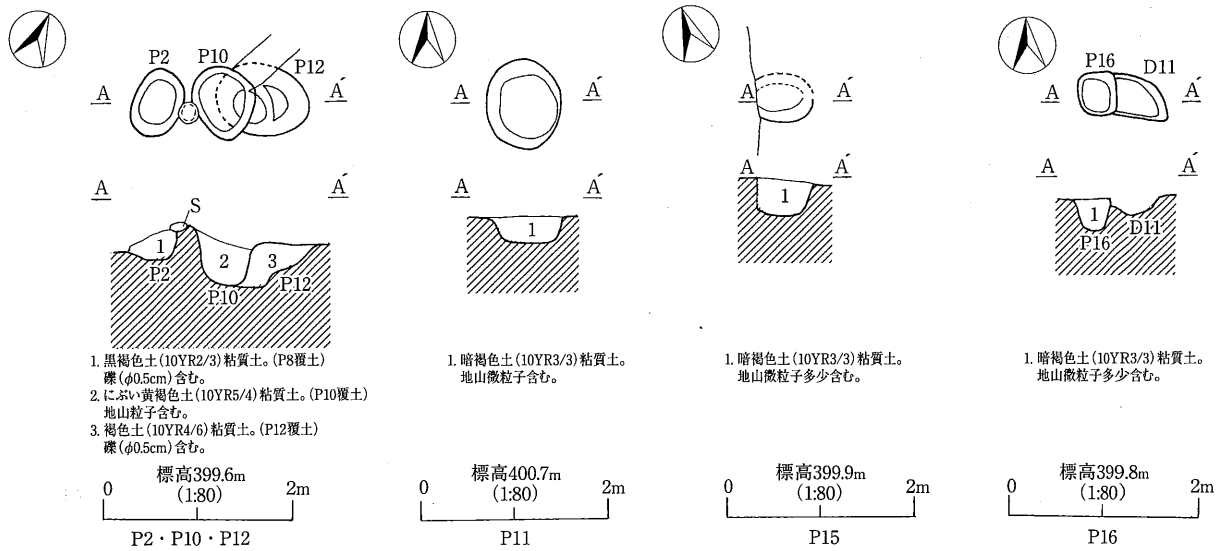
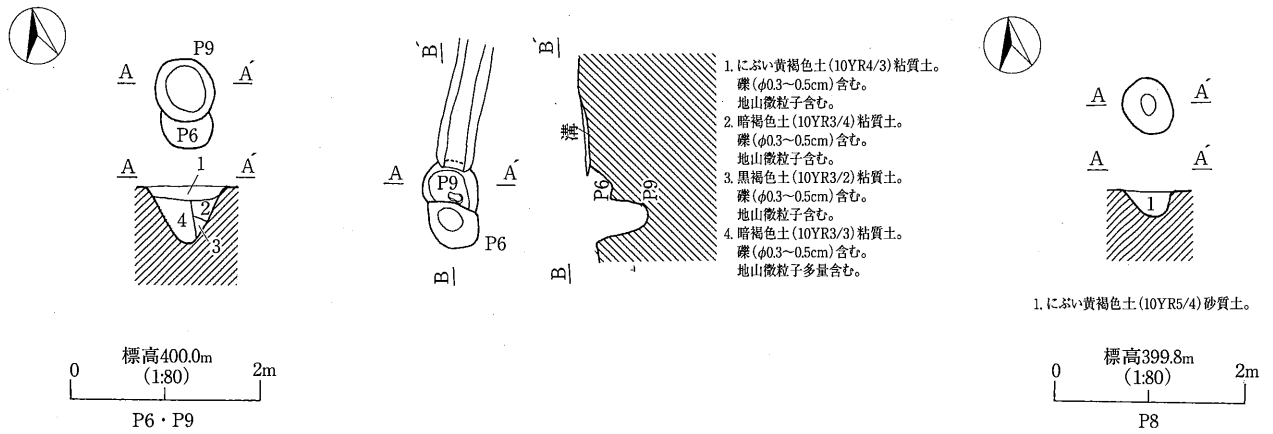
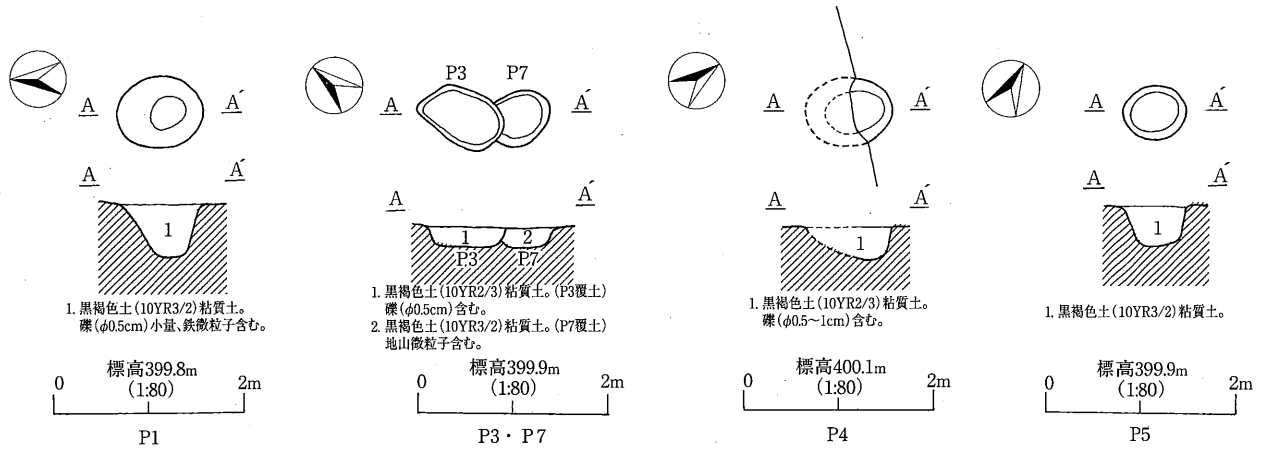
### 遺物 (第39図、表11)

全体に出土遺物は非常に少ない。1はP3号柱穴覆土より出土した坏の底部で、ロクロ成形による。内外面に灰釉が施されている。内面底部には重ね焼き時において上に重ねられた土器の底部により、粘土生地および釉薬が剥がれた痕跡が観察できた。時期 10C以降に帰属すると考えられる。2・3はP3から出土した遺物である。2は甕の底部で、内面に粗いヘラナデが施されている。3は土師器の甕の口縁部~胴部上位である。外面の頸部以下に搔目、内面に粗いハケメにより調整が施されている。頸部は強く「く」の字に外折する。その他として図化し得なかったが、他に土師器の高坏の口縁部片が2個体分出土している。時期 全容を窺える土器は出土しておらず、詳細は不明であるが少なくとも、古墳時代以降になろう。4はP7号柱穴址から出土した土師器の甕口縁部である。器厚は厚く、ロクロヨコナデにより調整が施されている。時期 少なくとも古墳時代以降にとどめておきたい。

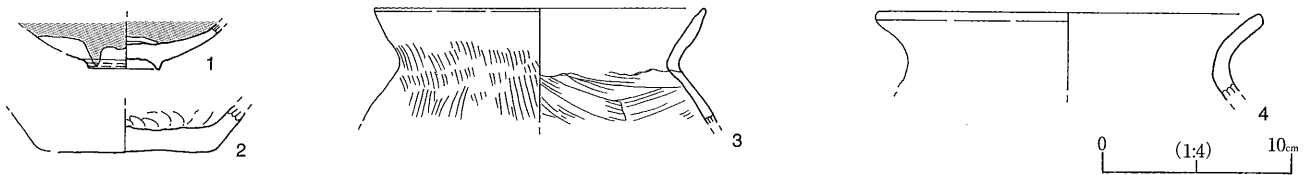
第1表 検出ピット状遺構一覧表

遺構	規模(長軸×短軸)	深さ	遺構	規模(長軸×短軸)	深さ
P1	184×152	112	P9	(104)×104	112
P2	152×104	72	P10	160×128	104
P3	160×120	40	P11	96×80	28
P4	(184×144)	72	P12	(200)×152	96
P5	136×112	80	P13	カクランに変更	—
P6	144×120	88	P14	カクランに変更	—
P7	(136)×120	40	P15	(128×104)	30
P8	120×104	56	P16	208×88	72

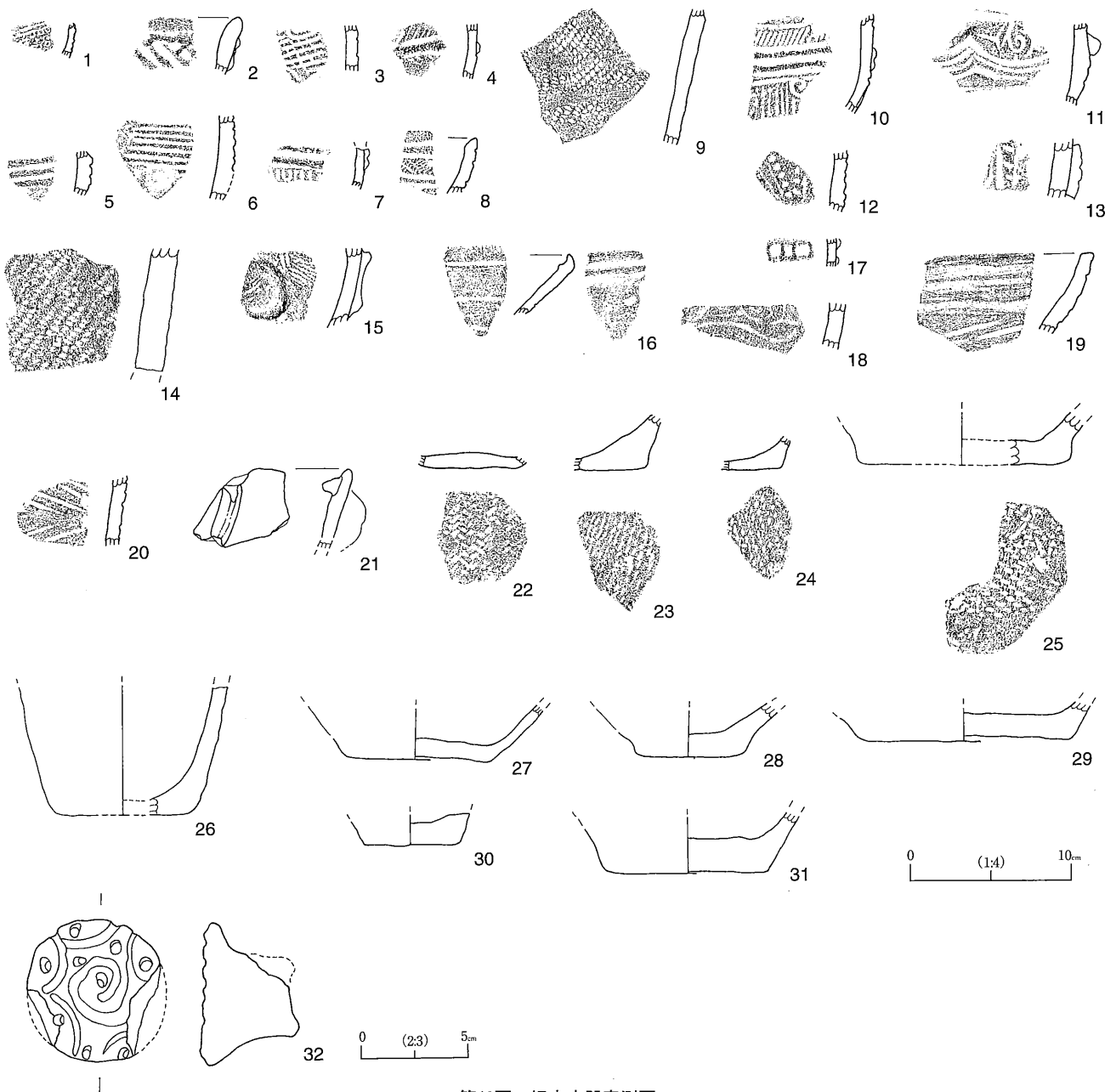
単位=cm 数字の( )は推定値



第38図 柱穴址実測図



第39図 柱穴址出土土器実測図



第40図 縄文土器実測図

#### 第4節 遺構外出土の遺物

今回の調査では、弥生時代・古墳時代・歴史時代・近世の遺構が検出された。本節では、これらの遺構内から出土しなかった該期遺物、これらのいずれの時期にも該当しない縄文土器、帰属遺構の明確でない鉄器、石器の資料紹介をしておきたい。

##### (1) 縄文時代の土器 (第40図、表11・12)

H1・2・3・4・6・8号住居址内覆土および、その周辺より縄文土器片が出土している。その量は全体でテンバコ半箱分程度と決して多くは無く、遺存度も低い。図化し得た資料は32点である。1は細かい円形刺突紋の後、細い半裁竹管による横位平行沈線紋が施される。小片ではあるが、松原遺跡出土の縄文土器No167・191・217に類例を求められそうである。時期としては、松原遺跡では中期初頭に位置付けている。2はソーメン状浮線文による格子目紋、3は半裁竹管による平行沈線紋と単沈線による格子目紋地文に太い

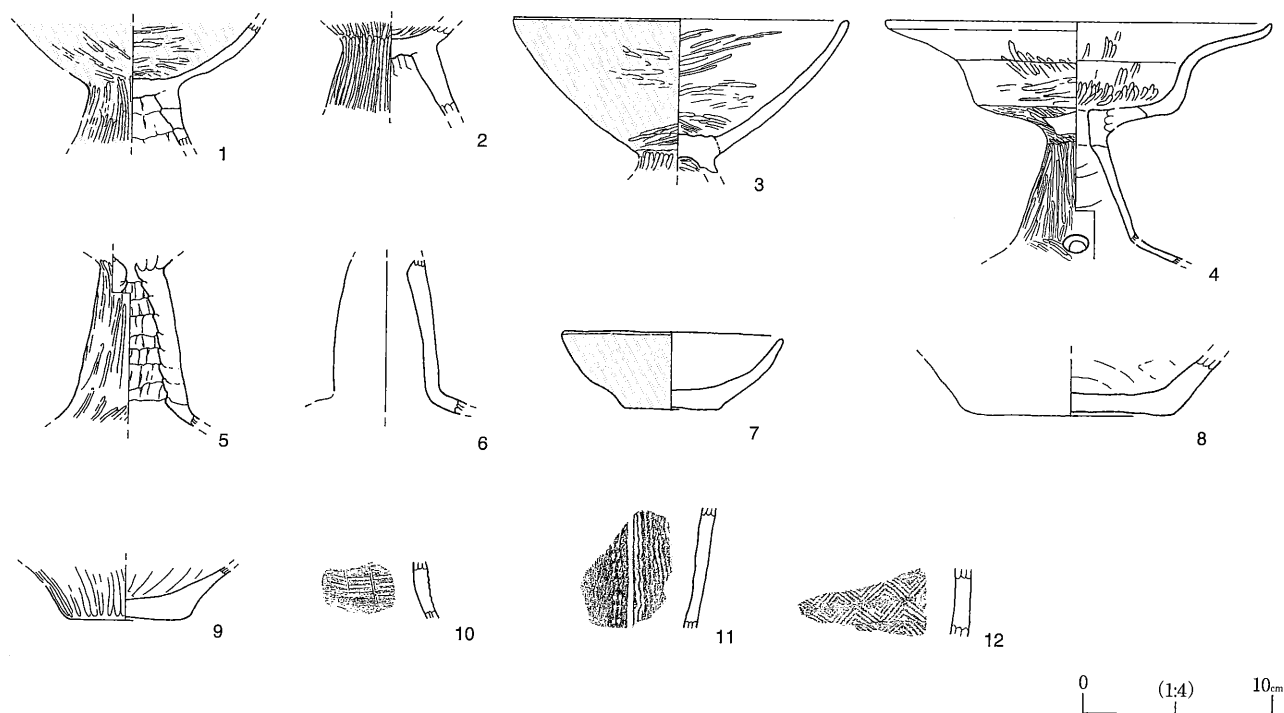


半裁竹管、4は隆帯の上下に斜行沈線紋、5～7は細めの半裁竹管による平行沈線紋を多用している。8は細く浅い斜行沈線紋地文に単沈線による位平行沈線紋。9は粒の細かいLR縄紋。10は隆帯による横位区画される文様区画内に単沈線による斜行沈線紋と、縦位平行沈線紋地文に太い単沈線による渦巻紋。11は幅広い平板隆帯の上に渦巻き紋と三叉紋を刻み半肉のであり、隆帯に沿って3～4条の単沈線による重弧紋。12はU字条の沈線紋に沿う連続刺突紋。13は頂部に刻みを持つ貼り付け隆帯と隆帯に沿う沈線紋。14は胎土に雲母を多く含む厚手の土器で、RL縄紋が施される。15は摘み上げ様の円形貼り付け紋と捺糸紋。16は内面口縁部に2条の平行沈線紋を持つ。17は梯子状の貼り付け隆帯。18は浅い単沈線による同心円紋と三叉紋。19・20はラフな感を持つ沈線紋。21は口縁部内面に稜の高い隆帯が貼付され、外面にも稜の高い隆帯が貼付される。22～25は底部に網代痕を残すものである。32渦巻き紋と円形刺突紋が施された耳栓である。

**時期** いずれも小片のため、時期判別のできるものは少ないが、以下にその手掛かりを残す資料について触れておきたい。1～9はソーメン状紋や半裁竹管紋を主体技法とする一群で、中期初頭に帰属判別させる例が多そうであるが、破片資料である本例は施文技法・文様構成・器形など複合的な観察ができないため、前期末～中期初頭の幅を持たせ、型式判別は控えたい。10・11・12は単沈線による施文が施され、その文様から五領ヶ台式期にあたりと考えられるが、12は時期的に新しい様相を呈する。13は中期前半に多く用いられる文様であるが小片のため、それ以上は不明である。15は加曾利Eの後半に多く観られる様相であり、中期後葉になろう。19・20のラフな太目の沈線紋は晩期の特徴のようでもある。今回調査区の南東にあたる、同遺跡内からはかつて「遮光器土偶」の出土報告がされており、晩期土器片が出土していても不思議ではなからう。以上、前期末～中期初頭・中期初頭・中期前葉・中期後葉・晩期に帰属する遺物が出土している。

## (2) 弥生時代の土器 (第41図、表12)

グリッドより出土した遺物の中で、図化するものを9点と、特徴のある土器片の拓本を3点図示した。明確に弥生土器として判別できたのは、1・2・3・7・10・11である。1・2・3は内外面に丁寧な赤色



第41図 グリッド出土土器実測図

塗彩を施した大形の高坏である。7は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、赤色塗彩の痕跡を残す。10は壺の頸部で、横走櫛描き紋の後縦位に細く鋭い縦位沈線紋が施文されており、遺構内出土遺物に観られない施文であるため敢えて拓影図にて図示した。11は縦位の櫛描き波状紋の後、縦位の太い沈線紋とそれに沿う2本一組の列点紋が施される。

**時期** 全体の器形が把握できない赤色塗彩の高坏からでは、明確な時期判別は差し控えたいが、11の土器片については、栗林期の壺上位に観られる垂下する櫛描き紋と、文様帯区画する沈線紋、それに沿う列点紋の様相に似ており、弥生時代中期も前半に帰属する可能性がある。また、遺構内出土遺物の中にも、横位沈線紋で区画された文様帯を縄文充填する土器片も出土しており、該期の遺構の存在は充分示唆できよう。

### (3) 歴史時代の土器 (第41図、表12)

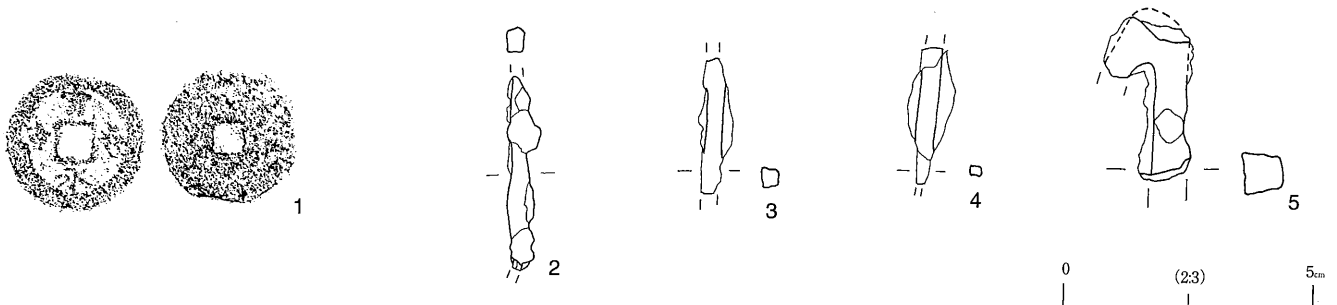
古墳時代以降の土器を「歴史時代」として紹介したい。4・5・6・8・9・12の土器が弥生時代以外の土器にあたる。4は坏部中央と裾部に焼成前穿孔部を持つ器台である。裾部穿孔箇所は、3箇所が推定される。5・6は高坏の脚で、やや丸みを帯びながら立ち上がり、1・2の弥生土器の高坏脚より随分小さい。8・9は甕の底部で帰属時期は不明。もしかしたら弥生土器にあたる可能性もある。12は拓本だけ観ると、早期縄文の押し型紋土器のように見てとれる。実際にもその施文方法は押し型であるが、その器厚は8～9mmと厚く、色調は瓦のような黒色を呈し、焼成もカワラケのようであり、明らかに縄文早期のそれとは様相を異にしている。

**時期** 4は強い屈折を持つ坏身部を持ち、古墳時代前期前半にあたろう。5・6も古墳時代以降に帰属すると考えられる。12は明確な帰属時期は判らないが、歴史時代の産物と考えたい。

### (4) その他の遺物 (第42図・第43図・第44図、表14)

鉄器5点 石器類29点、水晶結晶3点、骨類1点、炭化物1点が出土している。鉄器、石器類には住居址内および土坑内より出土しているものもあるが、遺跡全体の遺物の出土状況より床面直上の出土でない限り、その遺構に帰属する確証に弱いと考える。従って各遺構内出土遺物としてではなく、鉄器・石器類で紹介し遺構への帰属については、その都度触れていきたい。

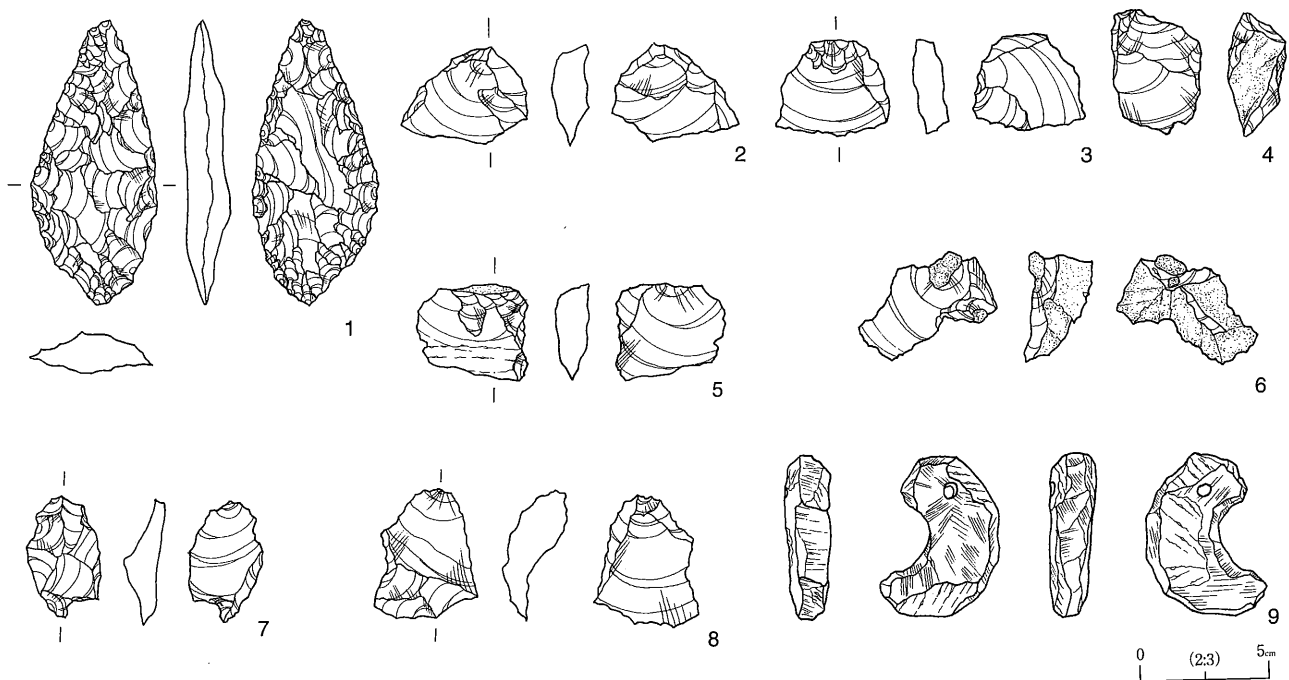
**鉄器** 遺構内ではD3・D4号土坑から多くの鉄器類および古銭が出土しているが、遺構外からは鉄製品と銅製品が出土している。出土場所は、H1号住居址周辺検出面より鉄滓と断面四角の鉄釘。Oい7グリッドからは鉄滓と頂部および断面の丸い鉄釘。D3号土坑周辺検出面からは銅製の古銭。H6号住居址周辺からは銅製の煙管の先が出土している。此処では、現代の所産と考えられる丸釘と煙管、図化し得なかった鉄滓を除く、H1号住居址周辺から出土した鉄釘(42-2・3・4・5)とD3号土坑周辺から出土した銅製の古銭(42-1)を図示した。



第42図 鉄器実測図

1の古銭は「寛永通宝」の銘が読み取れ、背面文様は確認できなかった。D4号土坑出土の古銭とほぼ同時期と考えられ、D3から鉄類が出土していることや、遺構の覆土がD4と極めて近似することを勘案するとD3号土坑とD4号土坑の所産時期がほぼ同じで、D3号周辺出土のこの古銭はD3号土坑に帰属する可能性は高いと考えられる。2～5は全てH1号住居址周辺検出面より出土しているが、H1号住居址はD3・D4号土坑と重複関係にある。D3・D4号土坑が後出することや、以前の開発で生活面および覆土がかなりの掘削を受けていることから、これらの鉄釘もD3・D4号土坑に関係する遺物の可能性は高い。

石器 28点出土した中で、図化し得たものは22点である。43-1は透明度の高い黒耀石製で整った柳葉形を呈し、表裏面に丁寧な側縁からの押捺剥離が施されており、旧石器時代の尖頭器と考えられるものである。今までに込山遺跡群における旧石器遺物の出土は報告されておらず、Oい8グリッドのH8号住居址確認面から出土していることも勘案して、本遺跡遺構の所産時期に製作されたとは考えにくい。43-2～7は黒耀石のフレイクで、43-4・6は皮付きである。43-8はチャートの碎片である。43-9は石製模造品の勾玉でOう6グリッドH1号住居址の遺構確認面より出土している。表裏面扁平に磨かれ、穿孔方向の判別できない径2mmの穿孔部を持つ。恐らく、穿孔後に表裏面の平坦研磨を施したのだろう。44-1・4・8は石斧で、1はOい7グリッドから出土した打製石斧である。裏面と右側面に自然面を残し、表面にと裏面先端に粗い剥離、刃部側縁に細かい剥離が施される。H1号住居址覆土内より出土するが、基部しか残存せず全容が判らないことと、H1号住居址内の遺物が混在して出土していることを勘案し、帰属遺構および時期は不明である。4はD5号土坑から出土した石斧の刃部である。裏面に自然面を残し刃部には表裏面に粗い剥離が施される。8は磨製石斧で蛤刃を呈する。刃部も半分しか残存せず、全容は不明であるが厚みもあり大形の石斧になりそうである。表裏面に敲打痕が確認できる。44-2は自然面を多く残し、裏面は側縁方向からの広い剥離面を残す。石器の素材原石か。44-3・5は石匙で3は半分を欠損するが横型を呈しそうである。刃部は表面よりの粗い剥離で作出される。5は縦型で完形だが、裏面の刃部が薄く剥離欠損している。裏面は主要剥離面のみで表面右上に自然面を残し刃部右側縁は裏面より、左側縁は表面よりの細かい剥離で作出さ



第43図 石器実測図(1)



第44图 石器实测图(2)

れる。44-6・7・9・10・11・12は礫石器である。6は俵型の形状を呈しそうであるが、欠損しており全容は不明。端部表面に浅く削った痕跡が確認できるが、削ったのか使用痕跡なのかは判らない。44-7・9は同質の亜角礫を使用しており、広い面に磨滅痕が確認された。7は磨滅する面の側面に広い範囲で敲打痕が残る。9は断面円形の筒状を呈しそうな形状の端部に敲打痕が円形に確認できる。一側縁に磨滅痕が広く残り、重い石器である。44-11は径22.8cmを測る大きな台石である。扁平な円形を呈し、表面は広く磨滅している。12も大形の重い石器で、断面三角形で細長い形状を呈し、側面は全て磨耗している。端部に若干の敲打痕が確認できる。

**炭化物** H4号住居址覆土内より若干の炭化物が出土している。図化できるほどの大きさはなく、遺存状態からは新しい感を受ける。H4号住居址の覆土および、出土遺物に焼失住居を思わせる要素は確認できないため、H4号住居址に伴わない可能性が高い。また、H4号住居址の確認面において狭い範囲での焼土集中部があるが、この焼土との関係も不明である。

**その他の石類** (写真図版6) H1号住居址覆土内から軽石が出土している。断面三角形で表面円形を呈するが使用痕は確認できなかったため、図化はしていない。また、H1号住居址覆土内と調査区内一括遺物として大き目の水晶の結晶が出土している。これらは字名「水晶」の残る中之条地区より容易に入手可能である。

**骨類** Jこ4グリッドの遺構検出面にて獣骨が1片出土している。

表土直下のプラン確認時に、横たわるような状態で出土しているが、本調査区においては、上層に古い時期の遺物が混在する傾向が窺えるため、この遺物の帰属する遺構は不明である。

骨についての鑑定は県立蓼科高等学校の田中和彦先生に依頼しており、第V章でその結果を報告する。

第2表 掲載石器観察表

( )は残存値を示す。

図版No.	種別	器種・分類	石質	遺存度	法量 (cm)			質量 (g)	注記	備考
					長さ	幅	厚さ			
43-1	石核石器	尖頭器	黒耀石	完存	5.7	2.4	0.75	10.1	SKKDH 8住Oい8G	
43-2	黒耀石	碎片	黒耀石		1.8	2.55	0.75	0.1	SKKDOい7G1・2・4トレ間、黒褐色土	
43-3	黒耀石	碎片	黒耀石		1.95	2.1	0.6	0.1	SKKDP 1GH6	
43-4	黒耀石	碎片	黒耀石		1.8	2.55	1.05	0.1	SKKDH 2住IV区3層	皮付き
43-5	黒耀石	碎片	黒耀石		1.95	2.1	0.2	0.1	SKKDD 3シュウヘン検出面	皮付き
43-6	黒耀石	碎片	黒耀石		2.1	2.7	0.4	0.1	SKKHD 1住XII区	皮付き
43-7	黒耀石	碎片	黒耀石		2.55	1.5	0.6	0.1	SKKD 調査区一括	
43-8	チャート	碎片	チャート		2.55	2.1	1.05	0.1	SKKHD 1住検出面周辺	
43-9	石製模造品	勾玉	凝灰岩	完存	3.15	2.4	0.75	8.7	SKKDO う6G	熱や圧力により変性
44-1	石核石器	打製石斧	頁岩	刃部残	(9.0)	8.4	2.4	215.0	SKKDOい7GNo19	
44-2	原石か	未製品	頁岩		(5.1)	5.4	2.1	92.0	SKKHD 1住XIII区	
44-3	剥片石器	石匙	頁岩	半欠	(3.6)	(3.3)	0.6	8.5	SKKHD 6住II区	
44-4	剥片石器	打製石斧	安山岩	刃部残	(3.6)	4.5	1.5	20.5	SKKDD 5	
44-5	剥片石器	石匙	頁岩	完存	6.6	4.2	0.9	23.7	SKKHD 6住II区	縦長
44-6	礫石器	不明	凝灰岩	半欠	(8.4)	3.3	2.7	51.0	SKKHD 1住XII区	
44-7	礫石器	敲石砂岩	半欠		(6.1)	6.0	4.8	348.0	SKKHD 1住IV区ベルト	
44-8	石核石器	磨製石斧	閃緑岩	刃部残	(6.6)	(4.5)	3.9	136.0	SKKHD 1住5号トレンチ	蛤歯
44-9	礫石器	磨石・敲石	安山岩	半欠	(7.5)	8.4	9.1	820.0	SKKDOい7GNo18	
44-10	礫石器	磨石・凹石	安山岩	完存	9.1	8.7	4.8	506.0	SKKHD 8住Oい7G	
44-11	礫石器	台石	安山岩	完存	22.8	22.8	6.1	3451.0	SKKDOい8G	
44-12	礫石器	磨石・敲石	安山岩	完存	22.2	7.8	4.8	938.0	SKKHD 1住IV区ベルト	3面磨面、端部一面に若干敲痕

表3 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
7-1	H1住	須恵器	凹面硯	1/7 径程度	—	—	—	外) 5Y6/1 灰 内断) 5Y4/2 灰オリーブ	1住 シュウヘン	透かしあり	横走単沈線紋→縦走 単沈線紋、ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
7-2	H1住	須恵器	高台付壺 か	底部 1/4 残	—	(1.3)	<10.4>	外断内) 10Y5/1 灰	1住 シュウヘンケン西		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
7-3	H1住	須恵器	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 5Y5/1 灰	1住 ケン		平行叩き目文	ナデ
7-4	H1住	須恵器	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断) 5Y6/1 灰 内) 5Y5/1 灰	1住 ケン		平行叩き目文	ナデ
7-5	H1住	土師器	器台	端部 1/2 欠	9.7	9.5	13.5	内外) 7.5YR7/3 にふい橙 断) 10YR3/1 黒褐	Oあ 7GNo1 1住 Ⅲ区サブトレ		ヘラミガキ	受け部) ヘラミガキ 脚) 掻き目→ヨコナデ
7-6	H1住	弥生	高坏	連結部 ~脚部 1/2 残	—	(7.3)	<13.2>	外・坏内) 2.5YR5/6 明赤褐 断) 10YR5/6 赤 内) 5YR6/6 橙	1住 XⅠ区、1住 Ⅳ区ベル トヒガシ、8住 Ⅱ区下		ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部) ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部) ハケメ
7-7	H1住	弥生	高坏	脚部 3/4 残	—	(7.6)	<13.6>	外) 10R4/6 赤 内断) 5YR5/6 明赤褐	Oあ 7GNo2 1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン	三角透かし あり	ヘラミガキ、赤色塗彩	ナデ
7-8	H1住	弥生	高坏	連結部	—	(6.5)	—	外・坏内) 10R4/4 赤褐 内断) 5YR6/6 橙	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン		ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部) ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部) カキメ
7-9	H1住	土師器	高坏	連結部 ~脚部 1/2 残	—	(8.7)	—	内外) 2.5YR6/6 橙 断) 10YR7/2 にふい黄橙	1住 4トレヒガシ、8住 O い 7G4、5トレアイダ		脚部) ヘラミガキ 坏部) 摩滅著しく不明	脚部) ヘラケズリ 坏部) 摩滅著しく不明
7-10	H1住	土師器	高坏	脚部 3/4 残	—	(6.7)	—	外断内) 5YR6/6 橙	1住 No1		ヘラミガキ	指頭瓦痕、ヨコナデ
7-11	H1住	弥生	高坏	脚部 1/2 残	—	(9.5)	<15.2>	外断内) 5YR6/6 橙	1住 Ⅲ区サブトレ、8住 O い 7G5.6トレアイダ、8 住 Oい 7G1.4トレアイダ	内面に輪積 痕残す	ヘラミガキ	脚) 指頭瓦痕、ヘラケズリ 裾) ヨコナデ
7-12	H1住	弥生	高坏	脚部 3/4 残	—	(9.9)	—	内外) 7.5YR8/3 浅黄橙 断) 10YR4/1 褐灰	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン		カキメ	脚) ヘラケズリ 裾) ヨコナデ
7-13	H1住	土師器	高坏	脚部 3/4 残	—	(8.0)	—	外断内) 5YR6/6 橙	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン		ヘラミガキ	ヘラケズリ
7-14	H1住	弥生	高坏	坏部 1/3 残	<19.1>	(4.6)	—	内外) 7.5YR5/3 にふい褐、 内) 10YR4/1 褐灰	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン、8住 O い 7G1.2、4トレアイダ		ヘラミガキ→ヨコナデ	ヘラミガキ→ヨコナデ
7-15	H1住	弥生	高坏	口~胴 1/3 残	<17.3>	(4.2)	—	内外) 7.5YR5/3 にふい褐、 断) 5YR5/1 褐灰	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン		ヘラミガキ	ヘラミガキ
7-16	H1住	弥生	高坏	坏部 4/5 残	20.2	(4.3)	—	内外) 7.5YR6/6 橙 断) 10YR5/1 褐灰	1住 4トレヒガシ、Oい 7 GNo8、27、8住 Oい 7G1. 2、4トレアイダ		口縁) ヨコナデ 胴) 摩滅著しく不明	摩滅著しく不明
7-17	H1住	弥生	甕	口~胴 1/4 残	<16.4>	(6.2)	—	内外) 2.5YR6/6 橙 断) 10YR5/1 褐灰	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン		口・胴) 掻き目 頸) ヨコナデ	カキメ
7-18	H1住	弥生	壺	胴部	—	—	—	内外) 10R5/6 赤 断) 2.5YR7/8 橙	1住 4トレヒガシ	No70 同一 個体、パレ ス	ヘラミガキ、赤色塗彩、円形 浮紋列貼付	ヘラミガキ、赤色塗彩
7-19	H1住	弥生	甕	口縁部 1/4 残	<14.8>	(3.0)	—	内外) 10YR7/4 にふい黄橙 断) 10YR4/1 褐灰	1住 Ⅲ区サブトレ、Oい 7 G シュウヘン		ヨコナデ	ヨコナデ
7-20	H1住	弥生	甕	口縁部 1/2 残	<16.7>	(4.1)	—	内外) 2.5Y5/2 暗灰黄 断) 7.5YR2/1 黒	1住 Oい 7G シュウヘン 2、4トレフキン、4住 北		ヨコナデ	ヨコナデ
7-21	H1住	弥生	甕	口~胴 1/4 残	<16.2>	(14.0)	—	内) 5YR6/6 橙 外) 2.5YR7/3 にふい橙 断) 10YR4/1 褐灰	1住 4トレヒガシ、1住 Ⅲ 区、1住 No2、1住 Ⅳ区 ベルト、8住 Oい 7G4、 5トレアイダ・5、6トレ アイダ		3~6 本一組の櫛波状紋 (左→右、上→下)	口縁部) ヨコナデ 頸~胴部) ヘラミガキ
7-22	H1住	弥生	甕	頸~胴 1/3 残	—	(14.7)	—	外) 7.5YR7/4 にふい橙 内断) 2.5Y4/1 黄灰	1住 XⅡ区、Oい 8G、1 住 Oい 7G シュウヘン、8 住 Oい 7G4、5トレアイ ダ、Oい 7GNo27~30フ キン		ハケメ	ヘラナデ



表4 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
7-23	H1住	弥生	甗	胴~底 1/3残	—	(6.2)	4.0	外断内) 5YR6/6橙	1住Oい7GNo8-1 (No8に2個体あり)、1住4トレヒガシ		ヘラケズリ	ヘラナデ
7-24	H1住	弥生	壺	底部 1/2残	—	(5.5)	9.6	内外) 10YR6/2 灰黄褐 断) 10YR5/1 褐灰	1住IV区		ヘラミガキ	ハケメ
7-25	H1住	弥生	壺	胴下位 僅残	—	(7.1)	—	外断内) 5YR6/4にふい橙	1住IV区		ハケメ	摩滅著しく不明
7-26	H1住	弥生	壺	底部 1/4残	—	(4.3)	(8.2)	外断内) 2.5YR6/8橙	1住XⅢ区ベルトヒガシ		摩滅著しく不明	ヘラミガキ
7-27	H1住	弥生	壺	底部 僅残	—	(4.5)	(7.6)	内外) 7.5YR7/6橙 断) 5Y3/1 オリーブ黒	1住7トレ		ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ
7-28	H1住	弥生	壺	底部 完残	—	(2.0)	5.0	外) 7.5YR7/4にふい橙 断) 2.5Y4/1 黄灰 内) 2.5YR2/1 黒	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		カキメ	カキメ
7-29	H1住	弥生	壺	胴部 1/2欠	—	(3.1)	(2.8)	外) 10YR8/2 灰白 内断) 7.5Y2/1 黒	1住Oい7Gシュウヘン、 1住2トレ北		底部) ヘラミガキ 胴部) 摩滅著しく不明	底部) ヘラナデ 胴部) ハケメ
7-30	H1住	弥生	甗 or 壺	底部 完残	—	(1.5)	6.8	内) 7.5YR7/4にふい橙 外) 5YR5/4にふい赤褐 断) 10YR6/1 褐灰	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		ナデ	摩滅著しく不明
7-31	H1住	土師器	甗	底部 1/2残	—	(2.0)	6.8	内外) 7.5YR5/4にふい褐 断) 5YR6/6橙	1住IV区		ヘラナデ	ナデ
7-32	H1住	弥生	甗	底部 1/2残	—	(1.4)	(7.8)	外断内) 10YR6/3にふい黄 橙	1住Ⅶ区		ヘラナデ	指ナデ
7-33	H1住	弥生	壺	底部 1/2残	—	(1.5)	(7.5)	外断) 7.5YR8/3 浅黄橙 内) 7.5YR6/4にふい橙	1住IX区		ハケメ	摩滅著しく調整不明
7-34	H1住	弥生	壺	口縁部 完残	12.5	(6.4)	—	内外) 7.5YR6/4にふい橙 断) 10YR4/1 褐灰	1住Ⅲ区サブトレ		口縁) ヨコナデ 頸部) ヘラミガキ	ハケメ
7-35	H1住	弥生	壺	口~頸 1/4残	<10.8>	(6.7)	—	内外) 7.5YR6/4にふい橙 断) 2.5Y4/1 黄灰	1住IV区ベルト		口縁) ヨコナデ 頸~胴部) ヘラナデ	摩滅著しく不明
7-36	H1住	弥生	小型丸底	口~胴 1/4残	<7.7>	(6.2)	—	外) 7.5YR7/4にふい橙 内断) 5YR2/1 黒	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		ハケメ	ナデ
7-37	H1住	弥生	小型丸底	頸~胴 1/3残	—	(7.2)	—	内外) 5YR6/6橙 断) 5Y3/1 オリーブ黒	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		摩滅著しく調整不明	摩滅著しく調整不明
7-38	H1住	弥生	蓋	ツمام部	—	(2.7)	ツمام径 4.4	外) 10YR4/2 灰黄褐 内断) 7.5YR6/4にふい橙	1住IX区		ハケメツ	マミ部) 指ナデ 蓋部) ヘラナデ
8-1	H1住	弥生	甗	口~頸 僅残	—	—	—	外) 7.5YR7/4にふい橙 内断) 5YR5/4にふい赤褐	1住7トレ		5本一組の櫛描波状紋(上→ 下)	ハケメ
8-2	H1住	弥生	甗	口~頸 僅残	—	—	—	外) 7.5YR6/3にふい褐 内断) 7.5YR7/4にふい橙	1住IX区		7本一組の櫛描波状紋(上→ 下) → 同工具による腹状紋 (二連止め)	ヘラミガキ
8-3	H1住	弥生	甗	口~頸 僅残	—	—	—	外) 7.5YR5/2 褐灰 内断) 7.5YR7/6橙	1住Ⅲ区サブトレ、1住IX 区		6本一組の櫛描波状紋(上→ 下)	ヨコナデ
8-4	H1住	弥生	甗	口~頸 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR7/4にふい橙	1住Ⅶ区		5本一組の櫛描波状紋(上→ 下) → 櫛描横走並行沈線紋	ナデ
8-5	H1住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR5/1 褐灰	1住XⅢ区		LR細紋横回転	ヨコナデ
8-6	H1住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 5YR6/6橙	1住サブトレ		5本一組の櫛描波状紋(上→ 下)	ナデ
8-7	H1住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 5YR6/4にふい橙	1住I区		2層3本一組の櫛描波状紋 (上→下)	ヨコナデ
8-8	H1住	弥生	甗	口~頸 僅残	—	—	—	内) 10YR6/4にふい黄橙 外) 7.5YR5/4にふい橙 断) 10Y7/3にふい黄橙	1住サブトレ		4本一組の櫛描波状紋、櫛描 横走並行沈線紋	ナデ
8-9	H1住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	外) 10YR5/3にふい黄褐 内断) 7.5YR6/4にふい橙	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		7本一組の櫛描波状紋→同工 具による櫛描腹状紋(等間隔 止め) → 同工具による櫛描波 状紋	ヨコナデ
8-10	H1住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR6/6橙 内断) 7.5YR5/1 褐灰	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン、1住O い7GNo22~30フキン		3本一組の粗い櫛描波状紋	ヨコナデ
8-11	H1住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR6/4にふい 橙	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		口唇部刻み目紋	ヨコナデ
8-12	H1住	弥生	壺	頸~胴 1/3残	—	—	—	外断内) 10YR6/3にふい 黄橙	1住9トレ、1住V区		RL細紋→太い単沈線による 横走沈線紋	ナデ

表5 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
8-13	H1住	弥生	壺	頸~胴 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 6/4 にふい橙 外断) 2.5Y 4/1 黄灰	1住V区		櫛描波状紋	ヘラミガキ
8-14	H1住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 6/4 にふい橙 内断) 10YR 6/2 灰黄褐	1住II区		5本一組の横走並行沈線紋、 上→同工具による櫛描波状紋 →細沈線による山形幾何学紋	ハケメ
8-15	H1住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 7/6 にふい 橙	1住XI区		6本一組の横走並行沈線紋、 上→同工具による懸垂紋	ナデ
8-16	H1住	弥生	甕	頸~胴 僅残	—	—	—	断) 5 YR 6/8 橙 内外) 10YR 6/3 にふい黄橙	1住2トレキタ		櫛描波状紋・櫛描簾状紋	ナデ
8-17	H1住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 5 YR 7/6 橙	1住7トレ		櫛描波状紋→8本一組の櫛描 簾状紋(一連止め)	ナデ
8-18	H1住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 5/3 にふい褐 内断) 10YR 4/2 灰黄褐色	1住VII区		細い沈線紋による横走並行沈 線紋→同斜行沈線紋	ナデ
8-19	H1住	弥生	甕	頸~胴 僅残	—	—	—	外断内) 10YR 5/3 にふい黄 褐	1住X区		櫛描波状紋	ヘラミガキ
8-20	H1住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	内) 5 YR 5/8 明赤褐 外断) 7.5YR 6/6 橙	1住7トレ		櫛描波状紋→櫛描簾状紋	ナデ
8-21	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内) 2.5Y 4/1 黄灰 外断) 7.5YR 8/4 浅黄橙	1住VII区		カキメ	ハケメ
8-22	H1住	弥生	甕	頸~胴 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 6/4 にふい橙 外断) 7.5YR 6/1 褐灰	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		櫛描横走並行沈線紋→櫛描波 状紋・縦位彩紋	ヨコナデ
8-23	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内) 5 YR 6/6 橙 外断) 7.5YR 6/4 にふい橙	1住III区		櫛描波状紋	ヨコナデ
8-24	H1住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 7/4 にふい橙 外断) 10YR 7/2 にふい黄橙	1住4トレヒガシ		横走沈線紋→細い斜行沈線紋	ヘラナデ
8-25	H1住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 7/4 にふい 橙	1住III区ベルト南		細い沈線紋による鋸歯紋	ナデ
8-26	H1住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 6/6 橙 外) 7.5YR 4/2 灰褐 断) 7.5YR 5/1 褐灰	1住シュウヘン		横走並行沈線紋→細い単沈線 による鋸歯紋	ハケメ
8-27	H1住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外) 2.5Y 2/1 黒 内断) 2.5Y 5/2 暗灰黄	1住7トレ		太い横走沈線紋	ハケメ
8-28	H1住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	内外) 5 YR 5/8 明赤褐 断) 10YR 7/3 にふい黄橙	1住1区1層		太い単沈線による横走 沈線 紋→細い単沈線による並行刻 み目紋、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
8-29	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 5 Y53/1 黒褐 内断) 10YR 4/3 にふい黄褐	1住V区		櫛描彩彩紋	ナデ
8-30	H1住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 5/4 にふい褐 外) 2.5YR 5/4 にふい赤褐 断) 10YR 6/1 褐灰	1住VI区		横走沈線紋→細い沈線による 鋸歯紋	ハケメ
8-31	H1住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 4/1 褐灰 外) 2.5YR 5/6 明赤褐 断) 7.5YR 7/4 にふい橙	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		重山形紋、赤色塗彩	ナデ
8-32	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 7/4 にふい橙 外) 10YR 4/2 灰黄褐 断) 7.5YR 6/1 褐灰	1住III区		カキメ	ナデ
8-33	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 6/6 橙 外) 10YR 6/3 にふい黄橙 断) 10YR 5/2 灰黄褐	1住XIII区		櫛描彩彩紋	ヨコナデ
8-34	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内) 7.5YR 5/3 にふい褐 外) 10YR 6/3 にふい黄橙 断) 10YR 5/2 灰黄橙	1住Oい7Gシュウヘン 2, 4トレフキン		櫛描格子目紋	ヘラナデ
8-35	H1住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 6/6 橙 内断) 2.5YR 4/2 灰褐	1住VII区ベルト		5本一組の櫛描垂下紋	ハケメ
11-1	H2住	須恵器	环蓋	蓋部ツ マミ残	—	—	—	外断内) 5 YR 5/3 にふい 赤褐	2住IV区3層		ロクロヨコナデ ツマミ貼り付け	ロクロヨコナデ
11-2	H2住	須恵器	突帯付 四耳甕か	胴部 僅残	—	—	—	内) 10Y 4/1 灰 外) N 2/0 黒 断) 7.5YR 4/2 灰褐	2住II区サブトレ	平安以降	ロクロヨコナデ、突帯あり、 自然袖付着	ロクロヨコナデ
11-3	H2住	須恵器	环蓋	口~蓋 1/4 残	(14.6)	(1.6)	—	外断内) 5 Y 6/1 灰	2住IV区3層、1 区2層		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
11-4	H2住	須恵器	环蓋	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 5 Y 5/1 灰	2住III区1層		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ

表6 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種類	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
11-5	H 2 住	須恵器	突帯付四耳壺	胴部僅残	—	—	—	内) 7.5Y 3/1 オリーブ黒 外) 7.5Y 5/1 灰 断) 7.5YR 4/3 褐	2 住 I 区 2 層	平安以降	平行叩き目文、突帯あり	ロクロヨコナデ
11-6	H 2 住	須恵器	坏	口~体 1/4 残	<13.5>	3.6	<5.7>	内) 2.5Y 4/2 暗灰黄 外断) 5 Y 5/1 灰	2 住カマド床		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-7	H 2 住	須恵器	坏	体部 2/3 欠	—	(2.4)	5.6	内) 7.5YR 7/4 にふい褐 外断) 5 Y 6/8 灰オリーブ	2 住 I 区 3 層	内面は重ね焼き時の酸素不足の為にふい褐色を呈す	ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-8	H 2 住	須恵器	坏	底部完存	—	(1.7)	5.6	外断内) 5 Y 5/1 灰	2 住 IV 区 サブトレ		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-9	H 2 住	須恵器	坏	体~底 1/4 残	—	(2.1)	<7.1>	外断内) 5 Y 5/1 灰	2 住 IV 区 3 層		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-10	H 2 住	須恵器	坏	底部 1/2 残	—	(1.4)	<7.6>	外断内) 5 Y 6/2 灰オリーブ	2 住 IV 区 3 層		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-11	H 2 住	須恵器	坏	底部完存	—	(2.1)	6.6	外断内) 5 Y 6/1 灰	2 住 III 区 1 層、III 区 2 層		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-12	H 2 住	須恵器	坏	底部完存	—	(1.7)	5.2	外断内) 5 Y 6/1 灰	2 住 IV 区 3 層		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-13	H 2 住	須恵器	坏	底部 2/3 残	—	(0.9)	—	外断内) 5 Y 5/1 灰	2 住 III 区 1 層	火罨あり	ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-14	H 2 住	須恵器	坏	口~体 1/4 残	<14.6>	3.9	<6.3>	外断内) 7.5Y 6/1 灰	2 住 No 1	カマド、正位	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
11-15	H 2 住	須恵器	坏	口~体 1/7 残	<13.2>	(3.9)	<6.4>	外) 10YR 5/2 灰黄褐 内断) 5 Y 6/2 灰オリーブ	2 住 II 区 サブトレ		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
11-16	H 2 住	須恵器	高台付坏	底部 1/4 残	—	(1.3)	<8.0>	内外) N 5/0 灰 断) 2.5Y 5/1 黄灰	2 住 III 区 1 層		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-17	H 2 住	須恵器	高台付坏	底部 1/5 残	—	(1.8)	<10.0>	外) 10Y 6/1 灰 内断) 7.5YR 5/3 にふい褐	2 住 I 区 2 層		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ
11-18	H 2 住	須恵器	甕	胴部僅残	—	—	—	内外) 2.5YR 5/2 暗灰黄 断) 10YR 4/2 灰黄褐	2 住カマド		平行叩き目文	ロクロヨコナデ
11-19	H 2 住	須恵器	甕	胴~底僅残	—	—	—	外断内) 5 Y 5/1 灰	H 2 住 I 区 1 層		平行叩き目文痕	ロクロヨコナデ
11-20	H 2 住	須恵器	甕	胴部僅残	—	—	—	内外) N 3/0 暗灰断) 2.5Y 4/2 暗灰黄	2 住 IV 区 3 層		平行叩き目文	ロクロヨコナデ
11-21	H 2 住	須恵器	甕	胴部僅残	—	—	—	外断内) 5 Y 2/1 灰	2 住 IV 区 2 層		平行叩き目文	ロクロヨコナデ
11-22	H 2 住	須恵器	甕	胴部僅残	—	—	—	内) 10Y 4/0 灰 外) 7.5Y 2/1 黒 断) 2.5YR 5/2 暗灰黄	2 住 III 区 1 層、IV 区 3 層、IV 区 2 層		平行叩き目文	ナデ
11-23	H 2 住	須恵器	甕	胴部僅残	—	—	—	外断内) 10Y 5/1 灰	2 住 IV 区 3 層		平行叩き目文	ロクロヨコナデ
11-24	H 2 住	須恵器	甕	胴部	—	—	—	外断内) 5 Y 4/1 灰	H 2 住 IV 区 2 層		平行叩き目文痕	ロクロヨコナデ
11-25	H 2 住	須恵器	甕	口縁部僅残	—	—	—	外) 7.5GY 5/1 緑灰 内断) 7.5Y 5/1 灰	H 2 住 II 区 2 層		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
11-26	H 2 住	土師器	坏	底部 1/4 残	—	(0.8)	<8.2>	内) 2.5Y 2/1 黒 外) 2.5YR 7/6 橙 断) 2.5Y 4/1 黄灰	2 住 IV 区 3 層	酸化焙焼成ロクロ成形土師器	摩滅著しく不明 底部) 回転糸切り難し	黒色処理
11-27	H 2 住	土師器	坏	底部 1/5 残	—	—	—	内) 2.5Y 2/1 黒 外) 10YR 4/2 灰黄褐 断) 10YR 7/6 明黄褐	2 住 II 区 2 層	酸化焙焼成ロクロ成形土師器	ロクロヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理
11-28	H 2 住	土師器	高台付坏	高台部 1/2 残	—	(1.7)	<7.2>	内) 2.5Y 2/1 黒 外断) 7.5YR 7/6 橙	2 住 II 区 サブトレ	酸化焙焼成ロクロ成形土師器	ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	黒色処理
11-29	H 2 住	土師器	高台付坏	高台部残	—	(2.4)	7.0	内) 2.5Y 2/1 黒 外断) 2.5YR 5/6 明赤褐	2 住ケン		ヨコナデ	坏) ヘラミガキ、黒色処理 脚) 持ちヘラナデ
11-30	H 2 住	土師器	甕	口縁部僅残	<14.3>	(4.7)	—	外断内) 5 YR 5/4 にふい赤褐	H 2 住カマド、カマド掘り方		口縁) ヨコナデ 頸~胴) ヘラケズリ	ヨコナデ
11-31	H 2 住	土師器	甕	口縁部 1/3 残	<21.6>	(6.5)	—	外断内) 5 YR 5/4 にふい赤褐	H 2 住 No 2、IV 区 3 層、同一個体あり	カマド潰れた状態。形にならない別個体 No あり	口縁) ヨコナデ 頸部) ユビナデ 胴部) ヘラケズリ	口~頸部) ヨコナデ 胴部) ヘラナデ
11-32	H 2 住	土師器	甕	口縁部 1/4 残	<20.4>	(5.2)	—	外断内) 5 YR 6/6 橙	H 2 住カマド、カマド掘り方		ヨコナデ	ヨコナデ
11-33	H 2 住	土師器	壺	口~胴 1/5 残	<19.6>	(5.5)	—	外断内) 5 YR 5/6 明赤褐	2 住 I 区 3 層	整理 No 37 と同一個体	ヨコナデ	ヨコナデ

表7 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
11-34	H 2 住	弥生	高環	体底部 1/2 残	—	(6.6)	<6.6>	外断内) 10YR 5/2 灰黄褐	2 住 I 区 2 層		ヘラミガキ	環) ヘラミガキ 脚) ナデ
11-35	H 2 住	弥生	高環	環部 1/4 残	—	(3.8)	—	内) 7.5YR 7/6 橙 外) 7.5YR 8/4 浅黄橙 断) 10YR 2/1 黒	H 2 住 III 区 1 層		ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ
11-36	H 2 住	弥生	高環	連結部 1/2 残	—	(3.5)	—	内外) 7.5YR 6/4 にふい橙 断) 7.5YR 6/3 にふい橙	H 2 住 II 区 3 層		ヘラミガキ	ヘラミガキ
11-37	H 2 住	弥生	壺	口縁部 1/4 残	<14.8>	(5.5)	—	内外) 7.5YR 6/4 にふい橙 断) 7.5YR 2/1 黒	H 2 住 II 区 2 層		ハケメ→ナデ→LR 細紋横回 転→単沈線による横位並行沈 線紋	ナデ
11-38	H 2 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	内) 2.5YR 4/6 赤褐 外) 7.5YR 6/6 橙 断) 10YR 6/1 褐灰	H 2 住 IV 区 3 層		ヘラミガキ 口縁端部) 赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
11-39	H 2 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	内外) 10R 4/4 赤 断) 10YR 6/4 にふい黄橙	H 2 住 I 区 2 層		ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
11-40	H 2 住	弥生	高環	環部 僅残	—	(4.4)	—	内外) 7.5YR 6/4 にふい橙 断) 7.5YR 2/1 黒	H 2 住 III 区 2 層		ハケメ→ヘラミガキ	ヘラミガキ
11-41	H 2 住	弥生	ミニチュア 壺	胴部 僅残	—	(5.1)	—	外断内) 5 YR 5/6 明赤褐	2 住 II 区 2 層	整理 No 68 と同一個体	ヨコナデ	ナデ
11-42	H 2 住	弥生	甕	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 5 YR 5/4 にふい 赤褐	H 2 住 IV 区 3 層		7 本一組の櫛描波状紋 (上→ 下) →櫛描縹状紋	ヨコナデ
11-43	H 2 住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外) 2.5YR 6/8 橙 内断) 5 YR 6/6 橙	2 住 II 区 サブトレ		ヘラミガキ、櫛描横走沈線 紋・赤色塗彩	ヘラミガキ
12-1	H 2 住	弥生	壺	頸部 1/3 残	—	—	—	内外) 10YR 5/3 にふい黄橙 断) 5 YR 6/6 橙	H 2 住 IV 区 サブトレ	整理 No 65 と接合	5 本一組の横走櫛描縹波状紋	
12-2	H 2 住	弥生	甕	頸~胴 僅残	—	—	—	内外) 5 YR 4/2 灰褐 断) 5 YR 6/4 にふい橙	2 住 I 区 2 層		3 本一組の櫛描彩杉文	ナデ
12-3	H 2 住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	内) 10YR 5/3 にふい黄橙 外断) 7.5YR 7/6 橙	H 2 住 III 区 1 層		櫛描波状紋	ナデ
12-4	H 2 住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 2 住 III 区 1 層、H 2 住ケ ン		3 本一組の櫛描波状紋 (上→ 下)	ナデ
12-5	H 2 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 4/1 褐灰 内断) 7.5Y 5/4 にふい褐	2 住 II 区 サブトレ		4 本一組の櫛描波状紋、櫛描 縹杉紋	ハケメ
12-6	H 2 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内外) 5 YR 6/6 橙 断) 5 YR 5/1 褐灰	2 住 I 区 2 層		4 本一組の櫛描波状紋、櫛描 縹杉紋	ハケメ
12-7	H 2 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 5 YR 6/4 にふい橙	H 2 住 III 区 1 層		3 本一組の櫛描波状紋	ヨコナデ
12-8	H 2 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 10YR 6/4 にふい黄橙 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 2 住 IV 区 3 層		3 本一組の櫛描波状紋	ナデ
12-9	H 2 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 4/2 灰褐 内断) 10YR 7/4 にふい黄橙	H 2 住ケン		3 本一組の雑な櫛描波状紋	ヨコナデ
12-10	H 2 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	内外) 7.5YR 6/4 にふい褐 断) 5 YR 5/1 褐灰	H 2 住 IV 区 3 層		5 本一組の櫛描縹杉文	ハケメ
12-11	H 2 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外) 10YR 5/2 灰黄褐 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 2 住 III 区 1 層		細かい LR 細紋→単沈線によ る縹杉紋	ナデ
12-12	H 2 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 6/4 にふい橙 内断) 7.5YR 5/1 褐灰	2 住 I 区 2 層		6 本一組の櫛描縹杉紋	ハケメ
12-13	H 2 住	弥生	ミニチュア 壺	底部 僅残	—	(1.0)	2.0	内外) 5 YR 6/6 橙 断) 5 YR 5/3 にふい赤褐	H 2 住 II 区 3 層		ナデ	指ナデ
12-14	H 2 住	弥生	壺	胴部 1/4 残	—	—	—	内外) 10R 4/4 赤 断) 7.5YR 7/4 にふい橙	2 住 I 区 2 層	焼成前穿孔	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
12-15	H 2 住	弥生	蓋	1/5 残	—	—	—	内) 5 YR 6/6 橙 外断) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 2 住 IV 区 サブトレ		ヘラミガキ	ヘラミガキ
12-16	H 2 住	弥生	甕	底部 1/3 残	—	(1.7)	<7.0>	外) 2.5YR 4/3 褐 内断) 5 YR 5/6 明赤褐	H 2 住 II 区 3 層		ヘラナデ	指ナデ
12-17	H 2 住	弥生	壺	底部 1/3 残	—	(1.5)	<7.4>	内) 10YR 6/4 にふい黄褐 断) 7.5YR 5/1 褐灰 外) 2.5YR 5/6 明赤褐	H 2 住 I 区 1 層		ヘラミガキ、赤色塗彩	指ナデ
12-18	H 2 住	弥生	壺	底部 僅残	—	(1.5)	<6.8>	外断) 10YR 7/3 にふい黄橙 内) 10YR 4/1 褐灰	H 2 住 II 区 2 層		摩滅著しく不明	摩滅著しく不明

表 8 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
12-19	H 2 住	弥生	壺	底部完存	—	(2.6)	7.0	外) 2.5YR 4/4 にふい赤褐 内断) 5 Y 6/1 灰	H 2 住 II 区サブトレ		ヘラミガキ、赤色塗彩	胴) ハケメ 底部) 指ナデ
12-20	H 2 住	弥生	甗	底部完存	—	(2.7)	6.3	外) 5 YR 5/6 明赤褐 内断) 10YR 5/3 にふい黄褐	H 2 住 II 区 2 層	焼成前穿孔	ヘラミガキ	ヘラミガキ
14-1	H 3 住	須恵器	环蓋	口縁部 3/4 残	16.6	3.4	ツマミ径 3.6	内外) 5 Y 4/1 灰 断) 5 YR 5/4 にふい黄褐	3 住、5 住、J け 3 G		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
14-2	H 3 住	弥生	高环	脚端部 僅残	—	(1.4)	—	内外) 10YR 7/4 にふい黄褐 断) 7.5YR 5/1 褐	3 住		摩滅著しく不明	ナデ
14-3	H 3 住	弥生	高环	脚部完存	—	(7.9)	—	内) 7.5YR 5/4 にふい褐 断) 7.5YR 6/4 にふい橙 外) 10R 5/6 赤	3 住		ヘラミガキ・赤色塗彩	摩滅著しく不明
14-4	H 3 住	弥生	甗	底部 1/3 残	—	(3.4)	<6.3>	外) 7.5YR 5/3 にふい橙 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	3 住シュウヘン		ハケメ	ナデ
14-5	H 3 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 4/1 褐灰 内断) 7.5YR 5/3 にふい橙	3 住		4 本一組の櫛描波状紋	ヘラミガキ
14-6	H 3 住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	3 住		太い横位端沈線紋	ナデ
14-7	H 3 住	弥生	甗	頸部 僅残	—	—	—	内外) 10YR 6/4 にふい黄橙 断) 7.5YR 7/4 にふい橙	3 住		7 本一組の櫛描波状紋 (上→下) →櫛描簾状紋	ヘラミガキ
16-1	H 4 住	須恵器	壺	口縁部 1/3 残	<12.8>	(5.3)	—	内) 10Y 5/1 灰 外断) 10YR 5/1 褐灰	4 住 P 1	整理 No 7 と同一個体	ロクロヨコナデ 自然釉付着	ロクロヨコナデ 自然釉付着
16-2	H 4 住	須恵器	高台付环	口~体 1/2 底部完存	<13.9>	13.4	10.6	内外) 10YR 5/1 褐灰 断) 5 YR 4/3 にふい赤褐	4 住ミナミ、キタ		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
16-3	H 4 住	須恵器	甗	胴下部 1/3 残	—	(12.2)	—	外) 7.5Y 2/1 黒 内断) 10YR 6/1 褐灰	4 住東ヘキトレ		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
16-4	H 4 住	須恵器	甗	胴部 僅残	—	—	—	内) 5 Y 6/1 灰 外断) 7.5YR 7/1 灰白	4 住?		平行叩き目文	ヨコナデ
16-5	H 4 住	弥生	高环	脚連結部	—	(3.6)	—	外断内) 5 YR 6/6 橙	4 住ミナミ	ソケット式連結	ヘラミガキ	坏) ヘラミガキ 脚) ヘラケズリ
16-6	H 4 住	弥生	高环	脚連結部	—	(2.2)	—	外) 10R 4/8 赤 内断) 2.5YR 6/6 明赤褐	4 住北		ヘラミガキ、赤色塗彩	坏) ヘラミガキ 脚) ヘラナデ
16-7	H 4 住	須恵器	坏	体部 僅残	—	—	—	外断) 7.5YR 7/1 灰白 内) 5 YR 6/1 灰	4 住?		ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ
16-8	H 4 住	弥生	高环	脚連結部	—	(1.8)	<11.9>	外) 10YR 4/1 褐灰 内断) 7.5YR 6/6 橙	4 住北		ヘラミガキ	ナデ
16-9	H 4 住	弥生	壺	底部 1/2 残	—	(3.3)	<5.0>	外) 10YR 6/6 赤 内断) 5 YR 5/6 橙	4 住ミナミ		ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ
16-10	H 4 住	弥生	壺	底部 2/3 残	—	(1.6)	<7.2>	外断内) 5 YR 5/4 にふい赤褐	4 住ミナミ		ハケメ	ナデ
16-11	H 4 住	弥生	壺	底部 1/3 残	—	(1.9)	<8.5>	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	4 住ミナミ		ヘラミガキ	ナデ
16-12	H 4 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 10YR 5/2 灰黄褐	4 住北		LR 細紋→単沈線による横位並行沈線紋	ヨコナデ
16-13	H 4 住	弥生	甗	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 5 YR 6/6 橙	4 住?		5 本一組の櫛描波状紋	ヨコナデ
16-14	H 4 住	弥生	甗	口縁部 僅残	—	—	—	内外) 7.5YR 7/4 にふい橙 断) 7.5YR 5/1 褐灰	4 住東ヘキトレ		3 本一組の櫛描波状紋 (右回り、上→下)	ヘラナデ
16-15	H 4 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 2.5Y 5/2 暗灰黄	4 住		単沈線による山形紋	ヨコナデ
16-16	H 4 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	内外) 7.5YR 5/4 にふい褐 断) 10YR 4/2 灰黄褐	4 住ミナミ		LR 細紋→単沈線による重連弧紋	ヨコナデ
16-17	H 4 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外) 10YR 4/2 灰黄褐 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	4 住		3 本一組の櫛描重連弧紋	ヨコナデ
16-18	H 4 住	弥生	甗	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 5/4 にふい褐 内断) 7.5YR 6/6 橙	4 住北ケン		7 本一組の櫛描波状紋 (上→下)	ヘラナデ
16-19	H 4 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 5/2 灰褐 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	4 住 P 2		LR 細紋→単沈線による山形紋・横位沈線紋	ヨコナデ
16-20	H 4 住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外) 10R 5/6 赤 内断) 7.5YR 5/4 にふい褐	4 住北		単沈線による横位並行沈線紋	ヘラナデ

表9 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
16-21	H 4 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 2.5YR 5/6 明赤褐	4 住北		4 本一組の櫛描波状紋	ヨコナデ
16-22	H 4 住	土師器	甕	頸~胴 1/3 残	—	(8.5)	—	外) 7.5YR 2/1 黒 内断) 5 YR 4/6 赤褐	4 住ミナミ		口~頸) ヨコナデ 頸~胴) ナデ	口~頸) ヨコナデ 頸~胴) 指ナデ
17-1	H 5 住	弥生	高坏	連結 部残	—	(3.0)	—	外断) 7.5YR 5/4 にふい褐 内) 7.5YR 62/1 黒	5 住?		ヘラナデ	坏部) ヘラミガキ、黒色処理 脚部) ヘラナデ
19-1	H 6・7 住	弥生	高坏	脚部 1/3 残	—	(6.3)	(13.4)	外) 10R 4/4 赤褐 内断) 7.5YR 7/6 橙	H 6 住II区 2 層		ヘラミガキ、赤色塗彩	脚上位) ハケメ 裾部) ヘラナデ
19-2	H 6・7 住	弥生	高坏	脚裾部 僅残	—	(2.5)	(13.6)	外) 10R 4/6 赤 内断) 5 YR 6/6 橙	H 6 住IV区 2 層		ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラナデ
19-3	H 6・7 住	弥生	高坏	連結部残	—	(3.8)	—	外、坏内) 10R 4/4 赤褐 断、脚内) 5 YR 6/6 橙	H 6 住II区 2 層		ヘラミガキ、赤色塗彩	坏部) ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部) 腹ナデ
19-4	H 6・7 住	弥生	甕	口~頸 1/3 残	<17.8>	(7.0)	—	外断内) 2.5YR 6/8 橙	H 2 住II区サブトレ、II区 3 層、III区 3 層、H 7 住P 1		口縁部) ヨコナデ 頸部) 8 本一組の櫛描連弧紋 →同工具による櫛描連弧紋 3 連止め	ヨコナデ
19-5	H 6・7 住	弥生	甕	口~頸 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/4 にふい褐	H 6 住II区 2 層		5 本一組の櫛描波状紋 (下→ 上)、同工具による櫛描連弧 紋 3 連止め	ヘラナデ
19-6	H 6・7 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	外) 10YR 5/2 灰黄褐 内断) 10YR 5/3 にふい黄褐	H 6 住I区 2 層		LR 細紋→太い単沈線による 山形紋	ヨコナデ
19-7	H 6・7 住	弥生	壺	口縁部	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/6 橙	H 6 住III区 2 層		LR 細紋→太い単沈線による 山形紋	ヘラミガキ
19-8	H 6・7 住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外断) 7.5YR 6/4 にふい橙 内) 10YR 4/1 褐灰	H 6 住II区サブトレ		LR 細紋→太い単沈線による 横走並行沈線紋、山形紋	ナデ
19-9	H 6・7 住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/6 明褐	H 6 住II区 2 層		無節 L 細紋→太い単沈線に よる横位並行沈線紋	ナデ
19-10	H 6・7 住	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 6 住II区 1 層		太い単沈線による横位並行沈 線紋	ナデ
19-11	H 6・7 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/6 橙	H 6 住III区 2 層		櫛描斜行沈線紋	ヨコナデ
19-12	H 6・7 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 2.5Y 4/2 暗灰黄	H 6 住I区 2 層		細い単沈線による縦位綾杉紋	ヨコナデ
19-13	H 6・7 住	弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外断) 10YR 5/2 灰黄褐 内) 10YR 6/4 にふい黄褐	H 6 住III区 2 層		4 本一組の櫛描格子目紋	ハケメ
19-14	H 6・7 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/2 灰褐	H 6 住III区 2 層		5 本一組の櫛描垂下紋	ヨコナデ
19-15	H 6・7 住	弥生	甕	口縁部	—	—	—	外) 7.5YR 4/2 灰褐 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 6 住II区 2 層		櫛描横走並行沈線紋	ヨコナデ
19-16	H 6・7 住	弥生	甕	口~頸 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 7 住ヒガシ		6 本一組の櫛描波状紋 (上→ 下、左→右)	ナデ
19-17	H 6・7 住	弥生	壺	胴部僅残	—	—	—	外) 7.5YR 5/2 灰褐 内断) 10YR 6/4 にふい黄橙	H 1 住IV区、H 7 住東		ヘラミガキ	ハケメ
19-18	H 6・7 住	弥生	甕	頸~胴 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 7 住ヒガシ		3 本一組の櫛描波状紋 (上→ 下)	ナデ
19-19	H 6・7 住	弥生	甕	頸~胴 僅残	—	—	—	外断) 7.5YR 6/6 橙 内) 7.5YR 4/1 褐灰	H 6 住シュウヘン		6 本一組の櫛描藤状文、波状 紋下→上に施文	ナデ
19-20	H 6・7 住	弥生	甕	口縁部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 5/4 にふい橙 内断) 10YR 5/3 にふい黄褐	H 6 住II区 2 層		5 本一組の櫛描横走並行沈線 紋 (上→下)	ヨコナデ
19-21	H 6・7 住	弥生	甕	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/4 にふい橙	H 7 住ヒガシ		5 本一組の櫛描波状紋 (上→ 下)	ヨコナデ
19-22	H 6・7 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 10YR 5/2 灰黄褐	H 6 住II区		櫛描波状紋	ナデ
19-23	H 6・7 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 5 Y 5/6 明赤褐 内断) 2.5YR 4/1 黄灰	H 6 住II区 2 層		櫛描横走並行沈線紋→細い単 沈線による斜行沈線紋	ヨコナデ
19-24	H 6・7 住	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/4 にふい褐	H 6 住II区 2 層		4 本一組の櫛描波状紋	ヘラナデ
19-25	H 6・7 住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外) 2.5Y 4/1 黄灰 内断) 10YR 6/4 にふい黄橙	H 7 住東		櫛描藤状紋、櫛描波状紋	ヨコナデ
19-26	H 6・7 住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外断) 7.5YR 6/4 にふい橙 内) 7.5YR 7/4 にふい橙	H 6 住III区 2 層		櫛描藤状紋→櫛描波状紋	ナデ
19-27	H 6・7 住	弥生	壺	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 5 YR 6/6 橙	H 6 住シュウヘン		LR 細紋 (端部閉束) 横回転	ヨコナデ



表10 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
19-28	H 6・7 住	弥生	甕	底部 1/3 残	—	(1.7)	(9.5)	外) 10YR 6/4 にふい黄橙 内断) 10YR 4/1 褐灰	H 6 住IV区サブトレ		摩滅著しく不明	摩滅著しく不明
19-29	H 6・7 住	弥生	壺	底部 完存	—	(2.1)	3.8	内外) 10R 4/4 赤褐 断) 5 YR 8/4 淡橙	H 6 住II区2層		ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、ヘラミガキ、赤色塗彩
19-30	H 6・7 住	土師器	壺	頸~胴 上位	—	(3.6)	—	外断) 7.5YR 6/4 にふい橙 内) 10YR 3/1 黒褐	H 6 住シュウヘン		ヘラミガキ	ナデ
19-31	H 6・7 住	土師器	高坏	口縁部 1/4 欠	16.1	11.2	10.6	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	H 6 住No 2、II区2層	歪みあり	ヘラミガキ	坏部) ヘラミガキ 脚部) ハケメ
19-32	H 6・7 住	土師器	高坏 or 器台	連結部 ~脚部	—	(8.4)	(14.1)	外断内) 7.5YR 8/4 浅黄橙	H 6 住No 1	焼成前円形 穿孔 (推定 3 箇所)	ヘラミガキ	坏部) ヘラミガキ 脚部) ヘラミガキ
21-1	H 8 住	弥生	甕	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/3 にふい橙	8 住Oい 7 G.1.4 トレアイダ		RL 細紋→太い単沈線による 山形紋、口唇部 RL 細紋	ナデ
21-2	H 8 住	弥生	甕	口~頸 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/3 にふい褐	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		RL 細紋→太い単沈線による 山形紋、櫛横走並行沈線紋	ナデ
21-3	H 8 住	弥生	甕	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/4 にふい褐	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		5 本一組の櫛横波状紋	ナデ
21-4	H 8 住	弥生	甕	口縁部 僅残	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/6 橙	8 住Oい 7 G.2.3 トレアイダ		7 本一組の櫛横走並行沈線 紋	ナデ
21-5	H 8 住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 10YR 6/3 にふい 黄橙	8 住Oい 7 G.1.4 トレアイダ		櫛横走並行沈線紋	ナデ
21-6	H 8 住	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 7/6 橙 内断) 5 YR 6/6 橙	8 住Oい 7 G.1.4 トレアイダ		櫛横 T 字紋	ヨコナデ
21-7	H 8 住	弥生	壺	口縁部	—	—	—	外断内) 5 YR 6/6 橙	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		捺状浮文貼付	ナデ
21-8	H 8 住	土師器 or 弥生	甕	底部 1/3 残	—	(2.5)	(8.8)	外断内) 5 YR 6/6 橙	8 住Oい 7 G.1.4 トレアイダ		摩滅著しく不明	ハケメ
21-9	H 8 住	土師器 or 弥生	壺	胴部 僅残	—	—	—	外断内) 10YR 4/2 灰黄褐	H 8 住X I 区		ハケメ→単沈線による横走並 行沈線紋	ハケメ
21-10	H 8 住	土師器 or 弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外) 7.5YR 5/5 にふい褐 内断) 10YR 4/2 灰黄褐	8 住Oい 7 G.1.2.4 トレアイ ダ		カキメカ	ヨコナデ
21-11	H 8 住	土師器	甕	口縁部 僅残	16.8	(3.8)	—	外断内) 7.5YR 6/4 にふい橙	8 住Oい 7 G.1.4 トレアイ ダ、1 住 4 トレヒガシ		ヨコナデ	ヨコナデ
21-12	H 8 住	弥生	壺	頸~胴 僅残	—	—	—	内外) 7.5Y 6/4 にふい橙 断) 7.5YR 5/1 褐灰	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		櫛横走並行沈線紋	ナデ
21-13	H 8 住	土師器 or 弥生	甕	底部	—	(4.3)	6.0	内外) 5 YR 7/6 橙 断) 10YR 5/1 褐灰	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		ヘラミガキ	ヘラナデ
21-14	H 8 住	弥生	小型 丸底甕	胴~底 1/3 残	—	(5.5)	2.5	外) 10YR 7/3 にふい黄橙 内断) 10YR 5/2 灰黄橙	8 住Oい 7 G.4.5 トレアイ ダ、8 住Oい 7 G.1.2.4 トレ アイダ		頸部) ヨコナデ 胴部) ヘラミガキ 底部) ヘラケズリ	頸部) ハケメ 胴~底部) ナデ
21-15	H 8 住	弥生	小型壺	頸~底 2/3 残	—	(6.0)	4.0	外) 7.5YR 8/4 浅黄橙 内断) 2.5YR 4/1 黄灰	Oい 7 G.No 2、8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		ヨコナデ	頸部) ハケメ 胴~底部) ナデ
21-16	H 8 住	弥生	小型 丸底甕	胴部 1/5 僅残	—	(4.1)	—	外) 5 YR 6/6 橙 内断) 2.5Y 5/1 黄灰	Oい 7 G.No 13、8 住Oい 7 G.4.5 トレアイダ	輪横み痕あ り	ナデ	ナデ
21-17	H 8 住	土師器	高坏	脚~端 2/3 残	—	(7.5)	(11.3)	内外) 7.5YR 7/4 にふい橙 断) 10YR 6/1 褐灰	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイ ダ、4.5 トレアイダ		胴部) ヘラミガキ 裾部) ヨコナデ	接合部) ナデ 脚部) ヘラケズリ 裾部) ナデ
21-18	H 8 住	土師器	高坏	脚部 1/2 残	—	(7.1)	—	内外) 10YR 6/3 にふい黄橙 断) 5 Y 4/1 灰	8 住Oい 7 G.4.5 トレアイダ		ヘラナデ	指ナデ、ヨコナデ
21-19	H 8 住	弥生	高坏	連結部 ~脚部	—	(8.5)	—	外断内) 7.5YR 7/4 にふい橙	8 住Oい 7 G.2.4 トレアイ ダ		ヘラミガキ	ヘラケズリ
21-20	H 8 住	土師器	高坏	脚部 1/2 残	—	(6.1)	—	内外) 2.5YR 7/6 橙 断) 10YR 4/1 褐灰	Oあ 7 G.No 4、8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ		摩滅著しく不明	ヘラケズリ
21-21	H 8 住	土師器	高坏	脚部 1/4 残	—	(6.0)	—	内外) 10R 7/4 にふい黄橙 断) 10YR 4/1 褐灰	8 住Oい 7 G.5.6 トレアイダ	輪横み痕あ り	ヘラナデ	ナデ
21-22	H 8 住	土師器	高坏	脚部	—	(6.9)	—	外断内) 10YR 7/3 にふい黄 橙	8 住Oい 7 G.シュウヘン		摩滅著しく不明	ヘラケズリ 裾部) ナデ
21-23	H 8 住	土師器	高坏	連結部	—	(3.2)	—	内外) 10YR 6/3 にふい黄橙 断) 5 YR 7/6 橙	8 住Oい 7 G.4.5 トレアイ ダ、8 住Oい 7 G.5.6 トレ アイダ	歪みあり	摩滅著しく不明	坏部) 摩滅著しく不明 脚部) ヘラナデ
21-24	H 8 住	弥生	甕	胴~底 僅残	—	—	—	外断内) 2.5YR 5/6 赤褐色	Oい 7 G.No 5.6、8 住Oい 7 G.1.4 トレアイダ		ヘラミガキ	ハケメ
23-1	D 1	土師器	高台付坏	底部	—	(3.2)	(8.1)	外断) 5 YR 6/6 橙 内) 5 Y 6/1 灰	D 1 No 1		ロクロヨコナデ 底部) 回転糸切り難し	ロクロヨコナデ

表11 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
27-1	D4	江戸以降	茶碗	口~底 1/2残	<8.0>	5.5	<2.5>	外) 2.5YR 5/3 黄褐 断) 10YR 6/4 におい黄橙 内) 10YR 5/4 におい黄橙	D4 No17	近世か	ロクロ形成、施軸	ロクロ形成、施軸
30-1	D8	弥生	壺	胴~底 1/3残	—	(3.4)	—	外) 7.5YR 6/6 橙 断) 10YR 4/1 褐灰 内) 5 YR 6/6 橙	D8		ハケメ	ヘラナデ
33-1	D10	弥生	壺	頸部 僅残	—	—	—	外断内) 10YR 7/4 におい黄橙	D10		太い単沈線による横走並行沈線紋→細い斜行沈線による菱杉紋	ハケメ
36-1	Ta1	須恵器	搦鉢	胴部	—	—	—	外断内) 5 Y 5/1 灰	Ta1 I区		ナデ	5本の深い縦位沈線あり
39-1	P1	弥生	甕	底部	—	(2.0)	<9.8>	外) 7.5YR 7/6 橙 断) 2.5Y 6/1 におい黄灰 内) 5 Y 4/1 灰	P1		摩滅著しく不明	ヘラナデ
39-2	P3	陶磁器	碗 or 高台付坏	胴~底 1/2残	—	(2.4)	<3.7>	外断内) 5 Y 6/1 灰 施軸) 5 Y 6/2 灰オリーブ	P3 シュウヘン	重ね時の施軸の削がれあり。近世	ロクロ成形	ロクロ成形
39-3	P3	土師器	甕	口~頸 僅残	<17.1>	(6.0)	—	内外) 7.5YR 7/4 におい橙 断) 10YR 4/1 褐灰	P3		口縁部) ヨコナデ 頸部) カキメ	口縁部) ヨコナデ 頸部) ハケメ
39-4	P3, P7	土師器	甕	口~頸 僅残	<20.4>	(4.0)	—	外断内) 5 YR 6/4 におい橙	P3、P7		ヨコナデ	ヨコナデ
40-1	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/4 におい橙	SKKDOう7G シュウヘン		半載竹管による横走並行沈線紋・竹管凹形刺突紋	ナデ
40-2	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 5 YR 4/8 赤褐	SKKDH 6 住 シュウヘン		太い単沈線による斜位沈線紋→逆交する組状貼付文	ナデ
40-3	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 7.5YR 7/4 におい赤褐	SKKDH 1 住V区	五領ヶ台II式期	半載竹管による斜位沈線に逆交する単沈線紋	ナデ
40-4	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	内外) 5 YR 6/6 橙 断) 7.5YR 4/3 褐	SKKDH 8 住 Oい7G、 1・2・4トレアイダ	五領ヶ台II式期	貼付隆帯・並行沈線紋	ナデ
40-5	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 7.5YR 3/1 黒褐	SKKDH 1 住III区サブトレ	五領ヶ台II式期	並行沈線紋	ナデ
40-6	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外) 5 YR 5/6 明赤褐 内断) 10YR 6/4 におい黄橙	SKKDH 6 III区2層		半載竹管による並行沈線紋	ナデ
40-7	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	内外) 7.5YR 6/4 におい橙 断) 7.5YR 5/1 褐灰	SKKDOい7G No5・6下	五領ヶ台II式期	貼付隆帯・並行沈線紋	ナデ
40-8	グリッド	縄文	深鉢	口縁部	—	—	—	外断内) 10YR 6/3 におい黄橙	SKKDH 2 住II区サブトレ		単沈線による横位並行沈線紋間に浅い半載竹管紋	ナデ
40-9	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 7.5YR 6/6 橙	SKKDH 3 住		LR 細紋(端部閉末) 横回転	ナデ
40-10	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 5 YR 6/6 橙	SKKDH 1 住5トレ	中期初頭	貼付隆帯上位に斜位沈線紋、以下に縦位沈線紋	ナデ
40-11	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外) 10YR 7/4 におい黄橙 内断) 10YR 6/2 灰黄褐	SKKDH 1 住IX区		単沈線による重弧紋・渦巻き紋・三叉文	ナデ
40-12	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 7.5YR 5/6 明褐	SKKDH 1 住7トレ		単沈線によるU字区画内に刺突紋	ナデ
40-13	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	内) 5 YR 5/6 明赤褐 外断) 10YR 6/4 におい黄橙	SKKDOい7G No5・6 シュウヘン		頂部刻み隆帯紋	ナデ
40-14	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外) 5 YR 5/4 におい赤褐 内断) 7.5YR 6/4 におい橙	SKKDH 6 II区2層		LR 細紋横回転	ナデ
40-15	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 5 YR 5/4 におい赤褐	SKKDH 6 IV区サブトレ		円形貼付文・燃糸紋	ナデ
40-16	グリッド	縄文	深鉢	口縁部	—	—	—	外断) 10YR 5/3 におい黄橙 内) 10YR 4/1 褐灰	SKKDP 3			
40-17	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外) 7.5YR 4/2 灰褐 内断) 10YR 6/4 におい黄橙	SKKDH 2 住IV区3層		貼付隆帯による梯子様紋	ナデ
40-18	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外断内) 10YR 2/2 黒褐	SKKDH 1 住シュウヘン		単沈線による同心円紋・三叉文	ナデ
40-19	グリッド	縄文	鉢	口縁部	—	—	—	外断) 10YR 5/3 黄橙 内) 10YR 3/2 黒褐	SKKDH 1 住IV区ベルト		太い横走並行沈線紋・斜位沈線紋	ナデ

表12 掲載土器観察表

図版No	遺構名	種別	器種	遺存度	法量 (cm)			色調	注記	備考	調整・文様	
					口径	器高	底径				外面	内面
40-20	グリッド	縄文	深鉢	胴部	—	—	—	外) 10YR 6/4 にふい黄橙 内断) 7.5YR 5/2 灰褐	SKKDH 6 II区 2層		単沈線による斜位並行沈線紋	ナデ
40-21	グリッド	縄文	深鉢	口縁部	—	—	—	内外) 5 YR 6/6 橙 断) 7.5YR 5/1 褐灰	SKKDH 1 住V区		内面に返し、外面に稜の高い 貼り付け隆帯	ナデ
40-22	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	—	—	外断内) 10YR 5/2 灰黄橙	SKKDH 1 住IX区		底部網代痕	ナデ
40-23	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	—	—	外断) 10YR 6/3 にふい黄橙 内) 2.5YR 4/2 灰褐	SKKDH 4 住		底部網代痕	ナデ
40-24	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	—	—	外) 7.5YR 7/6 橙 内断) 10YR 6/7 灰黄褐	SKKDH 1 住X III区		底部網代痕	ナデ
40-25	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(3.3)	<13.0>	外) 10YR 7/3 にふい黄橙 断) 10YR 6/1 褐灰 内) 5 YR 7/6 橙	SKKDOう 8 G		底部網代痕	ナデ
40-26	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(7.9)	<8.4>	外) 2.5YR 4/2 灰褐 内断) 7.5YR 7/4 橙	SKKDH 4 住ミナミ		ナデ	ヘラナデ
40-27	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(3.2)	8.8	外) 10YR 6/4 褐灰 内断) 7.5YR 6/4 にふい橙	SKKDH 8 住Oい 7 G、 4・5 トレンチ		ナデ	ナデ
40-28	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(1.9)	5.8	外) 5 YR 6/4 にふい橙 断) 5 YR 4/1 褐灰 内) 7.5YR 6/3 にふい橙	SKKDH 6 II区 2層		底部網代痕	ナデ
40-29	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(2.9)	<12.8>	外断内) 5 YR 5/6 明赤褐	SKKDH 1 住Oい 7 G シュ ウヘン、2・4 トレンチフ ケン		ナデ	ナデ
40-30	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(3.4)	5.2	外) 5 YR 6/6 橙 内断) 7.5YR 7/6 橙	SKKDH 1 住X III区		ナデ	ナデ
40-31	グリッド	縄文	深鉢	底部	—	(2.0)	13.0	外) 5 R 3/2 明赤褐 内断) 5 R 6/6 橙	SKKDH 1 住P 3		ナデ	ナデ
40-32	グリッド	縄文	耳栓		—	—	—	外) 10YR 4/1 褐灰 断) 5 YR 4/6 赤褐 内) 5 YR 6/6 橙	SKKDOい 7 G 1・4 トレ 西側アイダ黒褐色土		円形刺突紋・沈線紋	ナデ
41-1	グリッド	弥生	高環	連結部	—	(4.7)	—	内外) 10R 5/6 赤 断) 5 YR 7/6 橙	Oい 7 No 7、No 22~30 付 近	脚内面に輪 積み痕残る	ヘラミガキ、赤色塗彩	ヘラミガキ、赤色塗彩
41-2	グリッド	弥生	高環	脚部	—	(6.1)	—	外・環内) 10R 5/6 赤 脚内) 7.5YR 7/6 橙 断) 7.5YR 5/1 褐灰	Oい 7 No 27	脚内面に輪 積み痕残る。 古墳Ⅲ期中 段階か	ヘラミガキ、赤色塗彩	環部) ヘラミガキ、赤色塗彩 脚部) ヘラケズリ、ナデ
41-3	グリッド	弥生	高環	環部 1/3 残	<17.7>	(8.0)	—	外断内) 7.5YR 6/6 橙	Oい 7 No 24 25・26・30		ヘラミガキ	ヘラミガキ
41-4	グリッド	土師器	器台	環~脚 2/3 残	<20.4>	(12.7)	—	内外) 7.5YR 8/4 浅黄橙 断) 10YR 4/1 褐灰	Oあ 7 G No 1	古墳Ⅰ期か	ヘラミガキ	ヘラミガキ 脚部) ハケメ
41-5	グリッド	土師器	高環	環~連結部 1/5 残	—	(9.0)	—	内外) 5 R 7/4 にふい橙 断) 10YR 6/1 褐灰	Oい 7 G No 9	脚内面に輪 積み痕残る。 古墳Ⅲ期中 段階か	ヘラミガキ	裾部) ヘラナデ
41-6	グリッド	土師器	高環	脚部	—	(8.0)	—	内外) 10YR 8/4 浅黄橙 断) 2.5 Y 4/1 黄灰	Oい 7 No 12、Oい 7 L 2.4 ト レアイダ		摩滅著しく不明	摩滅著しく不明
41-7	グリッド	弥生	鉢 or 椀	完形	11.7	4.1	5.2	外) 2.5YR 7/6 橙 内断) 10YR 8/4 浅黄橙	Oい 7 No 22		摩滅著しく不明	摩滅著しく不明
41-8	グリッド	弥生	甕	底部 1/2 残	—	(2.9)	<11.0>	外断) 10YR 7/4 にふい黄橙 内) 2.5 Y 5/2 暗灰黄	Oい 7 No 16		摩滅著しく不明	ヘラナデ
41-9	グリッド	土師器	甕	底部	—	(2.8)	<6.8>	外断) 5 YR 4/6 赤褐 内) 10YR 3/1 黒褐	Oい 7 No 3		ヘラミガキ	ヘラナデ
41-10	グリッド	弥生	甕	頸部 僅残	—	—	—	外) 5 YR 7/6 橙 内断) 7.5YR 5/4 にふい褐	Oう 7 G シュウヘン		櫛描横走並行沈線紋→単沈線 による T 字紋	ナデ
41-11	グリッド	弥生	甕	胴部 僅残	—	—	—	外断) 7.5YR 6/4 にふい橙 内) 2.5 Y 4/1 黄灰	Oい 7 G シュウヘン		4本一組の縦走櫛描波状紋→ 単沈線紋・2本一組の櫛描刺 突紋	ナデ
41-12	グリッド	カワラケ	甕	胴部 僅残	—	—	—	内外) 5 Y 2/1 黒 断) 10YR 4/3 にふい黄橙	D 7 シュウヘン		組み込み模様の押し型紋	ナデ

表13 掲載鉄器観察表

図版No.	遺構名	種別	器種・分類	遺存度	注記	備考
27-2	D 4	銅製品	かんざし	端部残	SKKD. D4. No 4	
42-3	D 4	銅製品	古銭	完	SKKD. D4. No 5	方形孔、『○永通○』、裏面象嵌、1680代
27-4	D 4	銅製品	古銭	完	SKKD. D4. No10、『文久○○』	緑錆著しい、方形孔、『○永通○』、
27-5	D 4	銅製品	古銭	完	SKKD. D44. No 2	緑錆著しい、『寛永通寶』、裏面象嵌、1680代
42-1	D 3	銅製品	古銭	完	SKKD. D 3 周辺検出面	緑錆著しい
42-2 42-3 42-4	H 1	鉄	釘	不明	SKKD. H 1 住周辺検出面西側	鉄錆著しい
42-5	H 1	鉄	釘	一部	SKKD. H 1 住周辺検出面	方形柱状（棒状）が鉄錆で固まる

## 第V章 坂城町込山D遺跡出土骨について

蓼科高校教諭 田中 和彦

### 1. 骨の残存状況・観察所見及び鑑定

骨の残存部位は、四肢骨骨体の下部及び関節部分（肘頭窩）と思われる箇所である。関節の遠位端（関節面）は消失している。年齢を推定できるような骨端の形状は確認できない。色は全体的に白色で骨の性状は硬く、残存部位での遺存状況は比較的良好である。骨体部分が割れているが、割れた部分は緻密質が平坦で直線的である。割れ口の一部には、炭が付着している。骨が比熱を受けて生じた炭ではなく、土と混じった炭が付着している。骨体の前面に不自然な損傷が認められ、人為的に刃器などによってつけられたものの可能性がある。骨体遠位方向から入った刃器が止まったものと思われる。残存骨表面には所々緻密質の崩壊している箇所があり、鈎突窩の付近はそれが顕著である。その部分に砂が入り込んで黒色を呈する。遠位端に小動物の咬み跡と思われる傷（円錐状の溝：長さ約6mm、4.3mm）が2箇所認められる。

骨体の断面形状は矢状径は長く、横径は短くほぼ卵円形である。骨体の遠位端から関節窩にかけての形状、骨体の断面形状から人骨ではなく、獣骨の可能性が高い。

以上の観察結果と動物種が分かっている骨格標本との比較により、考えられる動物種はイノシシかブタであるが、骨体の緻密質の厚さからイノシシの可能性が高い。部位は、左上腕骨骨体遠位部である。年齢は骨体の大きさから幼獣ではないと思われる。性別は不明である。

### 2. 考察

本獣骨が出土した地点では、他の獣骨が出土していないことから、動物の解体場所あるいは、遺体の廃棄場所とは考えにくい。また骨体が割れている箇所については、生存中に割れたものではなく、解体痕のような損傷があることと合わせると、解体に伴って割られたものと思われる。残存骨表面には所々緻密質の崩壊している箇所がある点については、風雨に晒された結果と見た方が妥当である。

骨体に付着した炭については、生活面及び遺構伏土中より炭化物等の混入は確認できていないということなので、出土した地点とは異なる場所で付着したものと考えられる。

以上のことから、本獣骨は出土地点とは別の地点で、解体に伴って人為的に破壊されたものが、何らかの理由で本遺構部に持ち込まれたものと考えるのが妥当である。

尚、損傷の大きさ、骨体の矢状径・横径は工業用ノギスによって計測した。

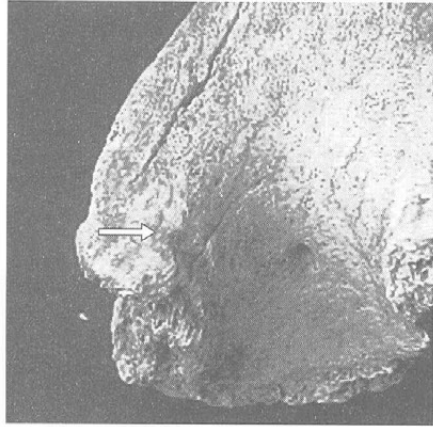
### 参考文献

- 金子浩昌、1984、貝塚の獣骨の知識 人と動物とのかかわり、考古学シリーズ10、東京美術、東京。
- 松井章編、2006、動物考古学の手引き、3大型哺乳類骨格図譜、独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター。
- 西本豊弘・松井章、1999、考古学と動物学、考古学と自然科学②、同成社、東京。
- 高橋 理・水沢教子・岡村秀雄、2006、屋代遺跡群出土イノシシの年齢について、長野県立歴史館研究紀要12、pp.72-76、長野県立歴史館。

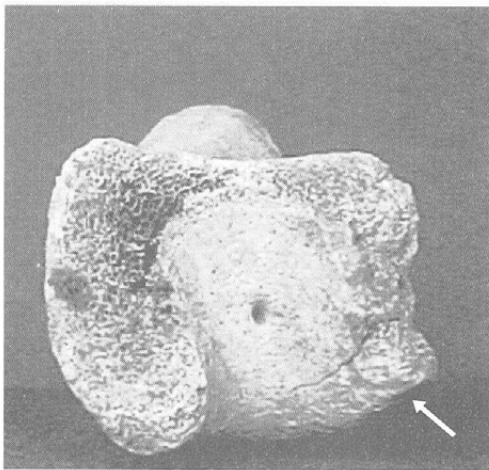
小動物の咬痕と思われる損傷（矢印）



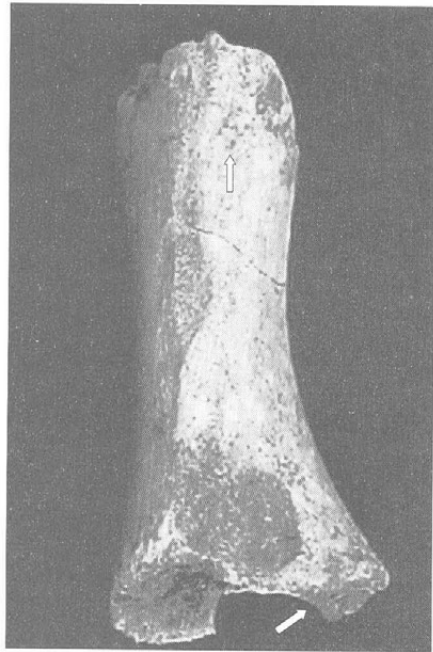
長さ4.3mm, 幅(最大)2.4mm, 深さ1mm  
円錐形に近い溝



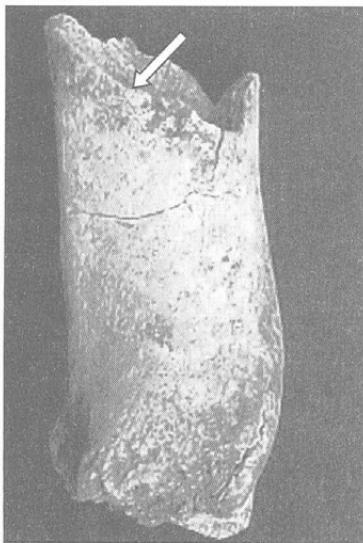
長さ6mm, 幅(最大)2.4mm, 深さ0.7mm  
円錐形に近い溝



肘頭窩  
矢印：咬痕のある箇所

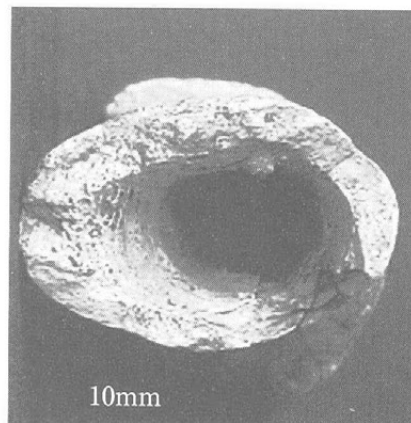
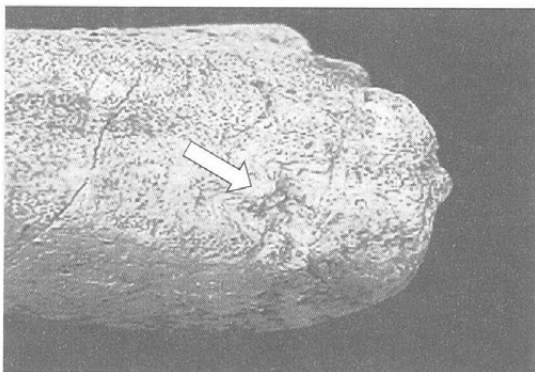


前面観  
矢印(上)：人為的損傷のある箇所  
矢印(下)：咬痕のある箇所



側面観  
矢印：比較的平坦な割れ口

骨体前面に人為的につけられた損傷（矢印）  
あまり鋭利でない刃器であると考えられる。



上面観

骨体の断面形状は、矢状径が長い卵円形を呈する。

緻密質は厚い。

矢状径約30mm，横径約22.3mm



## 第Ⅵ章 坂城町の縄文時代における込山D遺跡

田中 浩江

### 第1節 縄文時代の遺跡

#### 1) 坂城町出土の縄文土器

今回の込山D遺跡の調査では縄文時代の遺構の検出は無く、縄文土器片も少量の出土であった。しかし、かつて遮光器土偶が出土したことで後晩期の縄文遺跡として注目されていたことや、込山D遺跡の試掘調査において無節縄紋の含繊維土器や晩期土器片が出土しているため、ここでは、坂城町で出土した縄文土器全体の傾向を概観しながら、込山D遺跡の縄文時代の様相について述べたい。

坂城町において、これまでに試掘を含む発掘調査により縄文土器が出土している遺跡は上町Ⅱ、青木下Ⅱ、和平A、和平C、豊饒堂、塚田Ⅱ、開畝Ⅳ、東裏Ⅱ、保地Ⅱ、込山C、込山Dの11遺跡ある（第52図・14表）。137の遺跡が確認される中の12遺跡という数は、遺跡数としては少ない感を受けるが、その時期的な在り方は縄文中期の遺跡数が多いとの認識を持たれている長野県下において、晩期の遺跡が多く確認されているという点で特異的であると言えよう。以下に、出土した土器の帰属時期を追いながら概観してみたい。

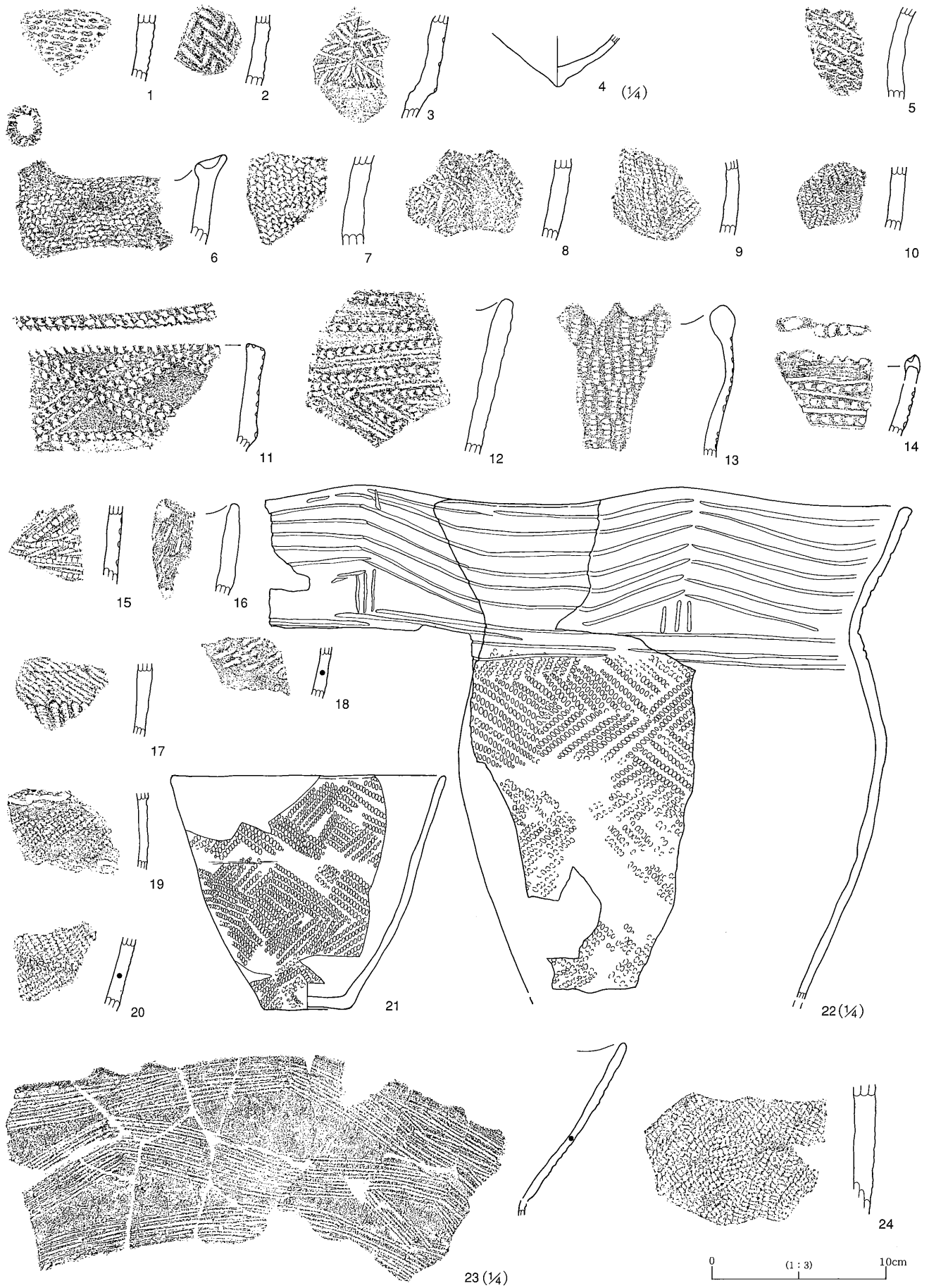
なお、時期判別について既に調査報告書の発刊されているものはそれに従い、未刊行のものは綿田弘実氏に多くご教示賜った。

#### 早期・前期の土器

坂城町より現在出土している縄文土器で最も古い時期のものは、和平A遺跡の押型紋土器、込山B遺跡の鶴ヶ島台式土器、豊饒堂遺跡の尖底土器であろう（第45図1～4）。押型紋土器片、鶴ヶ島台式土器片は『坂城町誌』で図化紹介されているが、その出土状況は不明である。尖底土器は豊饒堂遺跡発掘調査時にQ1特殊遺構より黒耀石製の石鏃3点、黒耀石製石匙1点とともに出土しているが、残念ながら底部破片のため文様・器形その他は不明で、条痕は確認出来なかった。第45図2に図化した山形押型紋の土器は町内出土の土器片で、遺跡名は不明である。また、同町誌にて和平A遺跡と平沢遺跡より楕円押型紋と山形押型紋の土器の出土が文章紹介されおり、これらの遺跡より出土した可能性が高い。

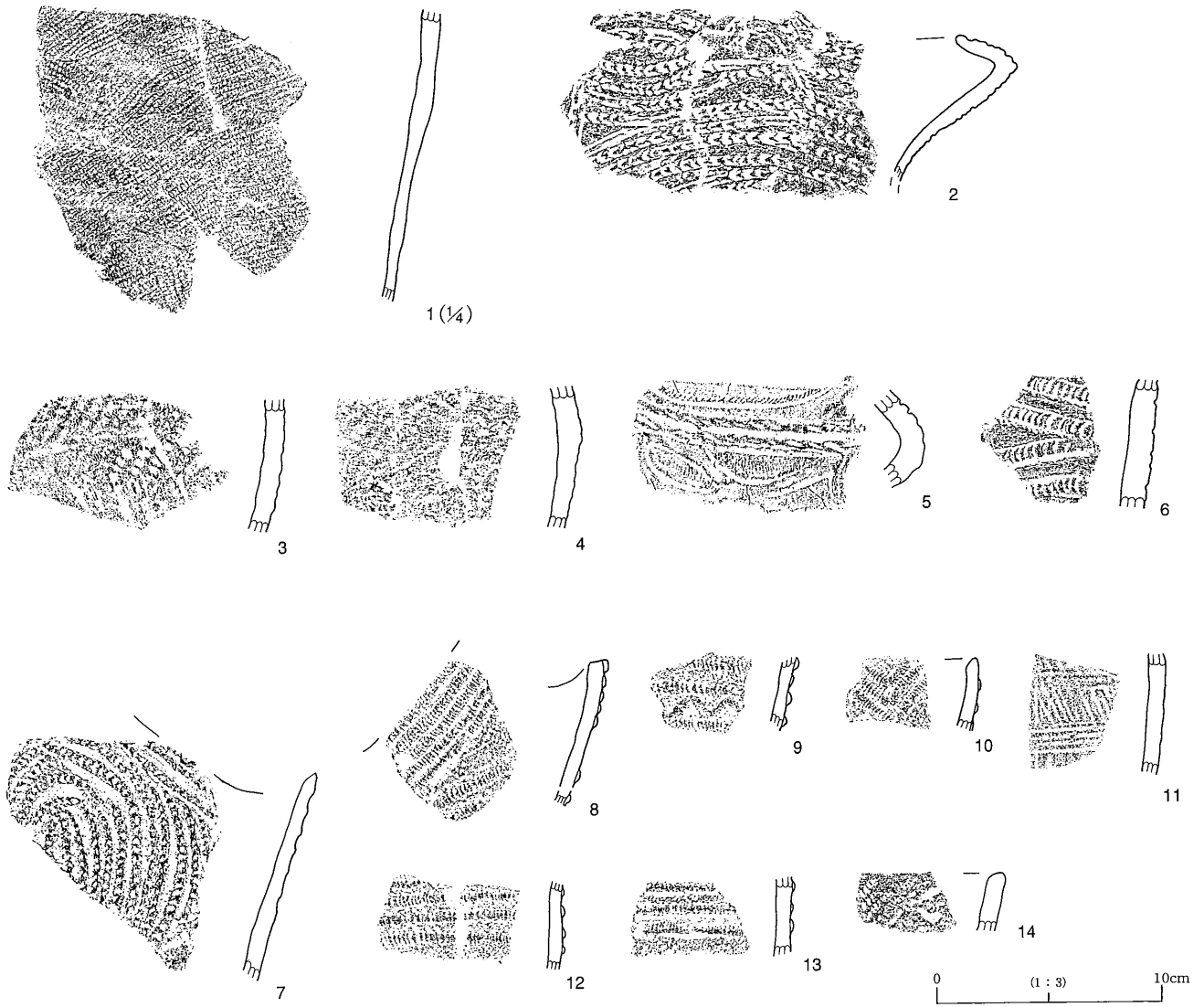
前期の土器としては、初頭・中葉・末葉に帰属するものが出土している（第45図5～24・第46図）込山C遺跡発掘調査では、附加条縄紋・組紐原体・束の縄（第45図5～10）と言ったバラエティに富んだ縄紋原体を使用した時期の土器片が出土している。また、先ごろ本調査が行なわれたばかりの開畝遺跡Ⅳ（2006未報告）からも無節縄紋の結節羽状縄紋小片や円形刺突紋を持つ諸磯系土器が出土している。込山C遺跡からは神ノ木式の櫛歯状工具による連続刺突紋（第45図11～16）も出土している。込山D遺跡の試掘調査で無節縄文による絡条体回転施文の小片（第45図18）が出土しているが、本調査では該期の土器片および遺構は確認できていない。

羽状縄紋構成を持つ土器は込山C遺跡と塚田遺跡Ⅱから出土しているが、結束・結節した原体で羽状縄紋を構成する例は込山C遺跡に確認できた（第45図19・20・21・22）。第46図1・3の羽状縄文は1種類の縄紋原体の回転方向を換える事で羽状構成を作出している。小破片の多い中で全形を窺い知れる資料は込山C遺跡から出土している。第45図21・22は、若干口縁部と胴部に変換点を持ち、LR縄紋原体の回転方向を変えることにより羽状を構成し、底部に至るまで施文されている。胎土に繊維は含まれない。22は縄紋施文後に頸部から、波状する口縁部に向かい単沈線による、並行沈線紋が施文される。同様の並行沈線紋により



第45図 坂城町出土の縄文土器〈1〉

●合繊維を示す



第46図 坂城町出土の縄文土器〈2〉

挿図出典

- 45-1・3・29、47-14~16 「坂城町誌」中巻 1981 坂城町誌刊行会 加筆修正  
 45-4 「豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡」1996 坂城町埋蔵文化財調査報告書第5集 転載  
 45-5~17・20~23、25・26、46-6・7、47-13 込山CI遺跡未報告資料 朝倉・田中図化  
 46-3・4・8~14、47-2・11・12、48-1~3、50-1・6・10・12 「南条遺跡群 塚田遺跡」1995  
 坂城町埋蔵文化財調査報告書 第4集 加筆修正  
 45-18・19・24、48-25、50-8・9・11 込山D遺跡試掘調査報告資料 朝倉・田中図化  
 48-4~24、49図全図、50-4・5・7 「金井東遺跡群 保地」遺跡」2002  
 坂城町埋蔵文化財調査報告書 第20集 加筆修正  
 47-1、50-2・3 「南条遺跡群 東裏遺跡」・青木下遺跡」坂城町埋蔵文化財調査報告書 第1集 加筆修正  
 47-3~10 込山D遺跡本調査 本書第40図より転載

なお、加筆修正に関しては、拓本を朝倉が実測トレースを田中が行った。

第46図 坂城町出土の縄文土器〈2〉

頸部から口縁部を充填するものに込山C遺跡の23がある。口縁部は4単位の小波状を配置し、並行沈線紋は半裁竹管により施文されている。20に比して胎土に多量の繊維を含んでいる。これらは、有尾式に判別されよう。

諸磯b式土器に込山C遺跡の口縁部がある（第46図2）。口縁部端部で強く内折し、半裁竹管による押し引き紋で文様充填される。同様に口縁部が内折する器形に込山B遺跡出土として、坂城町町誌に図化紹介されている5の破片がある。諸磯c式土器には7の込山C遺跡I出土例がある。

第46図8～10・12・13は塚田遺跡II出土の土器片で、細かい半裁竹管による押し引き文が施され、新潟の「いわゆる重稲場式土器」に近い様相を呈しているが十三菩提式に否定されよう。11も塚田遺跡II出土の土器であるが、細かい半裁竹管によるいわゆる「籠目紋」を施すもので、前期末葉に帰属しよう。また、開畝遺跡（2006本調査）からも小片のため全容は窺い知ることができないが、単沈線に沿う鋸歯紋を施す土器片が出土している。

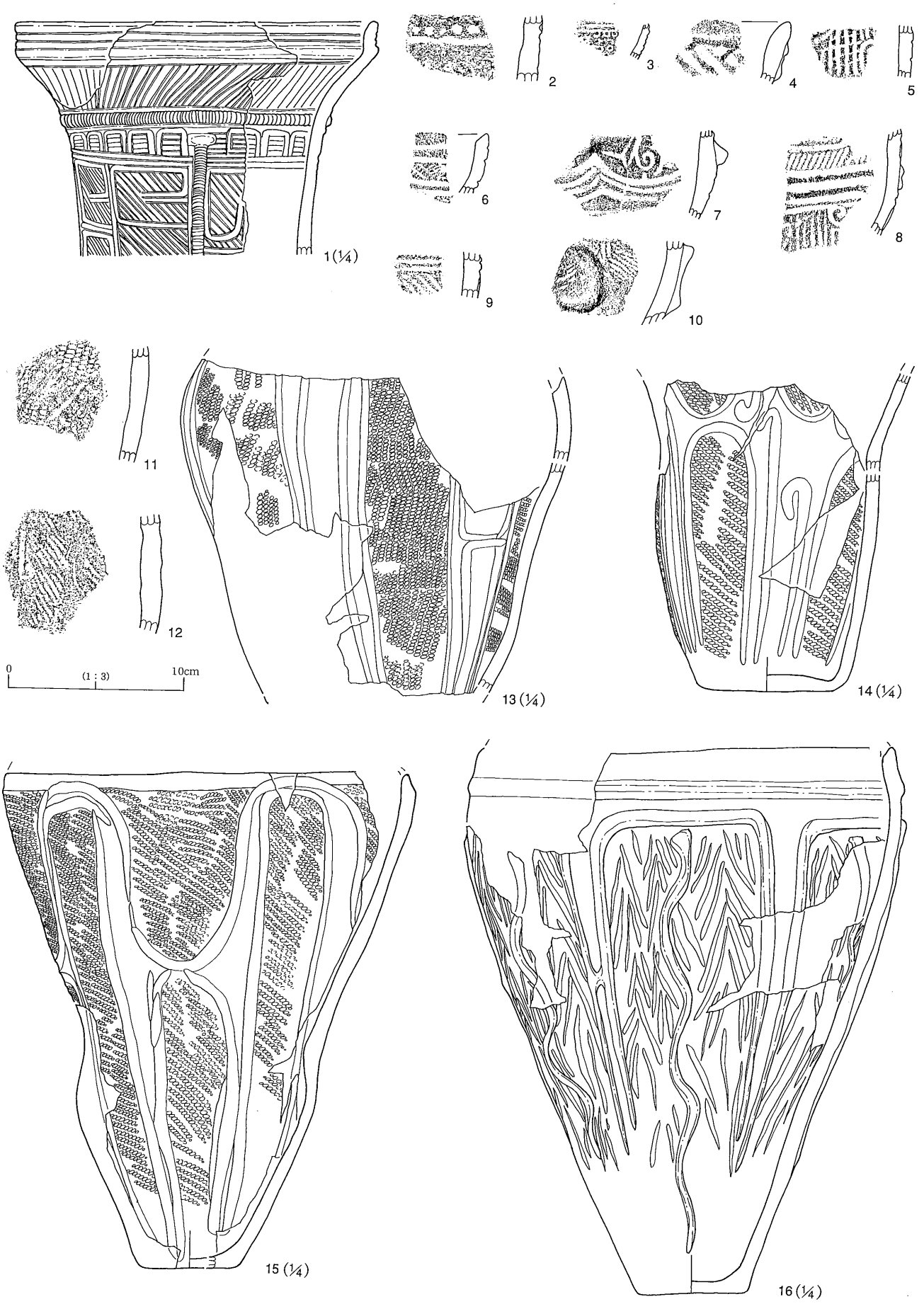
### 中期の土器

中期の土器は初頭から後半まで出土しているが、加曾利E式期までの出土例が極端に少ない傾向にある。

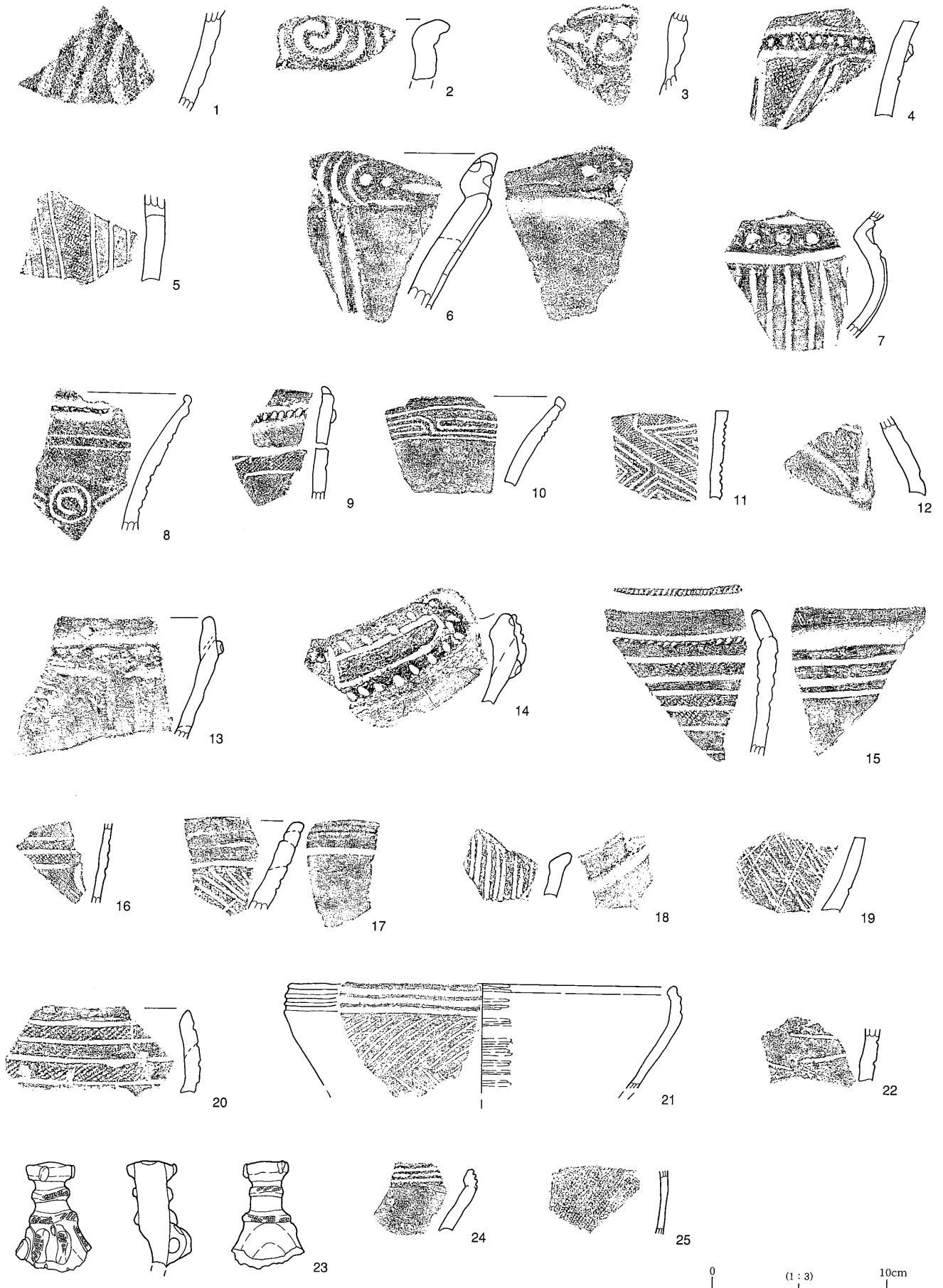
中期初頭にあたる土器は上町、東裏II、塚田II、開畝IV（2006未報告）、込山D遺跡から出土している。東裏遺跡IIからは深鉢の胴部中位以上を残し、ある程度のプロポーションを窺える貴重な資料である（第47図1）。有段口縁を呈し、頸部から円筒状に底部に向かう五領ヶ台式土器の様相を呈する。施文技法は半裁竹管腹による並行沈線紋を地文に多用し、太目の半裁竹管背により主要紋を施文している。蓮華紋を採り入れるなど、北陸の土器様相を窺わせる要素も持っており、最近他遺跡で増加している類似資料と合わせて注意しておきたい。同様に半裁竹管による並行沈線紋を地文とする開畝IV、込山D遺跡出土の土器片がある（第47図5）。同工具により格子目紋を呈する点で1と異なるが、やはり県内でよく観られる中期初頭の様相である。込山D遺跡からは、他に細かい円形刺突紋を多用する土器片（第47図3）、ソーメン状浮線紋を施文する土器片（第47図4）が出土している。大きめの円形刺突紋を施文する第47図2の塚田遺跡II出土の土器片も中期初頭と報告されている。

第47図6は、やはり半裁竹管による技施文技法が残る深鉢口縁部の小片で、全体の文様構成やプロポーションは不明であるが、中期前葉に観られる土器に近かろう。7は半肉的で三叉紋を文様要素に採り入れている。半肉的な器面の特徴から中期中葉と考えられる。8は単沈線による斜行沈線紋と縦位沈線紋を多用し、渦巻紋を要素として採り入れている。唐草紋系土器の範疇に入るかもしれない。いずれも込山D遺跡から出土した土器であるが、小片ばかりで他に図化できる該期の土器片は無い。

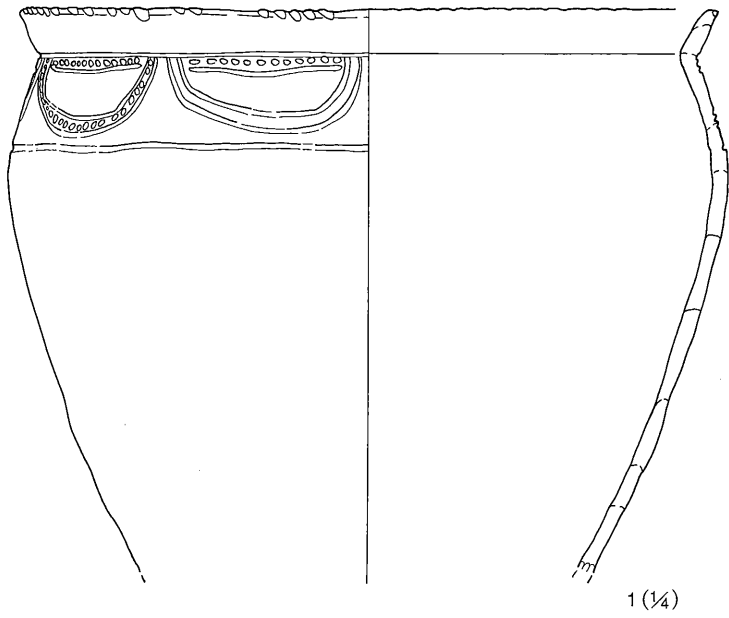
加曾利E式期の土器は塚田II、込山C、込山Dの3箇所遺跡から出土している。込山C遺跡から出土した土器は破片資料の多い中に在って、弱いキャリパー様のプロポーションを窺える貴重な資料である（第47図13）。LR縄紋横回転を下位から上位に向けて施文し、太目の沈線紋により文様帯が縦位区画される。込山D遺跡出土資料（第47図10）、塚田遺跡II出土資料（第47図11・12）は縄紋原体を縦位回転させて施文しており、沈線紋も浅い。時期的には、込山C遺跡資料に後出するものであろう。第47図14～16は『長野県史』および『坂城町誌』で紹介されたものを再実測した。同町誌によると、昭和三六年三月、旧宮入味噌醸造工場のボイラー室新設工事時に敷石住居址の検出があったことが記されている。そこで『信濃』（16-2）「長野県埴科郡坂城町込山C遺跡略報」金子浩昌、山崎元、森嶋稔氏の報文を引用して「敷石下には三つの土器が埋没されているのが確認された。三つの土器は口縁を敷石に接しており、敷石は埋設土器の蓋というような状態はなく、すき間なく敷きつめられた様子から、密封の状態と理解されるものであった。」と紹介



第47図 坂城町出土の縄文土器〈3〉



第48図 坂城町出土の縄文土器〈4〉



1 (1/4)



2



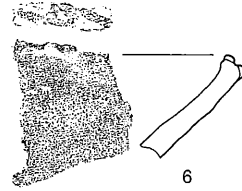
3



4



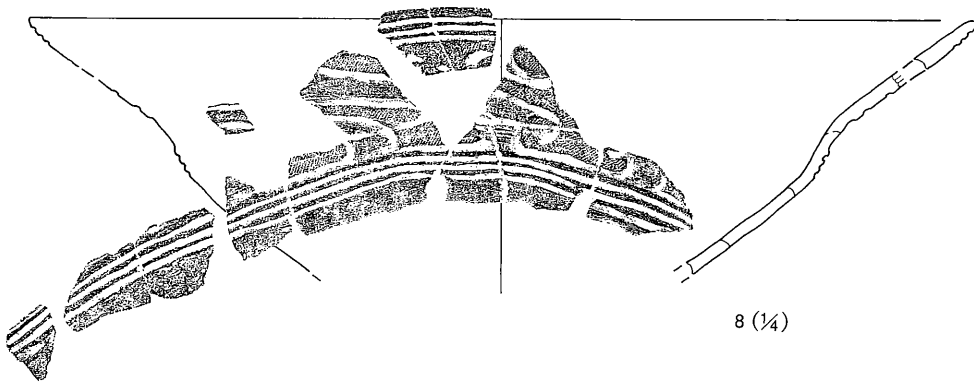
5



6



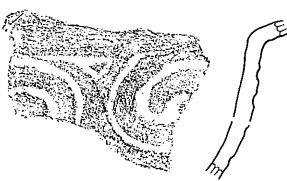
7



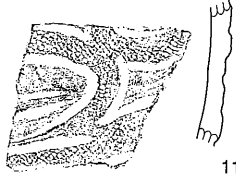
8 (1/4)



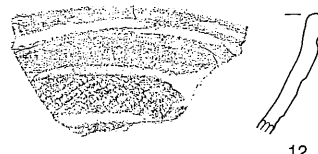
9



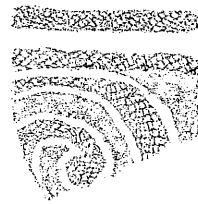
10



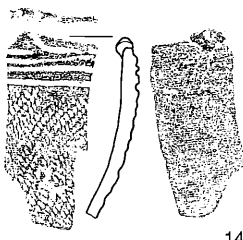
11



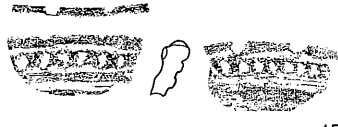
12



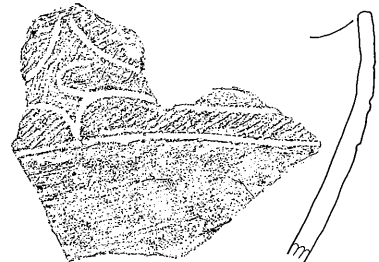
13



14



15



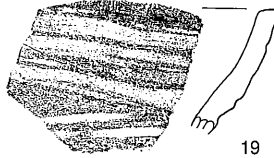
16



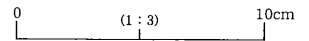
17



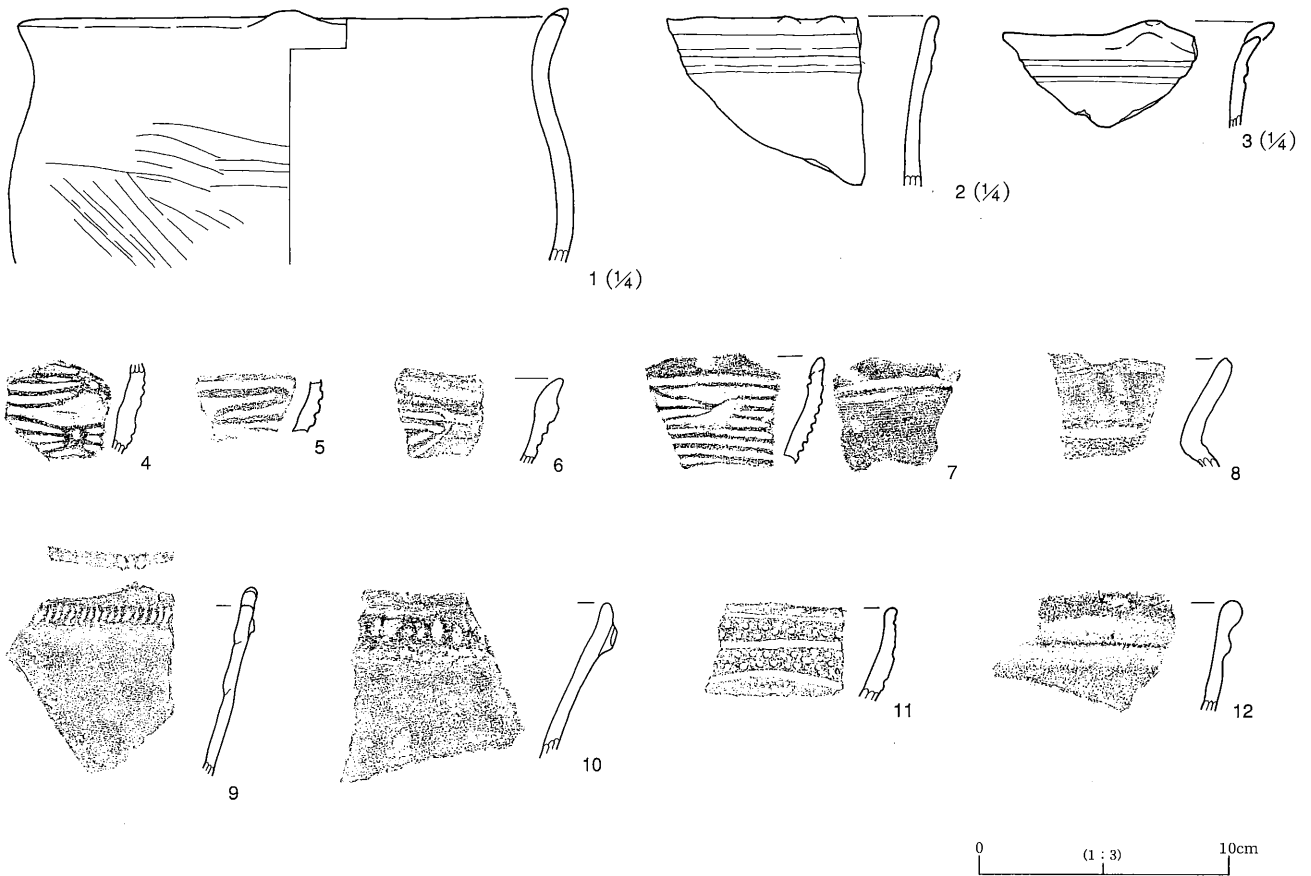
18



19



第49図 坂城町出土の縄文土器〈5〉



第50図 坂城町出土の縄文土器〈6〉

第14表 坂城町縄文遺跡一覧表

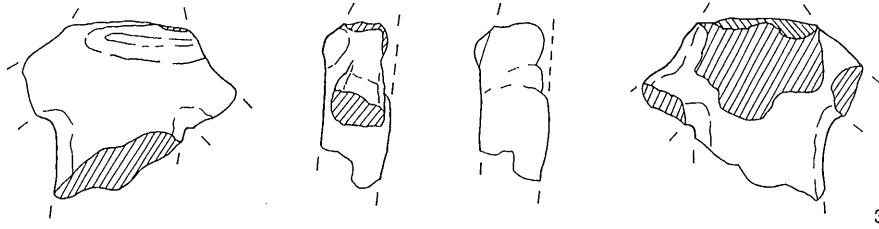
遺跡名	遺跡分布図No.	時期	調査の様子	参考文献
東裏遺跡Ⅱ	1-1	中期初頭 晩期(水)	試掘調査	第1集『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』1994
塚田遺跡Ⅱ	1-7	有尾 黒浜 前期末 前期末～中期初頭 水	本調査	第4集『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』1995
青木下遺跡Ⅱ	1-8	加曾利E 曾利 後期 晩期	本調査	第10集『町内遺跡発掘調査報告書』1995
保地遺跡Ⅱ	3-1	称名寺 堀之内 加曾利B 安行 中/沢 佐野 水	本調査	第20集『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』2002
上町Ⅱ	8-2	前期(含繊維)	試掘調査	第7集『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』1996
豊饒堂遺跡	20	尖底土器	本調査	第5集『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺裏遺跡・東町遺跡』1996
開畝遺跡	21	中期初頭 繊維土器 結節羽状	本調査	第22集『町内遺跡発掘調査報告書』2002
開畝遺跡Ⅳ	21	前期末～中期初頭	本調査	2006調査・未報告
込山B遺跡	30-2	細片(時期不明)	試掘調査	第21集『町内遺跡発掘調査報告書2002』2003 第24集『町内遺跡発掘調査報告書2003』2004
込山C遺跡	30-3	神ノ木 有尾 関山(異条斜条、附加条、組紐、束の縄、無節羽状、結節羽状) 黒浜 加曾利E	本調査	第18集『町内遺跡発掘調査報告書2000』2001 第25集『町内遺跡発掘調査報告書2004』2005 第27集『込山C遺跡Ⅱ・Ⅲ』2006 込山C遺跡Ⅰについては未報告
込山D遺跡	30-4	無節絡条体回転 五領ヶ台 中期中葉 中期初頭 唐草紋系 加曾利E	本調査	本書
和平A遺跡	36-1	細片(時期不明)	本調査	第18集『町内遺跡発掘調査報告書』2000
和平C遺跡	36-3	細片(時期不明)	本調査	第18集『町内遺跡発掘調査報告書』2000

縄文土器を出土した遺跡のみを表にしている。

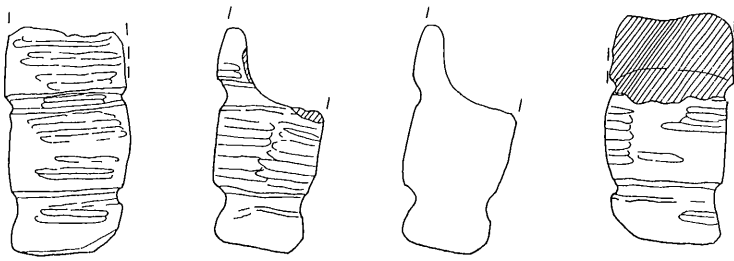




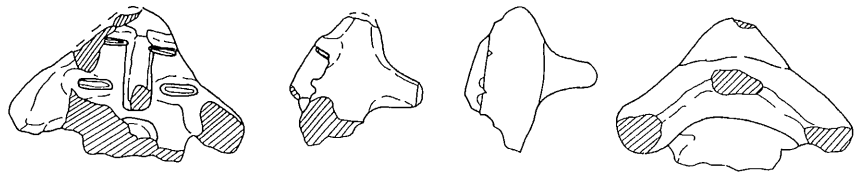
0 10cm



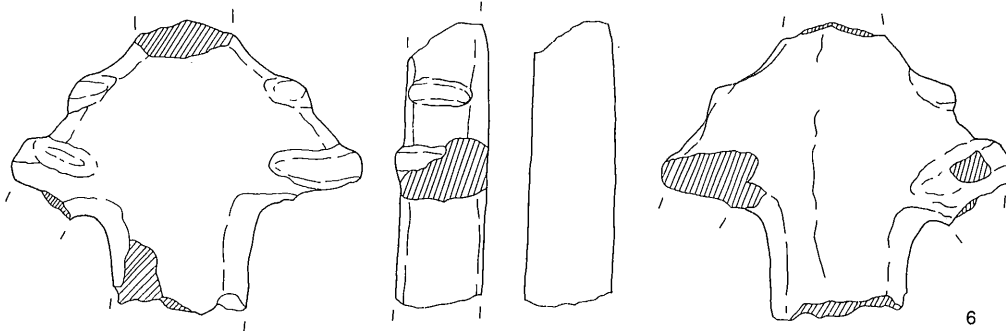
3



4



5





6

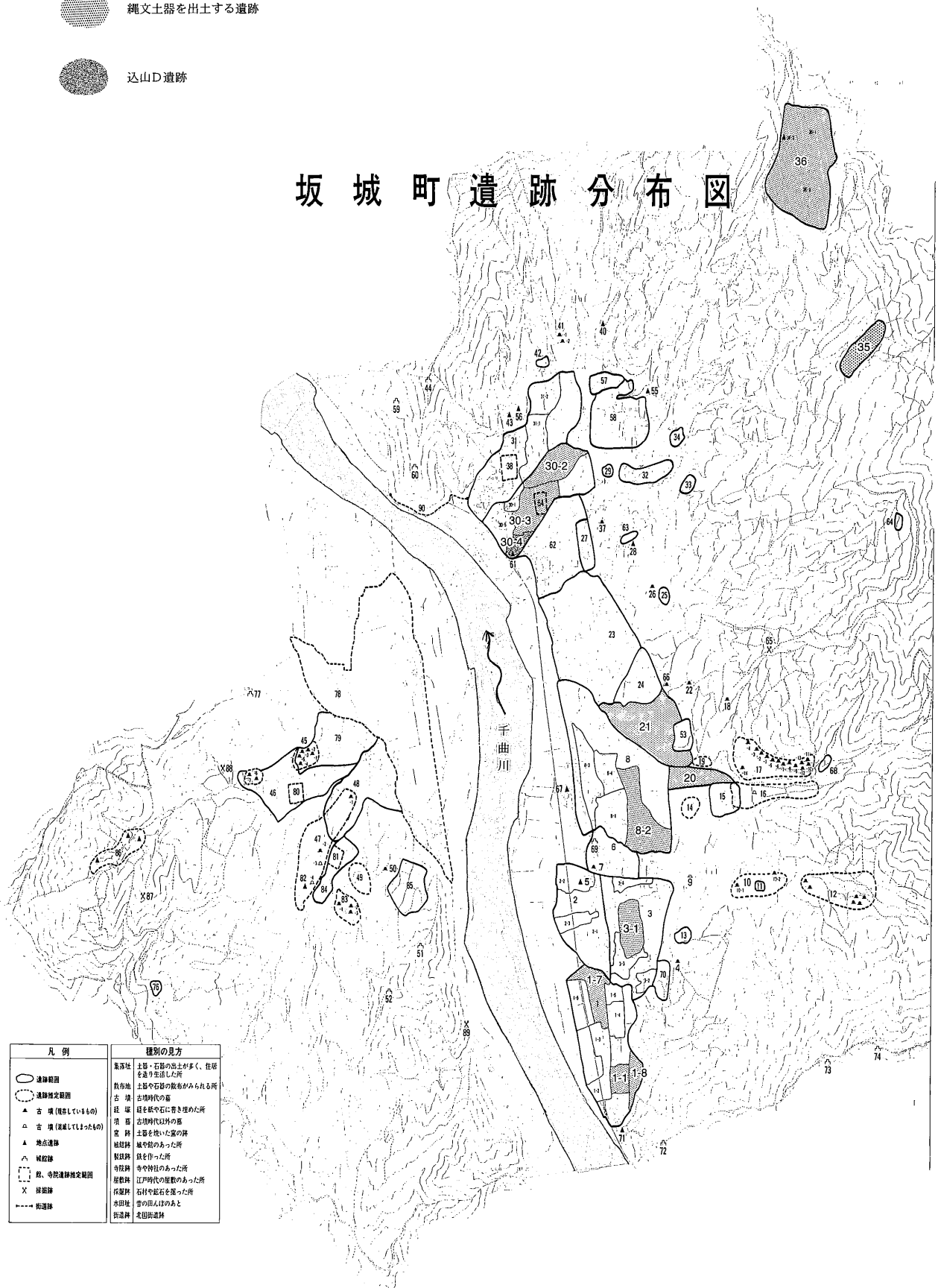
挿図出典  
 1・2 「坂城町誌」 中巻 1981 坂城町誌刊行会 転載  
 3～6 坂城町埋蔵文化財調査報告書第20集 転載

0 (1:2) 10cm

第51図 坂城町出土の土偶

-  縄文土器を出土する遺跡
-  込山D遺跡

## 坂 城 町 遺 跡 分 布 図



第52図 坂城町の縄文遺跡分布図

している。これは、町の登録遺跡名では30-3にあたる。16は加曾利系の出土例が多い坂城町においては、希少価値がある唐草紋系の土器である。隆帯による区画文様帯の中央に蛇行垂下する貼り付け隆帯とそれに沿う斜位の沈線紋が施され、斜位沈線紋は「ハ」の字を意識しながらも垂下する単沈線で、唐草紋系IV段階と考えられるが、垂下する蛇行隆帯が底部付近に伸びていることより古手の様相が窺える。

#### 後期・晩期の土器

堀之内式期の資料は塚田遺跡Ⅱ（第48図1～3）、保地遺跡Ⅱ（第48図4～13）から、加曾利B式期のものは開畝遺跡Ⅳ、保地遺跡Ⅱ（第48図15～22）から出土している。該期の資料は保地Ⅱ遺跡の遺存度の良さも手伝って、破片資料ながらも個体の量的には豊富である。

安行式期の土器も全て保地Ⅱ遺跡から出土している（第48図23・24・第49図1）。第49図2～19・第50図は晩期の資料で大洞式期には、中ノ沢式と呼ばれるもの（第49図2～5）、佐野式と呼ばれるもの（第49図6）、氷式と呼ばれるもの（第49図7・9・第50図）が含まれ、在地の特徴が多く観られる感を受ける。8は底部を欠くがプロポーシオンを窺い知れる貴重な資料で後期の末に当ろう。保地遺跡Ⅱ中心だった資料も、氷式期になると保地遺跡Ⅱの他にも塚田遺跡Ⅱ、込山D遺跡の出土例が観られる（第50図）。

#### 2) 込山D遺跡出土の土偶

『坂城町誌』および『長野県誌』によると、込山D遺跡から土偶の出土が記録されている。町内の土偶出土例は「金井西遺跡群 金井（社宮神）西遺跡」の出尻土偶（第51図2）、「金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ」の仮面土偶や山形土偶の可能性を含む（第51図3～6）の6点が知られているが、出土例は少ない。

そこで今回の本調査では確認できなかったが、ここで資料紹介もふくめ、調査区との関連を確認しておきたい。なお、出土遺物の実見が叶えば再実測して掲載したいところであるが、それができなかったため前出の『坂城町誌』および『長野県史』に掲載された挿図をそのまま孫引き状態で使用する（第51図1）ことをお許しいただきたい。

挿図では、縮尺や実測方法・トレース方法が現在と異なるため、詳細部分は上手く読み取れないが、本文によると『遮光器土偶』にあたる。確かに目の辺りに雪国で実用されている「遮光器」のような表現が確認できる。頭部のみで全容は把握し得ないことと、実見していないため胎土や各パーツの接合および破損状況、施文具や施文順序等の観察はできなかった。

出土位置は『坂城町誌』の挿図では込山E遺跡とあるが、本文記述の中で「込山D遺跡は、遮光器土偶の頭部破片を出した遺跡として古くから注目されてきた遺跡である。……中略……込山D遺跡の土偶は、信越線坂城駅前広場の拡張の際に採集されたものとされている。」とある。『長野県誌』でも縄文後・晩期の土偶の欄で、込山E遺跡の出土として紹介されているが、ちょうど込山D遺跡と込山E遺跡の中間にあたり、比較的込山D遺跡に近いと思われる。JR坂城駅付近とされる、その出土地は今回の調査区から直線で南東約85mの地点にあたり、千曲川の第一段丘端部にあたる。この位置と今回調査区内における縄文土器出土位置図（第53図）を概観すると、ちょうど南東部に晩期の土器片が分布しており、この遮光器土偶との関連が指摘できよう。

#### 3) 縄文遺跡の地理的分布状況（第52図・第14表）

坂城町は、町の中央を千曲川が広く流れ、それゆえに肥沃の地を形成する特徴的な地形を呈している。遺跡分布図を概観すると川の右岸に遺跡が集中するが、左岸の方が山裾が迫ると云った複合扇状地に起因する

のであろう。

これら坂城町の地理的条件において、縄文晩期土器を出土する遺跡が多く観られる傾向にあるが、晩期土器を出土する保地遺跡Ⅱ、込山B遺跡、込山D遺跡、塚田遺跡の多くは千曲川により形成された第一段丘から第二段丘および自然堤防上に位置することが概観できる。

縄文中期の土器を出土する込山C遺跡Ⅰ、開畝遺跡などは第2段丘より山寄りにあたり、なだらかに標高を上げながら傾斜する、扇状地扇中央部に位置し晩期の遺跡と若干様相を異にしている。縄文早・前期の遺物を大量に出土している込山C遺跡は扇状地の更に山寄りに位置している。

現在の土地利用の状況を見ると、千曲川に沿って国道が通り、その国道沿いに官庁施設・店舗・住宅が立ち並ぶ。その国道より若干山寄りに旧街道が位置し、住民の生活道路と古くからの店舗や学校がある。更に山際には高速道路である上信越自動車道が架橋上を走っている。

町内の遺跡発掘調査は開発に伴い、破壊を余儀なくされる場合の緊急発掘調査であるため、開発場所により検出される遺構や遺物内容が制約されている。つまり、開発が多い現在の国道付近や旧街道付近に縄文後晩期の遺跡が、現在のところ発見されていることになる。当たり前のようであるが、地形に制約されて素直に人間は居住し、生活活動を行うということは、現代も縄文時代も変わらないと思われるが、集落の在り方については、今後の発掘調査の成果を待たざるを得ない状況である。

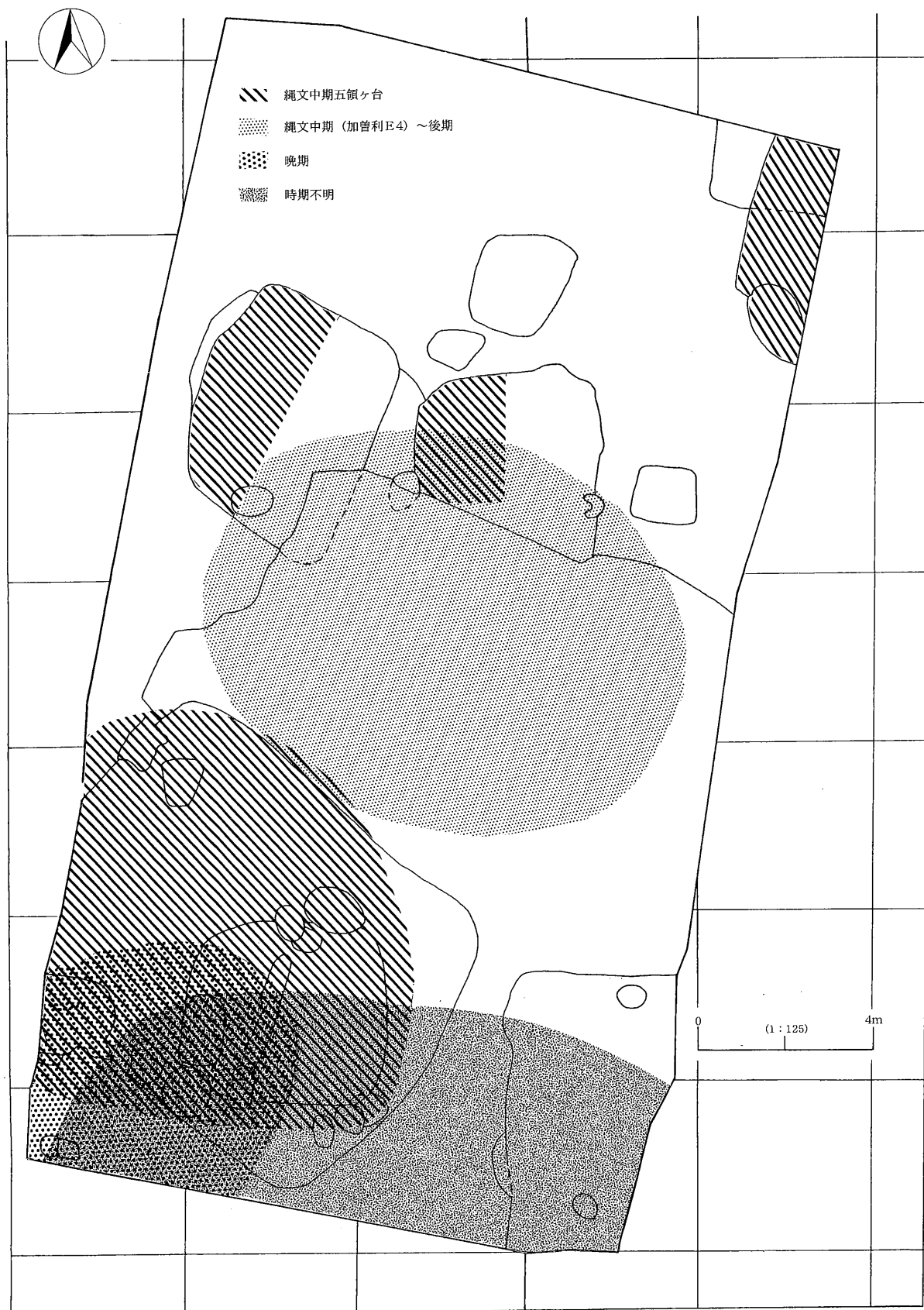
#### 4) 込山D遺跡における縄文土器

坂城町の縄文土器・土偶・遺跡分布を概観したところで、込山D遺跡出土の縄文土器をもう一度観てみよう。遮光器土偶の出土で注目されている遺跡にしては、今回の調査で出土した縄文土器は第40図に示した程度の小破片のみである。これらを図化できなかった土器片を含め、出土位置を示したのが第53図である。

調査区は北東に高く南東に低い傾斜地で、千曲川は南方に流れている（第50図）。土器片は調査区全体に散漫として分布していたが、中期五領ヶ台期の土器片は調査区の北東から南西にかけて広く分布している。中期でも加曾利E4～後期の土器片は調査区の中央にかたまり、晩期の土器は先に述べたように遮光器土偶の出土した方向に向かうように、南西の狭い部分から出土している。

また、本報告の未刊行遺跡である込山C遺跡からは、前述したように縄文前期前葉・中期後葉が多く出土しているが、晩期の土器はほとんど観られないことなども勘案すると、込山遺跡群は近距離間で主体となる時期が異なりながら、長い時間に連綿として縄文集落の営まれていた地域といえる。

今回、縄文時代に所産期を求められるような遺構は検出できなかったが、攪乱されていた部分も多く、検出されなかったということも考えられる。また、出土した土器片分布状況からも時期ごとに遺跡の営まれた様相を垣間見ることができそうである。込山遺跡群中でも最も第1段丘端部に位置する込山D遺跡の持つ意味は、今後の調査機会と込山C遺跡Ⅰの報告を待ちながら注意しておきたいところである。



第53図 込山D遺跡縄文土器出土分布図

## 第2節 坂城町出土の黒耀石について

込山D遺跡からは黒耀石製の製品・剥片・未製品が少量出土している。しかし、先に述べた縄文土器を出土する遺跡の中で保地遺跡Ⅱ、込山C遺跡Ⅰ、開畝遺跡Ⅳからは比較的まとまった黒耀石の出土が確認されている。そこで、これらの遺跡における黒耀石の出土状況を比較・勘察しながら、坂城町と黒耀石について探ってみたい。なお、込山C遺跡Ⅰと開畝遺跡Ⅳの本報告がこれから成される中で、更に詳細な分析・研究により本稿の内容が訂正・修正される可能性が多分にあることを付記しておく。

### 1) 出土主要3遺跡と込山D遺跡の黒耀石出土状況

#### 保地遺跡Ⅱ (MKB. Ⅱ) 出土の黒耀石 (54・55図)

製品・未製品・素材剥片・中形原石が出土しており、製品の多くは調査報告書『金井東遺跡群 保地Ⅱ遺跡2002』にて図化紹介されている。報告書によると「黒耀石が、原石・石核・剥片・碎片合わせて、約9.3kg、約5000点出土している点が注目される。黒耀石が、石鏃や刃器といった小形剥片石器の素材であり、かつ調査面積が960㎡と決して広大ではないことを考慮すれば、その出土量は非常に多いといえる。中略……黒耀石は和田峠周辺などが原産地と思われるが、どのような経緯でこれらの黒耀石がこの地に持ち込まれ、石器が製作されたのかは今後の課題としたい。」と出土状況の把握と課題提示がされている。ここでは、図化紹介されていない未製品・素材剥片・中形原石に注目したい。中形原石は1点出土しており質量95gある。これは現在、坂城町内で確認されている黒耀石の中で最大質量である。側面に自然面と節理面を持ち、頭部調整が施され、縦長の剥片を剥離している(第54図1)。

素材剥片としたものは36点を数えるが、製品の製作過程で産出される碎片との判別は、未製品から素材の大きさを推定した。従って、各遺跡によりその判別基準は異なると考える。素材剥片としたものには大別して、断面三角形を呈しやや厚みを有するもの(第55図11~13)30点と、扁平で中には自然面を多く残すもの(第55図14~17・19・20)6点の2種類ある。

#### 開畝遺跡Ⅳ (NK. Ⅳ) 出土の黒耀石 (56図)

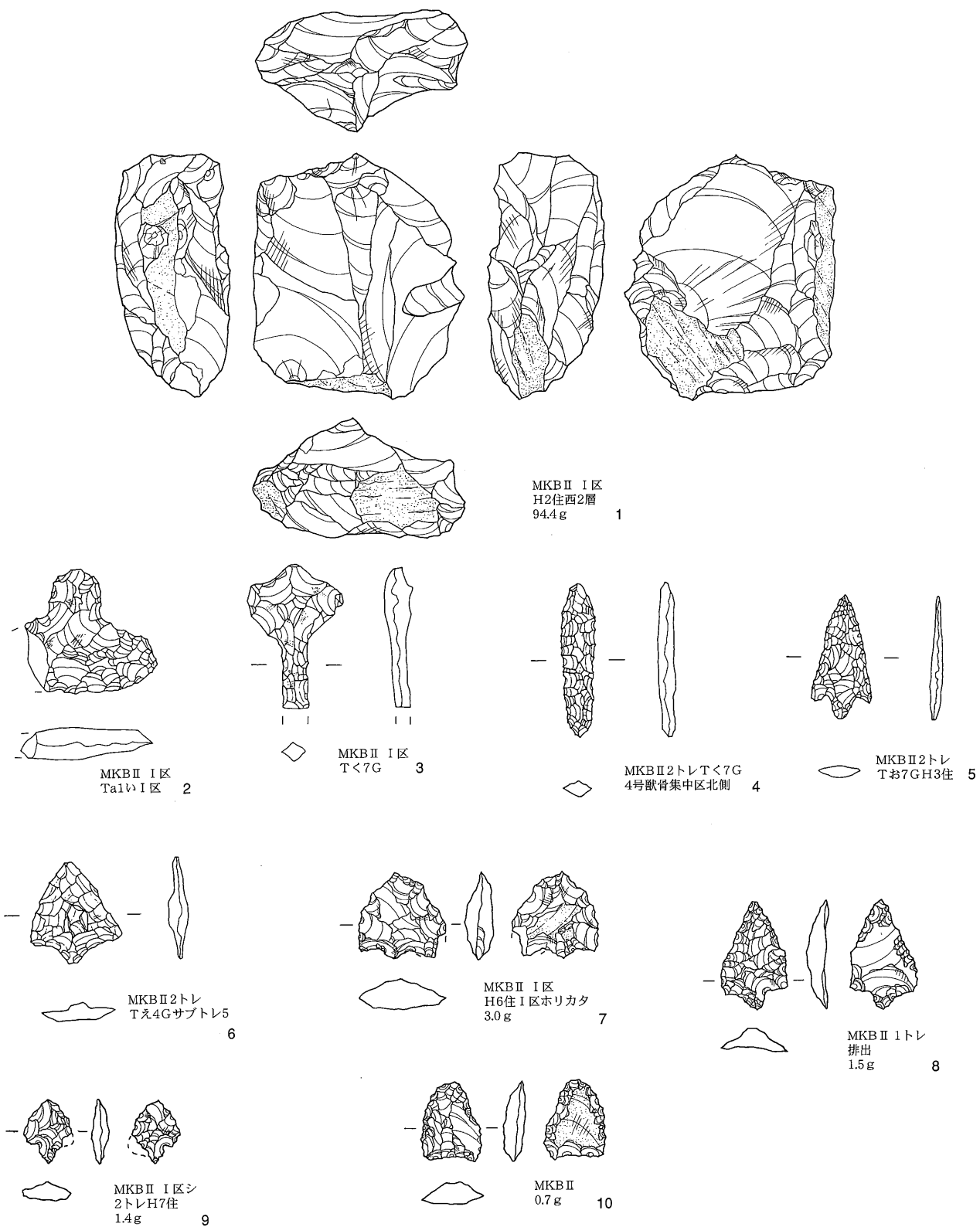
製品・未製品・石核・素材剥片・碎片が出土しているが、全体に縞状の不純物を含み小片である点が目立つ。本来ならば碎片として見過ごしてしまいそうな平均質量4.0gの小片であるが、やはり未製品から推定して、石器の素材として使用している。石核(第56図21)は直方体を呈し、やはり頭部調整が施され縦長の剥片を剥ぎ取った様子が看取できる。その質量は15.6gと保地遺跡Ⅱの石核の1/6とかなり小さい。

#### 込山C遺跡Ⅰ (SKKC) 出土の黒耀石 (57図)

製品・未製品・素材剥片・碎片・小型原石・石核が出土している。未製品から推定して、保地遺跡Ⅱの断面三角形の厚さを持つ素材剥片のおよそ1/3の大きさで、保地遺跡の平均質量9.45gに比して平均質量6.46gと小さいが、形状の類似する素材剥片が72点出土している。通常なら製品製作時の碎片と判断されそうな大きさのものを、素材として使用している。また、原石(57図38)石核(57図39)も21.1gと36.4gと保地遺跡Ⅱの1/4~1/3程度と小さめである。

#### 込山D遺跡 (SKKD) の黒耀石

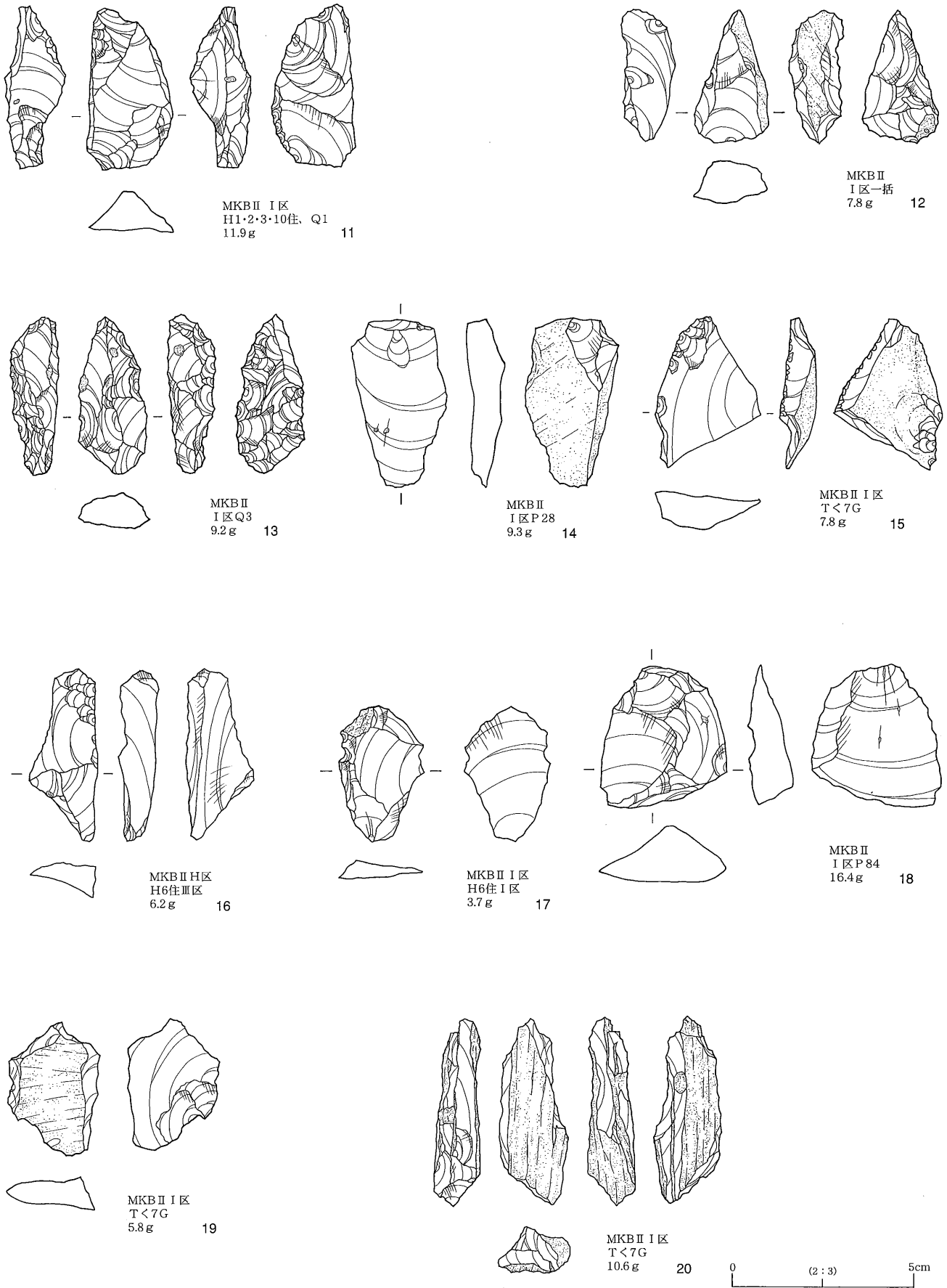
今回調査の込山D遺跡からは、第43図に示したように8点の黒耀石が出土しているのみである。石鏃などの製品は無く、素材剥片になりそうなものと碎片である。注意しておきたいのは、43図1の槍先型尖頭器で旧石器時代の所産と考えられる。しかし、込山D遺跡はもとより込山遺跡群で旧石器時代の存在を示唆し得



保地遺跡挿図出典  
2~6 「金井遺跡群 保地遺跡II」2002 転載  
1・7~48 今回図化資料 実測・トレス田中

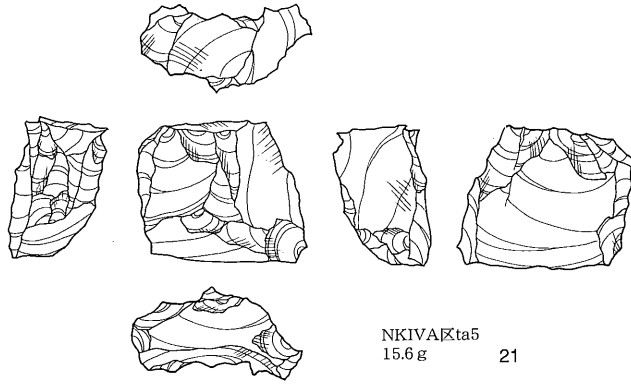
0 (2:3) 5cm

第54図 坂城町出土の黒耀石 <1>

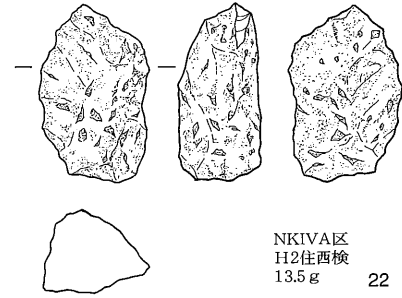


第55図 坂城町出土の黒耀石〈2〉

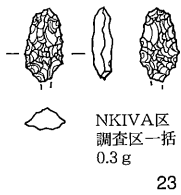




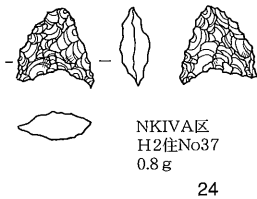
NKIVA区ta5  
15.6 g 21



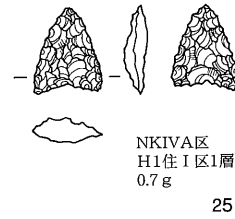
NKIVA区  
H2住西検  
13.5 g 22



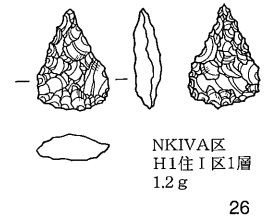
NKIVA区  
調査区一括  
0.3 g 23



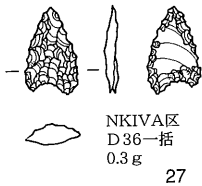
NKIVA区  
H2住No37  
0.8 g 24



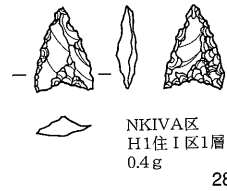
NKIVA区  
H1住I区1層  
0.7 g 25



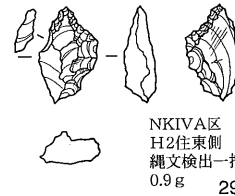
NKIVA区  
H1住I区1層  
1.2 g 26



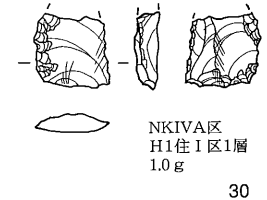
NKIVA区  
D36一括  
0.3 g 27



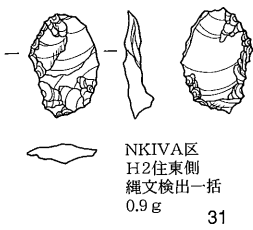
NKIVA区  
H1住I区1層  
0.4 g 28



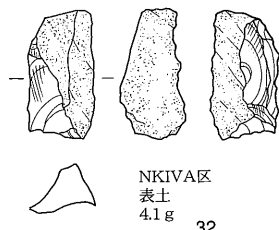
NKIVA区  
H2住東側  
縄文検出一括  
0.9 g 29



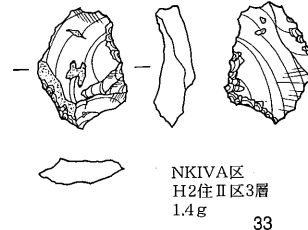
NKIVA区  
H1住I区1層  
1.0 g 30



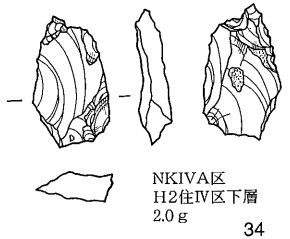
NKIVA区  
H2住東側  
縄文検出一括  
0.9 g 31



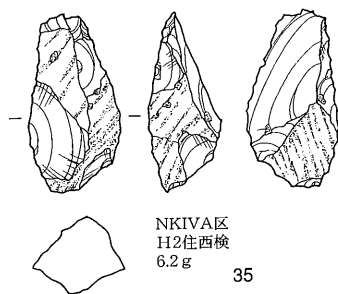
NKIVA区  
表土  
4.1 g 32



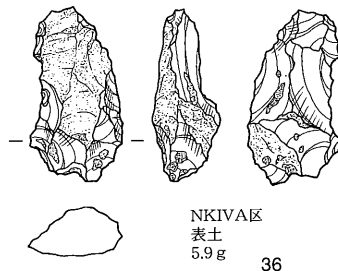
NKIVA区  
H2住II区3層  
1.4 g 33



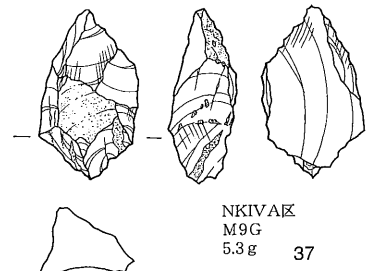
NKIVA区  
H2住IV区下層  
2.0 g 34



NKIVA区  
H2住西検  
6.2 g 35



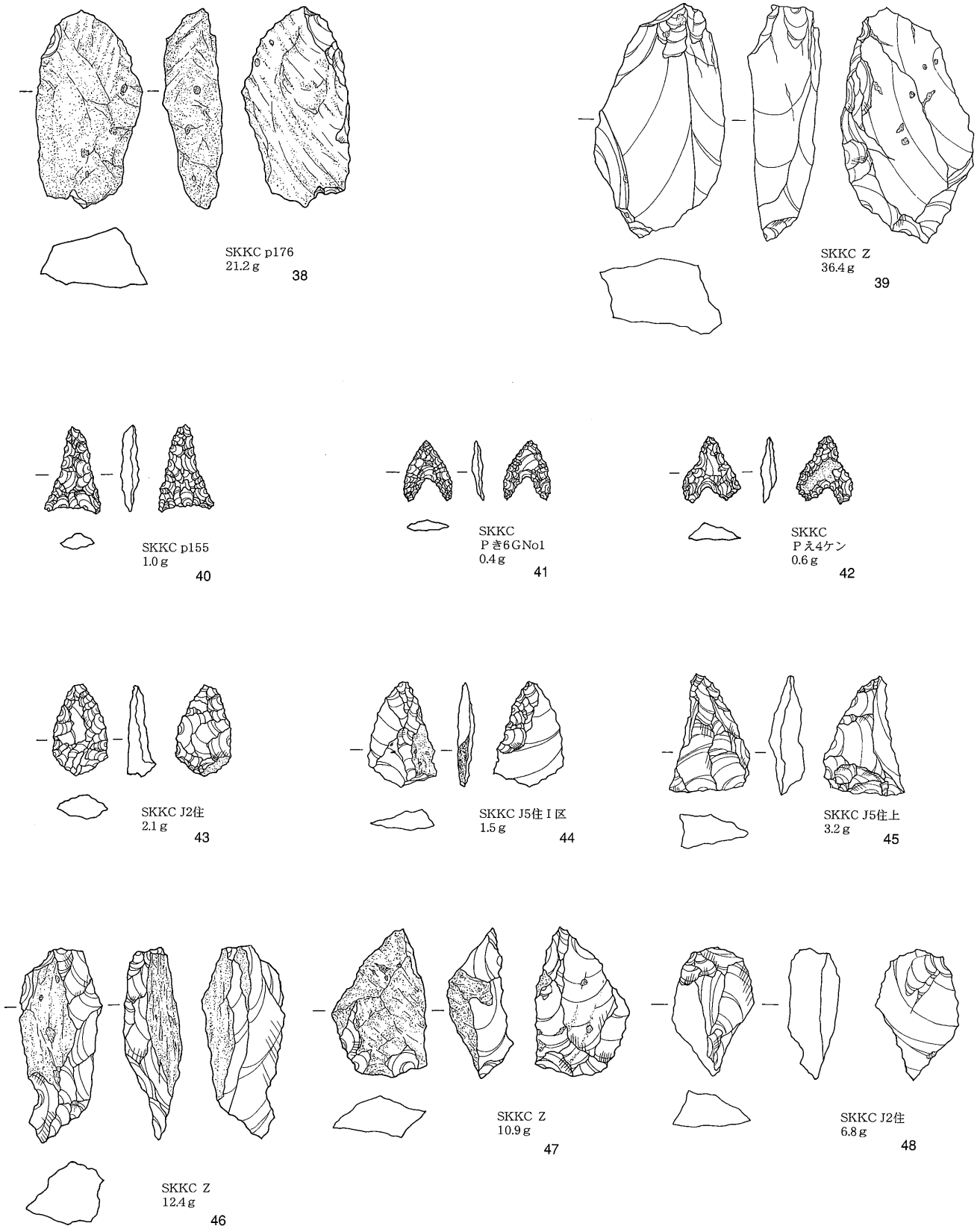
NKIVA区  
表土  
5.9 g 36



NKIVA区  
M9G  
5.3 g 37

0 (2:3) 5cm

第56図 坂城町出土の黒耀石〈3〉



0 (2:3) 5cm

第57図 坂城町出土の黒曜石〈4〉

る遺物の出土は無く、大工原氏の言ういわゆる「搬入旧石器」の可能性もある（注1）。

## 2) これらの遺跡を比較して

これらの3遺跡の黒耀石出土状況を時期ごとに概観すると、縄文前期、中期後半に営まれた集落である込山C遺跡では、住居址は前期に、土坑は中期後半に帰属する傾向にある。前期の土器には神ノ木式、有尾式、黒浜式、諸磯b・c式期の土器が出土しているが、傾向としては千曲川水系の土器群が多くを占めそうである。中期後葉の土器には加曾利Ⅲ式の土器が多く、千曲川水系の唐草紋系土器は殆ど見当たらない。黒耀石は主に住居址から出土するが、素材剥片と考えられるものは先に述べたように小さめである。しかし、黒耀石の質としては不純物が特に多いというわけではない。保地遺跡Ⅱは縄文時代後期～晩期に形成された集落・墓域である。出土する土器には堀之内2式、加曾利B式、中ノ沢式、大洞B～C、安行3C式、佐野式、氷式土器があり、全体には千曲川水系に分布する土器群が多く占める傾向にある。唯一中形原石を出土しており、素材剥片は比較的大きく、黒耀石の質も不純物が少なく良質である。開畝遺跡Ⅳは本調査が終了したばかりで、細かな整理作業はまだ行なわれていないため、土器洗浄・注記作業・接合作業の最中に観察した程度であるが、黒耀石の出土量は坂城町としては比較的多いものの、縄文土器の量は少ない。それらの縄文土器には籠畑式、五領ヶ台式、曾利Ⅳ式土器が観られた。これら、縄文前期末～中期の土器は千曲川水系に分布する土器群が多く観られる。このように縄文前期終末～中期初頭の土器片が共伴する開畝遺跡Ⅳでは、前の2遺跡では碎片として判別されるような小片で不純物の多い黒耀石が、素材として利用されている。

これらの遺跡から出土する製品の大きさにも、違いが認められるが、保有出来得る黒耀石の質や大きさ・量と云った物理的要因に制約されたことを考えると、極めて合理的である。つまり、黒耀石製の製品は素材剥片の大きさに制約され、その素材は遺跡内に搬入された黒耀石の在り方と濃密な関係にあることが言えるわけである。そこで、次に黒耀石原産地の各時期の様相について観てみたい。

## 3) 原産地との関係

坂城町では、出土した黒耀石の科学的産地同定は未だ行なわれていないため、ここでは直接的な産地との関係について確定することはできない。しかし、最近急速に増加した縄文時代の黒耀石流通に関する研究成果を勘案しながら、坂城町の現状について概観しておきたい。

さて、最近の発掘調査に伴う縄文時代遺跡における、黒耀石産地の科学的同定の報告資料が多くなってきている。それらを観ると、かつて高校の歴史教科書で「黒耀石の原産地として有名な和田峠」という記述が普遍的になされ、極当然のように信州黒耀石＝和田峠と覚えたものであったが、発掘調査に伴う科学的産地同定の結果では鷹山産地・諏訪星ヶ台のものも多く搬入されており、高校の教科書に「鷹山遺跡採掘址」の記述も観られるようになった。また、蓼科冷山群の搬入時期や量も注意しておきたい資料である。

馬場伸一郎氏は「縄文前期末以降、中期～後期初頭・晩期後葉・弥生前期・中期前葉～中葉は諏訪星ヶ台群が点数比で9割以上を占める点で一致する。」（馬場 2006）と述べている。

また、原産地の見地より宮坂清氏は原産地をハヶ岳（茅野市の冷山・播鉢山、八千穂村の麦草峠、佐久町の双子池）、和田峠（下諏訪町の和田峠西、和田村の東餅屋・小深沢・男女倉）、霧が峰（下諏訪町の星が塔・星ヶ台・観音沢・東俣）の3つのエリアに分けてその時期別搬入傾向を以下のように述べている。「ハヶ岳産の黒耀石は、先土器時代には多く利用され、関東地方や東海地方にも運ばれているが、縄文時代になると遠隔地に運ばれる黒耀石は、ほとんどが霧が峰産である。」（宮坂 2003）更に、建石徹、二宮修治両氏は

科学的な黒耀石産地推定分析の結果をもとに、「縄文時代前期（特に諸磯式期）の遺跡出土黒耀石資料の産地の動向を概観すれば、当該期の当該地域（注2）では諸磯b式中段階以前は星ヶ塔産、小深沢産が並存する傾向、諸磯b式新段階以降は星ヶ塔産が極端に卓越する傾向が見て取れる。これは、大工原豊氏によってまとめられ、考察された他の分析者による当該期当該地域の全体的な動向ともよく一致する。」（建石・二宮 2003）と黒耀石の産地動向が急激に変化する時期のあることを大工原氏同様に指摘をしている。

大工原豊氏は、『黒耀石の交流をめぐる社会—前期の北関東・中部地域—』の中で黒耀石の流通量を住居址一軒あたりの出土量により、縄文前期の中での変化に注目している。それによると関山I式期が最も多く、有尾式期では徐々に減少し、諸磯b式期で出土量が大幅に増加し、原石の集積例も多くなる事を指摘しており、諸磯c式期では再び緩やかに減少するとの傾向把握をしている。ここで、有尾式期と諸磯b式期の急変に更に注目し、有尾式期では黒耀石流通量の減少・石鏃自体の出土量の減少と、石鏃の黒耀石占有率低下があり、諸磯b式期では石鏃数の大幅増加と石鏃の黒耀石占有率の回復を指摘している。原産地分析の結果として、縄文早期後半～有尾式期では和田峠系が主体、次いで星ヶ塔系（霧が峰）、若干男女倉系。諸磯b古～中段階では、星ヶ塔の割合が増え、和田峠系が減少する。この傾向は中期五領ヶ台式期まで続くとしている。（大工原 2002）

鷹山遺跡群黒耀石採掘址の調査では、縄文中期初頭・前葉・中葉の土器出土の報告はまだ無い。池谷信之氏によると、曾利IV段階から採掘が再開され最盛期を迎えると言われる。（池谷 2005）

では、これらの傾向と、坂城町の先に挙げた3遺跡から出土した黒耀石の傾向を勘案すると、坂城町出土の黒耀石の出土傾向と原産地の関係がおぼろげながら見えてくる（第15表）。特に和田峠系鷹山遺跡群採掘址で出土した土器との関連に注目したい。鷹山遺跡群採掘址で土器が出土しない時期には該期の採掘・搬入の可能性が非常に低いことになるわけだが、該期の開畝遺跡IVでは石質も良いとは言えず、素材剥片も小さいものが多い傾向にある。奇しくも、宮坂氏によると鷹山遺跡群を含む和田峠産が減少し、霧が峰産が大半を占める時期にあたり、坂城町からは更に峠を越えねば豊富な黒耀石が入手しづらかったであろうことが考えられる。開畝遺跡IV出土の黒耀石中で注意したいのは、旧剥離面を残した石やズリ様の小粒黒耀石の存在である。つまり遺跡内での特定原産地産出石の利用率減少は長期的な採掘量の減少とあいまっている可能性も出てくることになる。

第15表 坂城町出土の黒耀石傾向

遺跡名	出土土器	黒耀石の傾向	鷹山採掘址出土土器	北関東・中部の傾向
込山C I	神ノ木・有尾・黒浜・関山・加曾利E・唐草紋系	保地II遺跡より小さ目で、形状の類似する素材剥片が多い。	前期あり。中期なし。	有尾期は流通量が徐々に減少期へ（大工原2002）
込山D	井戸尻・五領ヶ台期・唐草紋系・加曾利E IV・晩期	出土量少なく、大きな素材はない。搬入旧石器あり。	後晩期あり。中期なし。	後晩期は鷹山遺跡群採掘が再開最盛期（池谷2005）
開畝IV	前期末～中期初頭	石核15.6gあり。自然面・節理条を多く残り、透度の低い石が多い。ズリ石様の原石あり。旧剥離面が風化した面を有する石がやや目立つ。素材剥片は小さく、形状の類似するものは少ない。しかし、量は多い。	なし	和田峠産が減少し霧が峰産が大半（宮坂2003）
保地II	称名寺・堀之内・加曾利B・安行・中ノ沢・佐野・氷	中型原石95gあり。全体に出土量は多く、形状の類似した厚みをもつ、大き目の素材剥片がまとまっている。製品が非常に多い。	後晩期あり。	鷹山遺跡群採掘が再開最盛期（池谷2005）

一方、込山C遺跡Ⅰは、大工原氏が黒耀石の流通量が徐々に減少すると指摘した黒浜期と、鷹山遺跡群採掘址で土器の出土確認がされていない中期にあたる。出土する黒耀石はやや小さめだが形状の類似する素材剥片が多く出土しており石の質の悪さはさほど感じられない。

保地遺跡Ⅱは後期～晩期にあたり、鷹山遺跡群採掘址で土器の出土が確認でき、宮坂氏が鷹山遺跡群採掘が再開され、最盛期を迎えたとして指摘する時期にあたる。坂城町で現時点では最大の原石と、厚みを持った形状の揃った大き目の素材剥片が出土している。黒耀石全体の総量も多く、製品の数も多い。これは、坂城町の該期の住人が黒耀石を容易に入手できたことを物語っていると言えよう。

以上のように、坂城町の黒耀石の出土状況は和田峠系の産地の在り方と深い関係が言えそうであり、つまり和田峠系の産地からの搬入の可能性が指摘できるのである。

### まとめと今後の課題

黒耀石の原産地推定には、科学的分析が最も有効であることは言うまでもない。それも、一遺跡から複数の原産地産出石が出土する現状においては全点分析が理想である。しかし、発掘調査を終えた遺跡の報告書を発刊するまでの時間的・経済的条件に制約を多く受ける中で、全ての遺跡・全ての遺物を科学的分析にかけることは不可能に近い。それでも、遺跡内から出土した黒耀石の状況とこれまでに、科学的分析をもとに先駆研究者達がまとめて来た傾向を注意深くクロスオーバーさせることで、ある程度の傾向が見えてくるのではなからうか。そのためには、①これまでに「製品」のみを図化紹介してきた報告法を見直し（注3）、製品→未製品→素材剥片と遡逆しながら遺跡ごとにその状況把握をすることが必要になる。また、今回は時間等の問題でできなかったが、②使用されずに廃棄扱いになるだろう碎片の大きさや質について注意しておく必要性を感じる。立科町大庭遺跡は原産地まで18kmほどのいわゆる原産地直下の遺跡であり、立科町内蓼科山麓にも黒耀石採掘址が存在するのではないかと囁かれている地域であるが、黒耀石の出土量が非常に豊富で100gを越える原石も多く出土している。同時に碎片に分類できるものが、比較的大きいことが言えそうである（注4）。原産地に近く良質の黒耀石を容易に入手できた集落では贅沢な石の使い方をしていたのかもしれない。同様に、原産地から離れた地域でも黒耀石を豊富に保有できた集落では碎片の扱い方に違いがあっても不思議ではない。つまり、碎片のあり方が黒耀石の保有程度のパロメーターになるのではないかと予察する。同様に原石や石核の図化紹介も重要になってくる。以上の①②について、遺物の取り扱い方を見直すことで科学的分析に出せない場合も資料の蓄積となり、黒耀石の流通社会に近づけるのではないだろうか。

また、搬入旧石器の存在等を考えると、黒耀石の入手困難な時期においては集落の前時期に使用・廃棄された黒耀石の再利用の可能性も出てくるわけであり、出土した黒耀石の帰属時期判別も難しいものになる。つまり、同時期異系統土器だけではなく、時期の異なる縄文土器と黒耀石産出・搬入傾向にも注意していく必要があろう。遺跡というものが「遺された痕跡」であるという性格上、発掘調査を通じて私たちの目前に姿を露わにした遺物・遺構はその場において最終的に遺されものであることを忘れてはならない。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、次の各氏にご教示およびご指導を賜った。記して謝辞としたい。伊藤順一・大竹幸恵・高橋清文・三木陽平・宮田忠洋・綿田弘美・山口逸弘・日沖剛史・（順不同敬称略）

注1) 尖頭器か否かの判断については三木陽平氏のご教示をいただいた。

注2) 建石・二宮両氏の対象とした遺跡は、山梨県明野村寺前遺跡・同県大泉町天神遺跡・同県屋代町花鳥山遺跡・長野県諏訪町東俣遺跡・同県同町一の釜遺跡・同県茅野市北山菫蒲沢A遺跡・群馬県笠懸町稲荷山遺跡・同県藪塚本町藪塚遺跡(台山地点)・同県富士見村愛宕山遺跡・同県同村広面遺跡・同県藤岡市上丹生屋敷遺跡・同県安中市中野谷松原遺跡・同県同市道前久保遺跡

注3) 県内では既に、旧長門町『滝遺跡』で大竹幸恵氏により製品以外の分類・分析・図化紹介がされている。

注4) 立科町大庭遺跡は既に報告書の刊行を終えているが、筆者は発掘調査を担当した者の責任として立科町教育委員会のご厚意により、新たに分類と実測を再度することができた。別の機会に補足報告として資料公開したい。

## 引用参考文献

- 『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』1994 坂城町埋蔵文化財調査報告書第1集 坂城町教育委員会  
『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』1995 坂城町埋蔵文化財調査報告書第4集 坂城町教育委員会  
『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』1996 坂城町埋蔵文化財調査報告書第5集 坂城町教育委員会  
『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』1996 坂城町埋蔵文化財調査報告書第7集 坂城町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査報告書1995』1996 坂城町埋蔵文化財調査報告書第9集 坂城町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査報告書2000』2001 坂城町埋蔵文化財調査報告書第18集 坂城町教育委員会  
『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』2002 坂城町埋蔵文化財調査報告書第20集 坂城町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査報告書2001』2002 坂城町埋蔵文化財調査報告書第21集 坂城町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査報告書2002』2003 坂城町埋蔵文化財調査報告書第22集 坂城町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査報告書2003』2004 坂城町埋蔵文化財調査報告書第24集 坂城町教育委員会  
『町内遺跡発掘調査報告書2004』2005 坂城町埋蔵文化財調査報告書第25集 坂城町教育委員会  
『長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』1988 長野県史刊行会  
『坂城町誌 中巻』1981 坂城町誌刊行会  
『鷹山遺跡群Ⅰ』1989 長門町教育委員会 鷹山遺跡群調査団編  
『鷹山遺跡群Ⅲ』1999 長門町教育委員会 鷹山遺跡群調査団編  
『鷹山遺跡群Ⅳ』2000 長門町教育委員会 鷹山遺跡群調査団編  
『鷹山遺跡群Ⅴ』2001 長門町教育委員会 鷹山遺跡群調査団編  
『鷹山遺跡群Ⅵ』2003 明治大学黒耀石研究センター用地内遺跡発掘調査団編  
『滝遺跡』2001 長門町教育委員会 大竹幸恵・勝見譲・田中浩江・鳥居亮編  
『糸井宮前遺跡Ⅱ』1986 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
『中野谷地区遺跡』2 2004群馬県安中市教育委員会  
大工原豊2002『黒耀石の交流をめぐる社会—前期の北関東・中部地域—』『縄文社会論(上)』安齊正人編  
堤 隆2002『中部高地における黒耀石研究の現状とその課題』『黒耀石文化研究』創刊号 明治大学人文科学研究所  
宮坂清2003『黒耀石の原産地』『ストーンロード—縄文時代の黒耀石交易—』安中市ふるさと学習館  
建石徹・二宮修治2003『黒耀石の産地推定』『ストーンロード—縄文時代の黒耀石交易—』安中市ふるさと学習館  
池谷信之2003『潜水と採掘、あるいは海を越える黒耀石と山を越える黒耀石—環中部高地における縄文時代神津島黒耀石と信州系黒耀石の盛衰、その予察として—』『黒耀石文化研究』第2号 明治大学人文科学研究所  
池谷信之2005『「海の黒耀石」から「山の黒耀石」へ』『考古学研究』52-3 考古学研究会  
馬場伸一郎・望月明彦2006『中部高地の弥生時代を中心とした黒耀石産地組成とその推移について』『長野県考古学会誌』115号 長野県考古学会

## 第Ⅶ章 総括

本遺跡の発掘調査によって検出された遺構は弥生時代中期吉田式期～後期箱清水式期の住居址及び古墳時代前期（初頭）の住居址、奈良・平安時代の住居址の合計8棟であった。発掘調査区域が約390㎡と狭小な上に、調査区の中央部付近が攪乱され、遺構が全く検出されなかったことを考慮するともっと多くの住居址が存在したことが考えられる。

込山遺跡群は込山A・B・C・D・E遺跡と5遺跡に分けられ、今までの発掘調査等の状況から縄文時代～平安時代の集落址と考えられている。細かく見ると縄文時代早期～中期の遺物や遺構の検出の見られた込山C遺跡の存在、採集遺物や試掘調査の状況から後・晩期と考えられる込山D遺跡は縄文時代の集落址と考えられていた。弥生時代では込山B遺跡、込山C遺跡Ⅱ・Ⅲの調査結果から中・後期の住居址等の分布が見られている。古墳時代以降については、前出の調査や込山廃寺の存在が見られるが、どちらかと言うと平安時代の集落址が込山B遺跡や込山C遺跡に存在していることが発掘調査の状況から判明している。

今回の調査によって、僅か約150m西に所在する込山C遺跡Ⅱ・Ⅲの発掘調査によって見られた弥生時代中・後期の集落址の広がり確認でき、更に古墳時代初頭に位置づけられる住居址の検出によって、その集落が継続していた事が見られた事は大きな成果であった。また、試掘調査等によって予想されていた縄文後・晩期の遺物の出土以外にも中期の遺物の出土が見られ、時期的にもより古い遺跡と位置づけられるようになった。なお槍先型尖頭器の出土については、搬入あるいは混入した可能性が考えられるが、周辺に後期旧石器時代の遺跡の存在を求める事も可能となった。また、時代が下って江戸時代の北国街道の制定に伴う、坂木宿に係る遺構の検出も大きな成果の一つである。今回の調査地は当時の坂木宿の宿場に置かれた旅籠等があったと推定される場所で、その当時に関連する銭貨や簪等の検出が今後の坂木宿を考える上で大変貴重な研究資料となる。

以上のように今回の発掘調査によって、今まで考えられていた込山D遺跡は縄文時代後・晩期の集落ではなく、それ以前に遡る遺物の出土が見られ、「坂城町鉄の展示館」及び「坂城町中心市街地コミュニティセンター」建設に伴う込山C遺跡Ⅱ・Ⅲに検出された弥生時代の集落址が本調査区域まで広がり、更に古墳時代初頭までその集落は継続していたこと、近世北国街道坂木宿関連の資料の検出が大きな調査の成果である。縄文時代の集落については本遺跡内において、未だ明確な住居址及び土坑址等の検出が見られない事を考慮し、今後近隣においての発掘調査の成果に期待するしか術はないのが実情である。

今回の発掘調査の成果から、込山遺跡群の遺跡状況を概観すると南側に所在する込山C遺跡（坂城保育園周辺）には早期～後期の遺跡が立地し、千曲川の河岸段丘に近い本遺跡内に縄文後晩期の遺物が見られるのではないかと予想できる。更に本遺跡に程近い込山C遺跡Ⅱ・Ⅲにおいて見られた弥生時代中・後期の集落は、本遺跡周辺が核になるのではないかと想像できる。また、時代は下って平安時代の古代寺院である込山廃寺の関係から込山B遺跡及び込山C遺跡といった、現在の坂城小学校周辺を該期の寺院・集落域と見る事ができるように思われる。詳細は今後の発掘調査の成果に期待したい。

また、坂城地区には古墳が少ない状況が遺跡分布図から看取できるわけであるが、それを実証するが如く今回も古墳時代中～後期の住居址の検出がなかったと言える。古墳時代の集落址の分布状況の解明もまた今後の課題と言えよう。





# 写真図版



込山D遺跡遠景  
北方の千曲川を臨む



込山D遺跡遠景  
南方の葛尾を臨む





H1号住居址 東より



H2号住居址 西より



H2号住居址カマド 西より

H3号住居址 西より



H4号住居址 南より



H6号住居址 西より





H6号住居址 炉 西より



H6号住居址  
遺物出土状況 北より



H7号住居址 西より



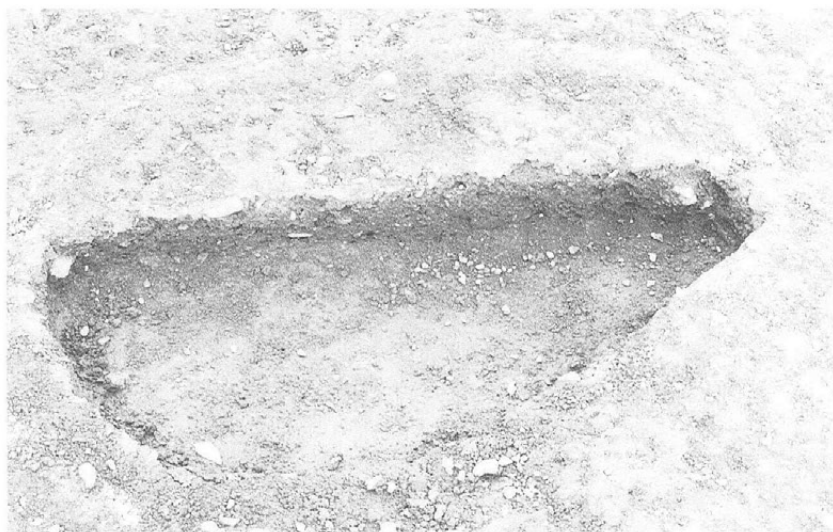
H8号住居址  
遺物出土状況 西より

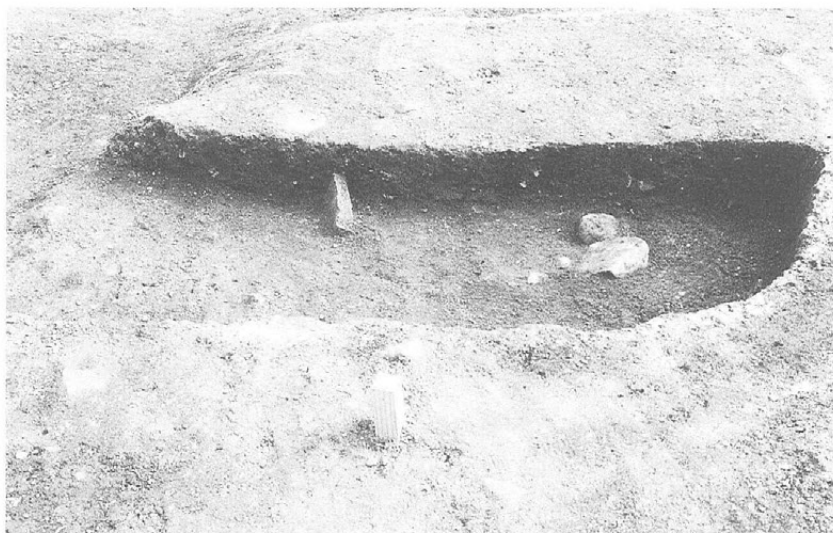


D1号土坑 北より



D2号土坑セクション 北より





H3号土坑セクション 東より



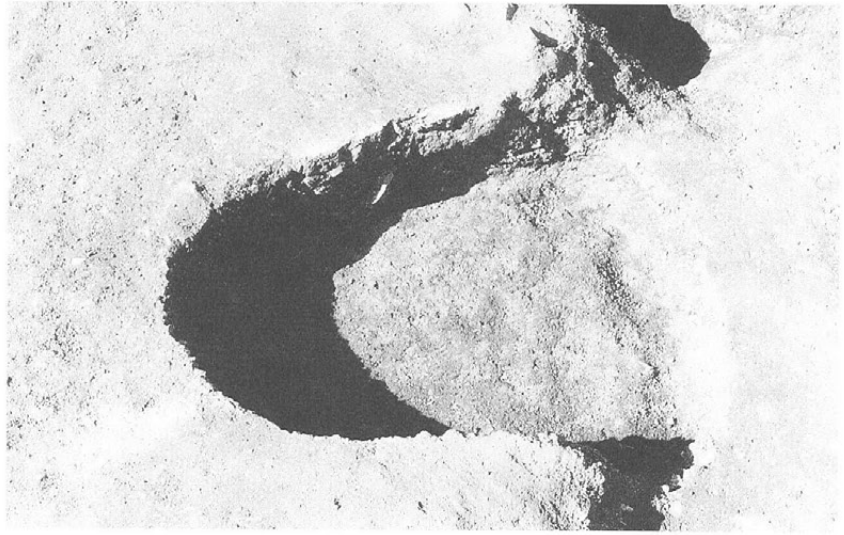
D4号土坑  
古銭出土状況 北西より



D4号土坑  
古銭出土状況 北西より



H6号土坑 東より



D8号土坑 北より

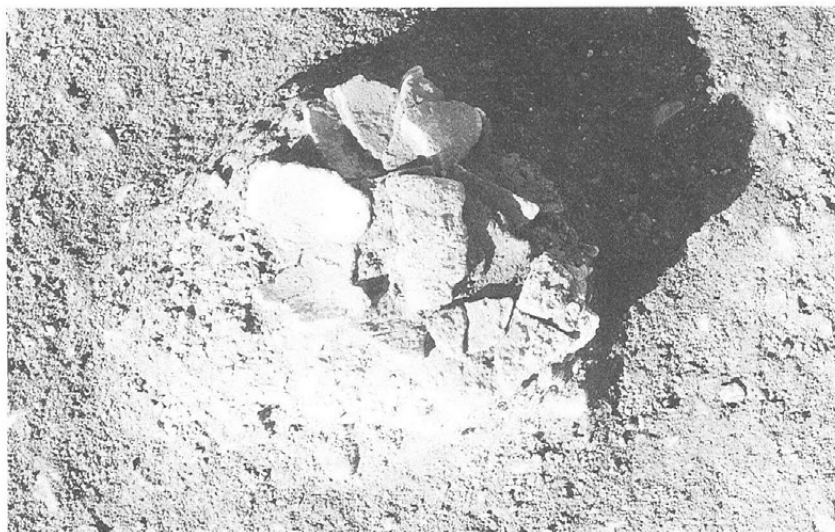


D9号土坑 北より





Ta1号竖穴状遺構 西より



石製模造品出土状況 東より



骨出土状況 東より



7-1  
(1:3)



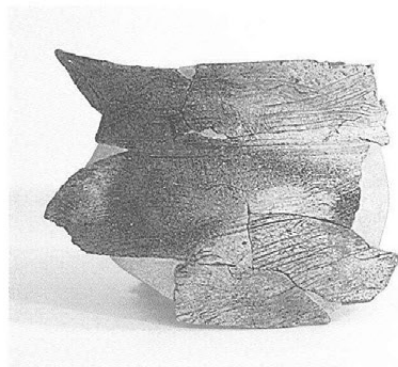
7-5  
(1:4)



7-7  
(1:4)



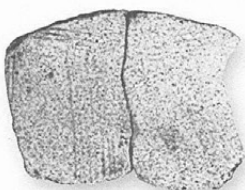
7-11  
(1:4)



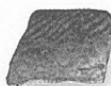
7-21  
(1:4)



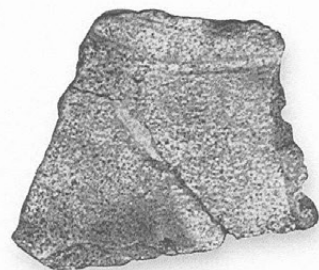
7-18  
(1:3)



8-15



8-5



8-12



8-27



8-28



8-18



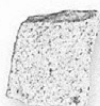
8-24



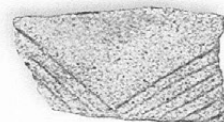
8-30



8-26



8-25



8-31

H1号住居址出土土器



11-1



11-7



11-11



11-34



11-14



11-32

H2号住居址出土土器 (1:4)



19-4 (1:4)



19-5  
(1:4)



H3号住居址出土土器 14-15  
(1:4)



19-31 (1:4)



19-32 (1:4)



19-7 (1:3)



19-6 (1:3)



19-8 (1:3)



19-12 (1:3)



19-15 (1:3)



19-23 (1:3)



19-14 (1:3)

H6・7号住居址出土土器



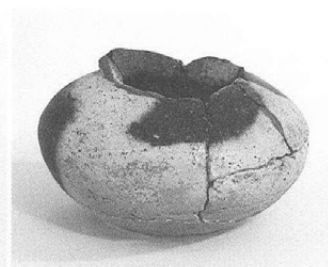
21-24 (1:4)



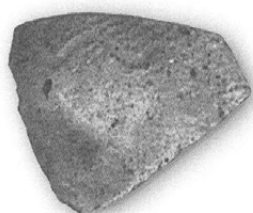
21-17 (1:4)



21-14



21-15



21-1



21-2



21-7



21-9



21-10

H8号住居址出土土器 (1:3)



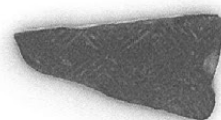
41-4 (1:4)



41-7 (1:4)



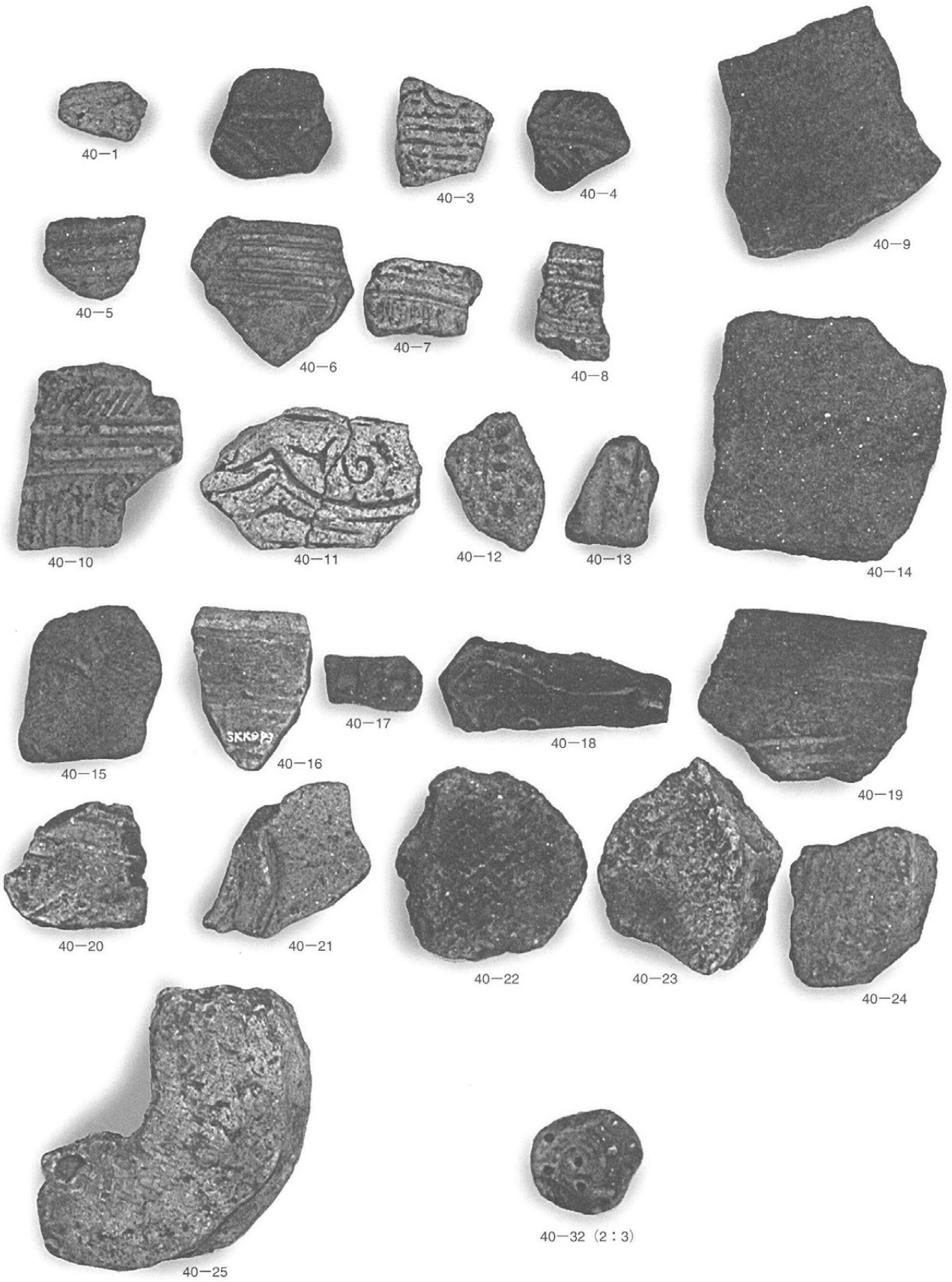
41-11 (1:3)



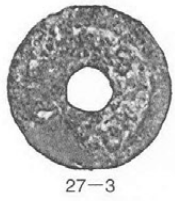
41-12 (1:3)

グリッド出土土器





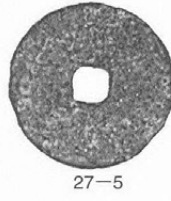
縄文土器 (1:3)



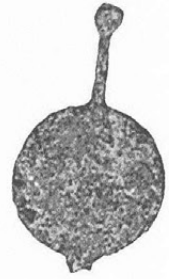
27-3



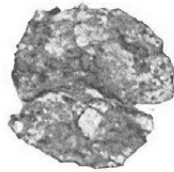
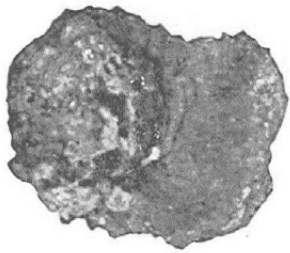
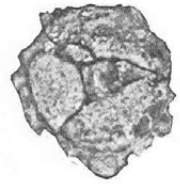
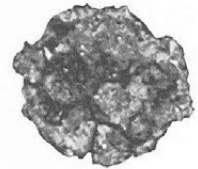
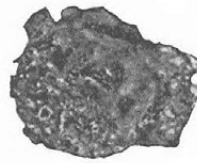
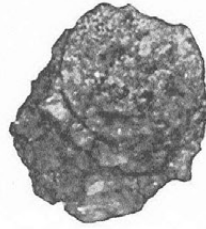
27-4



27-5



27-2



27-1

H4号土坑出土遺物 (2:3)



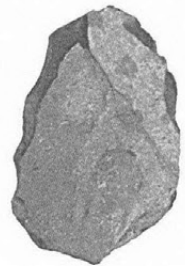
43-1 (2:3)



43-9 (2:3)

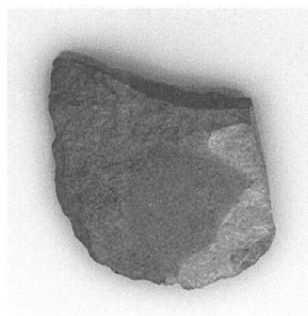


44-3 (1:3)

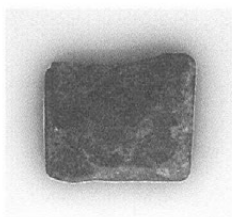


44-5 (1:3)

石 器



44-1



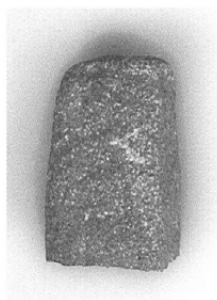
44-2



44-8



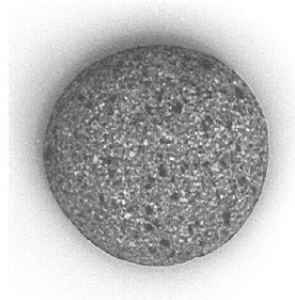
44-6



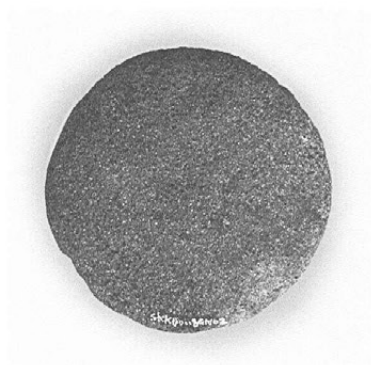
44-7



44-9



44-10



44-11



44-12 (1:6)



水晶



水晶

石器 (1:3)



報告書抄録

ふりがな	こみやまいせきぐん こみやまでいーいせき
書名	込山遺跡群 込山D遺跡
副書名	長野県埴科郡坂城町八十二銀行店舗建設事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第28集
編集者名	助川 朋広・田中 浩江
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2222 TEL 0268-82-1109
発行年月日	2007年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こみやまでいーいせき 込山D遺跡	ほにしなぐんせきか きまちおのおあさかき 埴科郡坂城町大字坂城	20521		36° 26′ 42″	138° 11′ 53″	2005年10月17日～ 2006年1月27日	390.04㎡	八十二銀行店舗建設事業 に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
込山D遺跡	集落址	縄文～明治	竪穴住居址 8棟 土坑址 10基 竪穴状遺構 1基 ピット 14基	縄文土器・弥生 土器・土師器・ 須恵器・石器・ 古銭	弥生～平安時代の集落址、および近世墓の調査

## 坂城町埋蔵文化財調査報告書

	『開畝製鉄遺跡—第1次調査報告書—』	1977
	『開畝製鉄遺跡—第2次調査報告書—』	1978
	『東裏遺跡』	1983
	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』（概報）	1993
	『南条遺跡群 塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群 塚田遺跡Ⅱ』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』	1996
第7集	『中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ』	1996
第8集	『上五明条里水田址』	1996
第9集	『町内遺跡発掘調査報告書1995』	1996
第10集	『坂城町試掘調査・立会い調査報告書』	1996
第11集	『町内遺跡発掘調査報告書1996』	1997
第12集	『戌久保遺跡・町横尾遺跡』	1998
第13集	『込山Bほか 発掘調査報告書1997』	1998
第14集	『町内遺跡発掘調査報告書1998』	1999
第15集	『町内遺跡発掘調査報告書1999』	2000
第16集	『開畝遺跡Ⅲ』	2000
第17集	『中之条遺跡群 北川原遺跡Ⅱ』	2001
第18集	『町内遺跡発掘調査報告書2000』	2001
第19集	『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』	2001
第20集	『金井東遺跡群 保地遺跡Ⅱ』	2002
第21集	『町内遺跡発掘調査報告書2001』	2002
第22集	『町内遺跡発掘調査報告書2002』	2003
第23集	『豊饒堂遺跡Ⅲ』	2004
第24集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2003』	2004
第25集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2004』	2005
第26集	『坂城町町内遺跡発掘調査報告書2005』	2006
第27集	『込山遺跡群 込山C遺跡群Ⅱ・Ⅲ』	2006
第28集	『込山遺跡群 込山D遺跡』（本書）	2007

---

発行日 2007年3月30日  
編集者 坂城町教育委員会  
〒389-0602 長野県埴科郡坂城町大字中之条2222番地  
TEL 0268 (82) 1109  
印刷者 信毎書籍印刷株式会社  
〒381-0037 長野県長野市西和田1丁目30番3号  
TEL 026 (243) 2105

---

